780-36
1200501601792
780
36

岩波文庫

1873—1874

納本

獵人日記

上

ツルゲーネフ作
中山省三郎譯

岩波書店

35

帝國圖書館藏

岩波文庫
1873—1874

獵人日記

上

ツルゲーネフ作
中山省三郎譯

岩波書店

昭和十四年十一月
帝國圖書館藏

《渡り》を待つツルゲーネフ（三二頁）　ボジャスチンスキー作

780
36

目次

ホーリとカリーヌィチ……七
エルモライと粉屋の女房……三二
苺の泉……五五
郡の醫者……七四
わが隣人ラデーロフ……九四
郷士オフシャニコフ……一〇九
リゴフ……一四七
ビェージンの草原……一六九
クラシーワヤ・メーチャのカシヤン……二〇八
註……二四五

獵人日記上

偶〻ボルボフ郡からジーズドラ郡へやつて來たことのある人は、オリョール縣の人たちとカルーガ縣の人たちの性質に際立つた相違のあることに驚かされたことであらう。オリョールの百姓は背が大きくなく、やや猫背氣味で、樣子がいかにも氣むづかしさうで、胡散くさげな眼つきをして、篁柳で造つた見すぼらしい小舍に暮らし、地主の畑へ出て夫役を勤めるばかりで、商賣などはせず、粗末な食べ物を食べて、靴の代りに樹の皮づくりの沓を穿いてゐる。ところが、カルーガの小作百姓になると、ゆつたりした松の木づくりの家に住まつてゐて、背も高く、わだかまりのない、陽氣な眼つきをしてゐて、顏もきれいで、色も白く、牛酪や木脂を商ひ、日曜祭日にはいつも長靴を穿いてゐる。オリョールの村（ここではオリョール縣の東部のことをいつてゐるのであるが）は、大抵はどうかかうか泥沼に變へられた谿に近く、すつかり開墾された野原の眞ん中にある。いつも重寶な楊の木の幾本かと、二三本のひよろひよろの白樺を除けたら、一露里四方が間に一本の立木すらも眼に入らない。百姓の小舍と小舍とは互ひに引つ附き合つてゐて、

屋根には腐つた麥藁がむくれ返つてゐる……。カルーガの村は、これとは反對に、多くは森に圍まれてゐて、百姓の小舍もずつとゆとりがあつて、しつかりしてゐて、それに屋根も板葺になつてゐる。門もしつかり締まつてゐて、生垣も壞れたり引つくり返つたりはしてゐないので、通りすがりの豚に見舞はれるやうな氣づかひもないのである……。遊獵家にとつてはカルーガ縣の方がずつとましである。オリョール縣だと、五年もすれば、わづかに殘つてゐる森や藪地は、あとかたもなくなり、沼地の跡らしいところもなくなるに相違ない。然るにカルーガ縣の方には、保安林が何百露里となくつづいて、沼地は何十露里に及び、例の品のよい鳥――松鷄も今なほ跡を絶たずに殘つてゐる。それに人なつこい田鷸も棲んでゐるし、ちよつかいな鷸鴣がけたたましく飛び立つて、擊ち手や獵犬を喜ばせたり、びつくりさせたりするのである。

遊獵家としてジーズドラ郡を訪れたとき、とある野原でカルーガの小地主でポルトィキンといふ人に出遭つて近づきになつたが、この人はなかなか熱心な遊獵家で、從つて相當に立派な人物でもあつた。もとより弱點もあるにはあつた。例へば、縣内の物持の年頃の娘といふ娘に言ひ寄つては、見事に臂鐵を食つて、すげなく求婚を拒絶され、家へも寄せつけられなくなつては、すつかりがつかりしてしまつて、胸の悲しみをあらゆる友人知己に吹聽に及んで、娘の親には相變らず未練がましく、自分の畑でとれた酸つぱい桃やら、そのほかの熟れない果物なんどを贈るの

であつた。それから好んでいつも相變らずの同じ話を繰り返して聞かせる。御自分では大いに面白いものと思つてゐるにも拘らず、一向に他人樣は面白いと思つたためしがないのである。またアキム・ナヒモフの作品や、『ピンナ』といふ小說を賞讚してゐる。話をするときには吃る。自分の獵犬には天文學者といふ名をつけてゐる。「けれども」といふべきところを「けれどもか」といふ。家ではフランス料理なるものをやつてゐるが、その奧の手といふものは、お抱への料理人にいはせると、すべての食べ物といふものの持味をすつかり變へてしまふところにあるのださうで、この腕利きの手にかかると、肉は魚くさくなるし、魚は菌くさくなり、マカロニーは煙硝くさくなるといつた工合。そのかはりスープの中にはふり込まれる人參は一片たりとも菱形か四角に切られてゐないのはない。しかし、これらの僅かな、とりたてて言ふがものはない缺點を除いてしまへば、ポルトィキン氏は前にもいつた通り、まことに立派な人物であつた。

私がポルトィキン氏と初めて近づきになつた日のこと、彼は晩には家へ來て泊まるやうにといつて、私を招くのであつた。

「私の家までは、かれこれ五露里もありませう。」といつて、更に附け加へて、「歩いて行くには道程も大へんですから、一先づホーリの家へ寄りませう。」（例の吃りの言ひ方をお傳へしないことは、讀者に許していただけるであらう。）

「ホーリつていひますと？」

「うちの小作の百姓ですけども……奴の家はごく近くなんです……。」

私たちはホーリの家をさして行つた。森の中に、すつかり伐り開いて、きれいに坦らされた空地があつて、そこにただ一軒のホーリの家が高まつて見える。家といつても、板圍ひでつながつてゐる松の木づくりの小舍が二つ三つ。母屋の正面には、細い柱をもつて支へられてゐる檐がつづいてゐる。私たちは内に入る。すると、年のころ二十歳ばかりの、背の高い、きれいな若者が私たちを出迎へた。

「あ、フェーヂャ！」ホーリは家にゐるかい？」とポルトィキン氏が訊ねる。

「いんえ、ホーリは市へ行きましたんで。」若者はにつこり笑ふ拍子に、雪のやうに白い齒竝を見せながら答へた、「馬車の支度をするんでごぜえませうか？」

「ああ、さう、馬車を、な。それにタワスを持つて來て貰はう。」

私たちは小舍に入る。少しの汚れ目もない丸太組みの壁には、安つぽい繪などはただの一枚も貼りつけてなく、部屋の一隅の銀の緣飾りを施した、どつしりした聖像のまへには燈明がともされ、菩提樹の木の卓子は、近ごろ鉋をかけられたものと見受けられ、きれいに洗ひ上げてあつた。よその家とちがつて丸太の間や窓の側柱に、いたづら者のごきぶりも匍ひまはつてゐないし、物

思はしげな蜚もかくれてゐない。若者は間もなく、大きな白いコップに、上等のクワスをなみなみと注いで、木の鉢に小麥麵麭の大きなきれと、鹽漬の胡瓜を十二本ほどのせてやつて來た。彼はこれらの食べ物を卓子のうへに置いて、自分は戸口に凭りかかつて、にこにこしながらこちらを見まはし始めた。私たちがこのつまみ物を食べ終らないうちに、おもてにはもう馬車の音が鳴り出した。すぐに出て見る。見ると、髪のちぢれた、頰の赤い、十五歳ばかりの少年がすつかり馭者になりすまして、やつとのことで肥つた石垣馬を御してゐるのであつた。馬車を取り卷いて、フェーヂャにもよく似てゐるが、お互ひ同志、實によく似た若い大男が六人ほども立つてゐた。

「みんなホーリの悴ですよ！」とポルトィキン氏が教へてくれる、「みんな仔臭猫でしてね、」と玄關まで從いて出て來たフェーヂャがあとを引き取る、「けれど、これでもまだ揃つてはゐねえんでして。ポタープは森へ行つてるし、シードルは老父について市へ行きましたし……ワーシャ、氣をつけろよ。」と馭者の方を向いて言葉をつづける、「ひと息に飛ばすんだぞ。旦那樣を乘つけてんだからな。氣をつけてな。がたつくときは、ゆるめんだぞ。車をこはして、旦那樣のお腹をびつくりさせるんぢやねえぞ！」フェーヂャの冗談を聞いて、ほかの仔臭猫たちがみんな苦笑した。

「天文學者を乘せてくれ！」とポルトィキン氏がいかめしさうに聲をかけた。フェーヂャは、

嬉しさうに、強ひて笑ふやうな風をしてゐる犬をさし上げて、馬車の底へおろした。ワーシャは馬に手綱をくれる。馬車が走り出す。ふと「そらあれが私の事務所です。」とポルトィキン氏は小さな低い家をさしながら私にいふ、「寄つて見ませうか？」「ぜひ。」「今ではもう空けてますけれど、」と入りながら言ふ、「それでも一見の價値はありますな。」事務所といふのは、がらんとした部屋が二間あるだけだつた。そこへ、片目の、年をとつた番人が裏庭の方から駈けて來た。

「今日は、ミニャーイッチ」、とポルトィキン氏が言葉をかけた、「ところで、水を一杯くれないかな？」片目の老爺は影をかくしたが、すぐに壜に水を入れて、コップを二つ持つて戻つて來た。「一つ、味をみて下さい。」とポルトィキン氏が私にすすめる、「これは私んとこの相當に飲める湧水なんです。」私たちはコップに一杯づつ飲んだが、老爺はその間ぢゆう、丁寧にお辭儀ばかりしてゐた。「さあ、これでどうやら行けさうです。」と私の新しい友人がいつた、「この事務所で、私はアルリルーエフといふ商人に、四丁歩の森をかなりにいい値で賣りましたつけ。」私たちはまた馬車に乘り込んで、半時間ほどするともう、この地主の邸へ乘り込んでゐた。

「一體、どういふわけなんでせうね、」と私は夕食のとき、ポルトィキン氏に訊ねた、「ホーリがあなたの領地内で、ほかの百姓たちとかけ離れて住んでゐるのは？」

「さう、實はかういふわけなんですよ。あれはなかなか利口者でしてね。かれこれ二十五年ほ

どになりますが、あれの家が燒けちまひましてね。すると、亡くなつた親父んところへやつて來て『どうかニコライ・クジミッチ樣、あの沼地んところの森へ引つ越しをさせて下さいまし。さうすれば、お年貢も今までよりたんと納めますで』と、かういふんです。『うむ、それはまた、どういふわけなんだい、沼地へ越して行きたいなんて？』『いえなあに、その、べつに、その、なぜといふわけもありませんで。ただ且那樣、お邸のお仕事の方は一切御免をかうむりまして、その代りお年貢は思召し通りお極めを願ひたいので。』『では、年に五十ルーブリ？』『結構でございますとも。』『だが、滯りのないやうにだぞ、いいかい！』『いやもう決して滯りなどはいたしません……』と、かういふやうなわけで沼地へ住むやうになつたのです。それ以來、あれに臭猫といふ綽名をつけたのです。」

「なるほど、それで、裕福にはなつたのですか？」と私は訊いた。

「裕福になりましたよ。今では現金で百ルーブリ納めますがね、なあに、もつと値上げをしてやるつもりですよ。私は、度々いつてやりましたよ、『おい、ホーリ、身代金を出して一本立になりなよ。身代金を出して！』つて。ところが、あの男もさる者で、とてもそんなことは出來ません、金はありません、だなんて、尤もらしく言ひ張るんですよ……ええ、どうしてそんなことつてあるもんですか……」

翌くる日、私たちは朝のお茶を喫んでから、早速またもや獵に出かけた。村を通り過ぎながら、ポルトィキン氏は、一軒の低い百姓家のわきで馬車を停めさせ、大きな聲で「カリーヌィチ！」と呼び立てた。「はい、唯今、旦那樣、唯今まゐります。」といふ聲が裏庭の方から聞こえる、「いま、木沓の紐を結んでますから。」私たちはここから、そろそろと馬車を進めて行つたが、村を出はづれると、年ごろ四十恰好の小さな頭を反らしてゐる、背の高い、痩せつぽちの男が追ひついた。これがすなはちカリーヌィチであつた。ところどころに痘痕のある、人の好ささうな、淺黑い顏は、見るからに氣に入つてしまつた。カリーヌィチは（後で聞いて知つたことであるが）、毎日のやうに旦那の獵のお伴をして、獵袋を持つてやつたり、時には銃をかついでやつたり、鳥のゐるところを敎へたり、水を汲んで來たり、苺を摘み集めたり、假の小屋を建てたり、馬車のあとをつけて駈けたり、いつもさういつたやうなことをしてゐるのであるが、ポルトィキン氏はこの男がゐないと、まるで手も足も出ないのであつた。カリーヌィチは至つて陽氣な、性質のごくごくおとなしい男で、しよつちゆう小聲で鼻唄を歌ひながら、暢氣さうに四邊を見まはしてゐた。話をするときは、いくらか鼻へかかる。微笑みながら薄青い眼を細めたり、よく、疎らな、楔形の鬚をしごく癖があつた。早足ではないが、大股に、細長い棒にもたれ氣味に歩く。彼はその日は一度ならず私に話しかけて、心おきなく世話をしてくれたが、その主人の面倒を見る工合

といつたら、まるで子供扱ひであつた。眞晝の焦きつくやうな暑さに堪へかねて、物蔭はないかと探すやうなときには、彼は森の木立の最も繁つたところにある自分の養蜂所へ案內して行つた。カリーヌィチは香りの高い草の束をかけた小舍の戶をあけて、私たちを爽かな乾草のうへに寢かせ、自分は網のついた囊のやうなものを被つて、ナイフと壺と、燃えさしの薪を持つて、蜜房を切りに行つてくれた。私たちはまだ溫い、透き通つた蜂蜜を、淸らかな泉の水で飲み消した。それから氣うとい蜂のうなりと、樹の葉のそよぐ音に誘はれて、まどろんだ。するうちに、そよ風が吹き出して、眼をさまさせられた……。眼をあけて見ると、そこにはカリーヌィチがゐた。彼は半ば開けかけてある戶口の閾に腰をかけて、ナイフで木匙をこしらへてゐる。夕ぐれの空のやうに素直な、明るい彼の顏に私は暫しのあひだ見とれてゐた。ポルトィキン氏もやはり眼をさました。二人はすぐに起き上りはしなかつた。ずつと歩きつづけた上に、ぐつすり寢込んだあとで、乾草のうへにじつと臥てゐるのは好い氣持であつた。身體は甘い疲れにけだるく、顏はほんのりほてつて、何ともいへず、つい眼がふさがつてしまふ。やがてまた起き上つて、夕方までぶらつきに出る。夕食のときに、私は又もやホーリのこと、カリーヌィチのことを持ち出した。「カリーヌィチは氣だてのいい百姓ですよ。」とポルトィキン氏がいふ、「まめで、世話好きでしてね。けれどもが、家の切り盛りを、しつかとやつて行けないのです。何しろ私がいつも引つ張り廻し

てるものですから。毎日毎日私と一しよに獵に出てゐるやうな始末で……全く、家の切り盛りどころぢやありませんね——お察し下さい。」私はそれに同感の意を表して、やがて床についた。

翌くる日、ポルトィキン氏は用事があつて、隣り村のピチゥコフといふ地主と共に、市へ行かなければならなかつた。隣り村のピチゥコフといふのは、ポルトィキン氏の地所に鋤を入れたうへに、その地所で、ポルトィキン氏お抱への百姓女を鞭で折檻した男である。私は獵には一人で出かけたが、日の暮れないうちに、ホーリのところへ立ち寄つた。小舍の閾のところで私が出遭つたのは老人——頭の禿げた、背の低い、肩幅の廣い、がつしりした老人であつたが、これがホーリであつた。顏の恰好はソクラテスを想ひ起こさせる。ソクラテスのやうな、高い、でこぼこした額、それに同じやうな小さな眼、また同じやうな獅子鼻。私たちは一しよに小舍の中へ入つた。そこへお馴染のフェーヂャが牛乳に黑麵麭を添へて持つて來てくれる。ホーリは腰掛に腰をおろして、しづかに縮れ鬚を撫でながら、私と話をし始めた。彼は自分の威嚴を感じてゐるらしく、話の仕ぶりも身のこなしも悠々たるもので、時をり長い口髭のあひだから微笑みを洩らすのであつた。

私たちは蒔きつけのこと、作柄のこと、百姓の暮らしのことなどを話し合つた……。彼は私の話には何ごとによらず同意するらしかつた、尤も後で私は恥かしくなつて來た。こんな話をするんぢやなかつたと思ふのであつた……。こんな工合で、話はなんだか變てこになつて來た。ホーリは恐らくは用心してゐたからでもあらうが、時をりは大へんややこしい物の言ひ方をした……。ここに二人の話の一例をお知らせしよう。

「ねえ、ホーリ、」と私はいつた、「どうしてお前は、旦那に身代金を拂つて自由にならないんだい？」

「自由になんぞなつてどういたしませう？　私は旦那樣をよくよく存じてゐますし、年貢のこともよくよく存じてゐます……うちの旦那樣はいいお方で。」

「それにしてもさ、自由の身の方がよくはないかい？」

ホーリは私を横目で見た。

「御尤もです。」と彼はいつた。

「それなら一體、どうして一本立にならないんだい？」

ホーリは首をぐるりと旋らした。

「だつて、旦那樣、そんなお金がどこにございませう？」

「まあ、いい加減にしろよ、爺さん……。」

「ホーリが自由な御連中の仲間入りをしたら、」彼は獨り言のやうに低い聲でつづける、「鬚の

ない人間はみんなホーリより上になつてしめえませう。」

「そんならお前も鬚を剃つちまふさ。」

「鬚なんか何にもなりません。鬚は草のやうなものだから、剪んでもかまひません。」

「え、一體どうするつていふんだい？」

「つまり、やがてホーリが商人になりまさね。商人つていふものは、いい暮らしをして、それで鬚も生やして。」

「ぢや、何かね、お前、商賣の方もやつてるのかね？」と私は訊ねた。

「牛酪や、それに、樹脂もぼちぼち商つてゐます……。ところで、旦那、いかがでごぜえませう、馬車の支度をいたしませうか？」

『はて、こいつ奴、うつかり物もいへない、なかなか肚の黒い奴だ』と肚の中で私は考へた。口に出しては、「いやいや馬車は要らんよ。明日はお前の家の近邊を歩くんだ。若しよかつたらお前んとこの乾草小屋へ泊めて貰ひたいんだが。」といつた。

「ええ、ええ、どうぞ、……ですけども、納屋で、おやすみになられませうかな？　女どもにいひつけて、敷布を延べさせ、枕を出させませう……。おい、女ども！」と彼は腰を上げながら叫んだ、「おい、女ども、こつちだ、こつちだ、……、それから、フェーヂャ、お前も一しよに行つてな、女つて奴は機轉のきかない奴等だかんな。」

十五分ほどして、フェーヂャはカンテラをさげて、納屋へ案内してくれた。私は香りの高い乾草のうへにごろりと横になつた。犬も足もとに丸くなつて寢る。フェーヂャがおやすみなさいといつて出て行くと、戸が軋めいて、閉まる。私はかなり永いあひだ、眠れなかつた。牝牛が一頭、戸のところへ來て、二度ばかり太息をついた。犬が威丈高に吼えかけた。豚が物思はしげに唸りながら傍を通り過ぎた。馬がどこか近くで、乾草を嚙んでは鼻を鳴らしはじめる……。そのうちに、とうとう寢入つてしまつた。

明けがたにフェーヂャが私を起こした。この愉快な、元氣のいい青年は實に私の氣に入つた。それにまた、私の見たところでは、老人ホーリにとつても寵子であつた。だから二人は實に睦じく、互ひにからかひ合つてゐた。老人が挨拶にやつて來た。昨晩、彼の家に泊まつたせゐか、それとも何かほかに仔細があつてか、とにかくホーリは昨日よりはずつとまた懇ろに私をもてなした。

「お茶の用意が出來て居ります、」と微笑みながら私にいふ、「さ、どうぞいらしてお茶をおあがり下さい。」

私たちは卓子をかこんで座についた。嫁の一人である、丈夫さうな女が、牛乳の入つてゐる壺

を持つて來た。息子たちもみな順々に小舍に入つて來た。

「お前んとこには、なかなか立派な連中がゐるなあ！」と私は老人にいつた。

「さやうでございますよ。」砂糖の小さな塊を嚙み碎きながら老人がいふ、「悴どもも、私や婆さんに苦情をいふがものはなささうですよ。」

「それで、みんなお前と一しよに暮らしてるのかね？」

「はい。みんな一しよにゐたいつていふもんですから、こんな風に暮らしてるわけで。」

「みんな嫁を貰つてるのかね？」

「あそこに一人、暴れつ子がまだ娶らずに居りますんで。」と彼は、依然として戸にもたれてゐるフェーヂャを指して答へるのであつた、「ワーシュカつて申しますが、あれはまだ小兒でございますから、別に急ぎませんがね。」

「嫁なんぞ貰つてどうするんだい？」とフェーヂャはやり返した、「おらあ、これで結構だよ。何のために女房もらふんだい？　いがみ合ひするのにか、え？」

「何だ、この野郎、……俺はもう知つてるぞ！　銀の指環なんぞ穿めて……お屋敷の女中らとでも嗅ぎ合つてりやいいんだらう……『およしよ、みつともない！』」老人は小間使の口眞似をしながらつづける、「俺はもうてめえの肚ん中なんか、ちやんと知つてるぞ、このひよつ子め！」

「だつて、女房のどこがいいんだい？」

「女房つてものは働き手だよ。」ホーリは眞顏になつていつた、「女房は男にとつては片腕だよ。」

「だつて、俺に働き手が何になるんだ？」

「それ、それ、お前は他人を踏み臺にするのが好きと來てる、おらあ、おめえ達のやうな奴の肚ん中はちやんと知り拔いてるぞ。」

「うん、そんならお嫁を貰つてくろよ、え？　どう？　どうして默つてんだい？」

「さあ、もういいよ、もう澤山だ、仕やうのねえおしやべりだな、氣をつけろ、旦那樣が御迷惑なさる。貰つてやるよ、きつと……。旦那、どうか惡く思はねえで下せえ。野郎、からつきし小兒で、物の道理がさつぱり分かりませんので。」

フェーヂャは不足さうに首を振つた……。

「ホーリは在宅かね？」おもてで耳馴れた聲が聞こえる、――と、カリーヌィチが親友のホーリにやらうと、ちぎつて來た野苺の小さい束を手にして小舍へ入つて來た。老人は愛想よく彼を迎へる。私はびつくりして、カリーヌィチの方を見つめた。實をいへば、百姓にこんな『優しさ』があらうとは思ひもよらなかつたのである。

私はその日はいつもより四時間ほども遲れて獵に出かけた。それからの三日間といふもの、私はホーリの家で暮らした。この新しい知合ひが私の興味をひいたのである。どんなことで信用を得たのか知らないが、彼らは何のわだかまりもなく私と話をした。私は喜んで彼らの話を聞いたり、彼らを觀察したりした。二人の友だちは少しも似通つたところがなかつた。ホーリは積極的な實際的な人間で、萬事を巧みに處理して行くに適した頭腦をもち、一切のことを理論で押して行く人間であつた。カリーヌィチはこれとは反對に、理想家で、ロマンチストで、狂熱的で、空想好きな人間の部類に屬してゐる。ホーリは現實といふものをよく理解してゐる。だからこそ、家も建てるし、小錢も溜め、主人とも、土地のお歴々ともうまく調子を合はせて行つたのである。カリーヌィチは樹の皮沓を穿いて、どうにかうにか、その日暮らしをやつてゐた。ホーリはおとなしく和合してゆく大家族を養つてゐる。嘗てカリーヌィチは女房を持つたこともあつたが、女房を怖れてばかりゐたので、つひ子供もできなかつた。ホーリはポルトィキン氏の肚の奥底まで見拔いてゐるが、カリーヌィチと來たら、ただその主人を畏敬するばかりである。ホーリはカリーヌィチを愛して面倒を見てやつてゐるし、カリーヌィチもホーリを愛して敬まつてもゐる。ホーリは口數も少く、にこにこして、萬事を胸三寸に心得てゐる。カリーヌィチは勇み肌の男のやうに氣の利いたことをすらすらいふわけではなかつたが、熱をもつて話をする……。しかし、

カリーヌィチは生まれつき、ホーリ自身すらが認めてゐたやうな優れた力をもつてゐた。例へば、呪文を唱へて、出血や、痙攣や、狂氣を治したり、害蟲を驅除したりして、蜜蜂を飼へばまた必ずうまく行つた。つまりは手が器用なのであつた。ホーリが私のゐる前で、新たに買ひ入れた馬を厩へ連れて行つてくれと頼むと、カリーヌィチはお人よしの、勿體ぶつた樣子をして、老懷疑家の乞ひを容れてやつた。カリーヌィチは自然になづんでゐるが、ホーリの方は人間や世間といふものにより多く接近してゐる。カリーヌィチは議論をすることを好まず、あらゆることを盲滅法に信じてゐるが、ホーリはお高くとまつて、人生を皮肉な眼で見てゐるほどである。彼は見聞が廣く、いろんなことを知つてゐたので、私は大分彼から教へられるところがあつた。たとへば、彼の話によつて、毎年夏の草刈り前になると、風變りな小さい馬車が村々にやつて來るといふことを知ることが出來た。その馬車には百姓外套を着た人が乘つてゐて、草刈り用の大鎌を賣つてゐる。現金ならば一ルーブリ二十五カペイカ、紙幣ならば一ルーブリ五十カペイカを受け取り、貸しの場合には紙幣で三ルーブリと更にルーブリ銀貨一枚といふことにする。勿論、百姓たちはいづれもかけにして大鎌を手に入れる。二三週間すると、またやつて來て、金を催促する。百姓たちのところでは燕麥を刈り取つたばかりなので、從つて拂ひのできる者もあるわけである。百姓は商人と一しよに居酒屋へ行つて、そこで借金を片づけてしまふ。地主たちの中には自分の手

に大鎌を買ひ入れて、それを同じ値段で百姓たちに貸し賣りをしようと考へた者もあつた。ところが、百姓たちは一向に有難がらず、却つてがつかりしてしまつた。といふのは、大鎌の刃を鳴らして見たり、音を聞いたり、手にとつて引つくりかへして見たり、とかく油斷のならない町の商人をつかまへて、『おい、これはそんなに大していい鎌ではないぢやないか？』などと訊いたりする樂しみを彼らから奪ひとつたからである。同じやうないたづらは、小鎌を買ふときにも行はれる。ただ違ふのは、その場合に女たちも仲間に入ることで、あまり勝手なことをいふので、時には商人の方でやり切れなくなつて、女たちを擲つたりすることがあるのである。しかし、女たちは次のやうな場合には最もひどい目に遭はされる。製紙工場の原料請負人は襤褸の買ひ入れに、或る郡で『鷲』と呼ばれてゐる一種特別な人間たちを使ふのである。かやうな『鷲』は請負人から紙幣で二百ルーブリほど受け取つて、餌食をさがしに行く。けれど、その名を貰つてゐる高尚な鳥とはちがつて、公然と大膽に飛びついて來るのでなく、それどころか、『鷲』は狡猾に惡がしこく立ちまはる。どこか、村の近くの藪に荷車を置きすてて、自身はふと通りがかりの人か、或ひは、ただの浮浪人かといつたやうな風をして、裏庭や裏口に寄つて行く。女たちは近寄つて來たことを嗅ぎつけて、こつそりと會ひに出る。取引は大いそぎに濟んでしまふ。わづかの赤錢で、女は不用の襤褸を殘らず賣り渡してしまふばかりでなく、亭主の襯衣や手織りの自分のスカートまでも賣り拂つてしまふのである。近頃では女たちは、こつそり自分の家の麻苧、わけても『大麻』を盜んで、おなじやり方で賣り飛ばしてしまふのを、得なことだと思ふやうになつた。實に『鷲』にとつては商賣の擴張であり、進歩でもある！　ところが、百姓たちはまた百姓たちの方で利口になつて、少しでも臭いと思つたり、『鷲』がやつて來たといふ噂をうすうすでも小耳に挿んだりすると、實に敏速に矯正と豫防の方法を講ずるのである。實際、これは彼らとしては、腹の立つことであつたらう。麻苧を賣るのは男たちの仕事であつた。――實に男たちが賣るのである――しかも町でではなく――町へは自ら引つ張つて行かなければならないので、買ひに來る小商人に賣るのである。彼等は把秤を持つてゐないので、四十つかみを一プード（一六・三八瓩）に勘定する、――ところが、露西亞人の一つかみ、露西亞人の掌がどんなものか、特に『精々勉強する』ときにどんなものか、諸君はよく御存じであらう！　私はまだ世馴れず、村へ來ると『こうろへた』（わがオリョール縣ではかういふ風な言ひ方をする）人間でもなかつたから、かういふ話をかなりたくさん聽かされたものであつた。しかし、ホーリがいつも話し手になつたわけではなく、私にもいろんなことを訊ねた。私が外國へ行つてゐたといふ話を聞かせると、彼の好奇心は急に烈しくなつた……。カリーヌィチも彼にはひけをとらなかつたが、むしろカリーヌィチは自然の山や瀧や、すばらしい建物や大きい都市の話により多く惹きつけられてゐた。ホーリは行政だとか、

國家だとかの問題に興味をもつてゐた。彼は何事によらず順序を立てて持ち出した。「ところで、そいつはこちらと同じでございませうかな、それとも違つて居りませうかな？……ねえ、旦那、聞かして下せえ、――一體、どういふ工合でございませうか？……」「あ！　ああ、たまげたもんですねえ！」とカリーヌィチは私が話してゐるときに叫ぶのである。ホーリは默つて、濃い眉毛を寄せ、たまさか、「こちらぢや、さうは行かねえでせうが、しかし、いいこつてすなあ、――ちやんと筋道のとほつたこつてすなあ。」などといふのであつた。彼の質問をここに殘らずお傳へすることは出來ないし、またその必要もない。けれども、私たちが話をしてゐるうちに、恐らく讀者諸君の豫想もされないやうな一つの信念を私は得たのであつた……。ピョートル大帝は何といつても露西亞人であつた。すなはち彼の改革のやり方から見て露西亞人であつたといふ確信である。抑〻露西亞人は自己の力量を信じ、氣魄を信じて、我と我が身を滅ぼすことを敢へて辭せず、過去に戀々とせず、大膽に前途に眼を向ける。善いものを好み、道にかなつたものはすなはち受け容れられる。それがいかなるところから出て來ようとも、それには一向かまはない。露西亞人の常識は好んで淺薄な獨逸人の屁理窟を嘲笑する。けれどもホーリにいはせると、『獨逸人といふものは面白い國民』であつて、彼もまた獨逸人から學ばうとしてゐたのである。ホーリは自分が他人とちがつて、事實上まつたく獨立した地位を占めてゐたので、ほかの人からは打つても

叩いても聞き出せないやうな――百姓たちの言葉を藉りていふと、挽臼にかけても搾り出すことの出來ないやうな、いろんなことを私に話してくれた。彼は全くのところ、自分の地位をよく了解してゐた。ホーリと話し合つて、私は初めて露西亞の百姓の、素朴で、しかも賢明な言葉を聽いたのであつた。彼の見識は自己流ながら、なかなか博かつた。そのくせ眼には一丁字もないのであつた。カリーヌィチには讀めたけれど。「あの木偶坊には讀み書きが出來るんでさ。」とホーリがいふ、「あいつの手にかかると、蜜蜂までが殖ゑるばかりで、死んだことがない。」「ところで、お前は子供たちに字を習はさなかつたのかい？」ホーリはしばらく默つてゐた。「フェーヂャは知つとります。」「では、ほかのは？」「ほかの奴は駄目でさ。」「一體、どうして？」老人はそれには答へないで、話題を外らしてしまつた。利口な男ではあつたが、しかもなほ彼には偏見や僻みが附きまとつてゐた。例へば、心の底から女といふものを輕蔑し、機嫌のよいときには、女たちを嘲笑し、愚弄するのであつた。彼の細君は喧嘩の好きなお婆さんで、終日、煖爐のそばを離れず、絶えず、ぶつぶつと不平をいつたり、惡態をついたりしてゐた。息子たちは別に見向きもしなかつたが、嫁たちには荒神のやうに怖れられてゐた。露西亞の姑の小唄があるのも宜なる哉である、『それでもわしの子供なの、それでもおまへは亭主なの！　女房打つよなこともなし、若い女房を打ちもせず……』私は嘗て、嫁を庇つてやらうと企て、ホーリの同情心を喚び起こさ

せようと試みたことがあつた。けれども彼は落着き拂つて、異議を申し立てた、「こんな……つまらんことを構ふなんて、物好きといふもんでせう。女どもには勝手に喧嘩をさせとくがいいんです……。仲裁すると却つて惡いんでさ、……わざわざこつちの手を汚すほどのことでもありませんしね。」時には、この邪慳な老婆が煖爐のところからのそのそ出て行つて、乾草の中にゐる飼犬を呼び立てる、「來い、來い、ポチ！」と呼んでおいて、火棒で犬の痩せた背中を毆りつける。また時には檐の下に立つて、ホーリの言ひ草ではないが、通りすがりの人と誰彼の見さかひなく『いがみ合ふ』のである。尤も御亭主だけは怖がつてゐて、御亭主のいひつけがあれば、煖爐のところへさつさと引き返して來るのであつた。それにしても、殊に面白かつたのは、ホーリとカリーヌィチが、談たまたまポルトィキン氏のことに及んで、口論するのを聽くことであつた。

「おい、ホーリ、俺んところで、さうさうあの人のことを、兎や角いふもんぢやねえよ。」とカリーヌィチがいへば、「だつて、お前にどうして長靴をこしらへてくれねえんだらう？」とホーリがやり返す。「えつ、長靴！……長靴なんぞ、俺にどうして要るんだい？　おらあ、百姓だぞ……」「なるほど、俺も百姓だけんど、見ろ……」かういひながらホーリは自分の足を擧げて、カリーヌィチに、おそらくマンモスの皮を裁つてつくつたものであらう、長靴を見せる。「うむ、だつて、おめえとおらあ、わけが違ふべえ！」とカリーヌィチが答へる。「なんぼなんでも、木

皮沓代くらゐは下さらんとあんまりだよ。だつて、おめえは旦那の獵のお伴をするんだもの、木皮沓ぢや、一日に一足は要るだろ。」「木皮沓だけのものは下さるがな。」「さうさう、去年は大枚十カペイカ玉を頂戴したつけな。」カリーヌィチは忌々しくなつてわきを向いてしまつたが、ホーリは可笑しくてたまらず、ひどく笑ふので、小さな眼が全く見えなくなつてしまふほどであつた。

カリーヌィチはなかなか好い聲で唄をうたひ、バラライカも少しは彈くのであつた。ホーリはひたすらこれに耳を傾けてゐるかと思ふと、不意に首をかしげて、哀れつぽい聲で調子を合はせはじめる。彼はとりわけ、『ああ、わが運命、わが運命！』といふ唄が好きであつた。こんなときにはフェーヂャはすかさず、親父をからかつて、「おい、お父つあん、何をそんなにめそめそするんだい？」といふのである。が、ホーリは頰杖ついて、眼をふさいで、自分の運命を相變らずこぼすのであつた、……さうかと思ふと、ほかの時にはホーリほどまめな男はないのであつた。いつも何かにかまけて、――荷車を直したり、柵を支へたり、馬具をあらためて見たりしてゐる。尤も、あまりきれい好きといふ方ではないので、或るときのこと、私が注意をしたら、こんな返事をした、「家だつて、人間の住んでる所の臭ひがしなくてはなりませんわい。」

「でも、カリーヌィチんとこの養蜂所のきれいなのを見るがいいよ。」と私は言ひ返した。

「蜜蜂はね、旦那様、きれいにして置かないと、住みついてくれんのでしてね。」と彼は溜息まじりにいつた。

或るときはまた、「旦那様には、御先祖様からの持村がおありですかな？」と私に訊くのであつた、「あるよ。」「ここから遠いんでございますか？」「百露里ほどある。」「ぢや、旦那様、その村にお暮らしなすつで？」「ああ、さう。」「でも、それよか、鐵砲で日を送つてるといふ方なんでございませう？」「正直いふと、まあその通りだ。」「結構でございますなあ。おからだのためには、せいぜい、松鶏でもお撃ちになつて、時々、百姓頭をお變へになるんですね。」

四日目の晩、ポルトィキン氏は迎への者をよこした。私は老人に別れるのが殘り惜しかつた。私はカリーヌィチと馬車に乘つた。「ぢや、さよなら、ホーリ、御機嫌よう。」と私はいつた、……「さよなら、フェーヂャ。」「さやうなら、旦那様、さやうなら、どうかまたいらして下さい。」馬車は走り出した。夕燒の色が眞赤になつたばかりの頃であつた。「明日はいいお天氣だぜ。」と私は晴れ渡つた空を眺めながら言つた。「いいえ、雨がやつて來るでせう。」とカリーヌィチが言ひ返す、「ほれ、家鴨が向ふで水をぱちやぱちや潑ねかしてますし、草の匂ひもいやにきつうございますし。」私たちは灌木の繁みの中へ入つた。カリーヌィチは馭者臺にひどく搖られながら、聲低く唄をうたひ出した。そして、絶えず夕燒の空を見つめるばかりであつた……。

翌くる日、私はポルトィキン氏の手厚い款待の家を辭したのであつた。

エルモライと粉屋の女房

夕方、獵師のエルモライを連れて、「渡り」に出かけた……しかし、おそらく讀者諸君には、「渡り」といふことがどんなことかを御存じない方もあることと思ふ。まづお聽きのほどを願ひたい。

春の陽の入る十五分ばかり前に、鐵砲をかついで、犬も連れずに林に出かける。林のへりに恰好の場所を見つけて、あたりの樣子を見まはし、活塞をあらため、伴れの者に目くばせする。さうしてゐるうちに早くも十五分ほど過ぎる。日は沈んでしまふ。けれども林の中はまだ明るい。空氣は清らかに澄んでゐる。小鳥はしきりに囀る。若草はエメラルドのやうにうるはしい光を放つ……。こちらはじつと待つてゐる。林の奥が次第に暗くなる。夕映えの眞紅の色は、おもむろに樹の根や幹をぬめつて、いよいよ高く昇り、また殆んど花も葉もない下枝から、靜まりかへつて睡つてゐる梢にまで移つてゆく……。見れば、梢も暗くなつてゐる。くれなゐの色もあせて、空は青味がかつて來る。林の匂ひが一しほきつくなつて、幽かに生あたたかい濕り氣が感ぜられる。あたりを吹いてゐた風も靜まる。小鳥は眠りにつく、――それも一時にではなく、――それ

ぞれの種類によつて。先づ金絲花鶸が聲をひそめる。少しおくれて紅鶯、それにつづいて唐鶸。林の中はいよいよ暗くなつてゆく。樹々は大きな黑い塊に融け合つてしまふ。蒼い空には夕星がおづおづと早くも光り始める。小鳥たちはすつかり眠つてゐる。ただ紅襟鳥、小さな啄木鳥だけが、まだ睡たげに囀つてゐる……。それももう鳴きやんでしまふ。頭のうへでもう一度、田鷸のよく徹る聲がひびく。どこかで、もの悲しげに高麗鶯がわめいてゐる。やがて夜うぐひすが囀り始める。獵人の心は待ちくたびれる。すると不意に――獵人にだけはよくわかる筈であるが、――不意に深いしじまの中で、一種妙な「かあかあ」といふ啼きごゑと、しゆうと鳴る音がして、すばやい調子の整つた羽ばたきが聞こえる、――見ると、山鷸が長い嘴をみやびやかに傾げながら、暗い白樺の樹かげから、するすると飛び出して來て標的に入る。

つまりこれを「渡りを邀へる」といふのである。

そこで、私はエルモライと「渡り」を邀へ擊ちに出かけた。ところで、諸君、濟まないけれども、先づ私はエルモライを諸君に御紹介しなければならぬ。

まあ、ここで四十五歳ぐらゐ、背の高い、痩せこけた、鼻は細長く、額は狹く、眼は灰色で、髮を蓬々させて、嘲笑ふやうな表情を唇に浮かべた男を想像していただきたい。この男は多でも夏でも獨逸風に仕立てた黄色味がかつた南京木綿の上衣を着て歩いてゐる。尤も帶だけは露西亞

風にきちんと締めてゐた。それに青いだぶだぶの小露西亜洋袴を穿き、零落した地主が機嫌のよいときに呉れた小羊の皮のついた帽子をかぶつてゐる。帶には嚢が二つ縛りつけてあつたが、前の方のは火藥を入れるところと散彈を入れるところの二個所に、手際よく括り分けられ、後の方のは獲物入れになつてゐた。塡める綿屑は、特別の、見たところ無盡藏らしい帽子から取り出すのであつた。彼は獲物を賣つて儲ける金で、彈藥盒や獲物嚢を樂々と買へた筈であるのに、一度としてさういふ買物をすることを夢にさへも思つたことがない、相も變らず昔流に鐵砲の裝塡をやつてゐたが、見る方では、火藥や散彈をこぼしたり混ぜたりするやうな危いことを切り拔ける藝當にびつくりさせられるのであつた。彼の持つてゐる鐵砲は燧石のついた單身銃で、おまけに烈しく「撥ね返す」惡い癖をもつてゐた。そのせゐでエルモライの右の頰はいつも左の頰よりもかなり腫れ上つてゐた。彼のやうにこんな鐵砲でうまく命中するやり方は、器用な人間にも考へつかなかつたことであらう。ところがうまく命中るのであつた。彼にはワレートカと呼ぶセッター種の獵犬で、實に驚くべき代物がゐた。エルモライは未だ、これに餌をやつた例しがない。「犬に餌なんぞやつてたまるもんか、」と彼は考へる、「おまけに、犬は利口な生き物だもん、自分で食ひ物は見つけべえ。」ところが、實のところ、ワレートカは何のかかはりもない行人でさへも、あまりに痩せてゐるのに驚かされるほどではあつたが、しかもなほ生きてゐて、長生きを

してゐたのである。みじめな境涯に居りながらも、まだ逃げかくれしたこともなく、主人を見棄てようとするやうな素振りを見せたこともなかつた。ただ一度、若い時分に、さかりがついて二日ばかり留守にしたことがあるけれど、このいたづらも直きにやんでしまつた。ワレートカの極く著しい性分といへば、世の中のあらゆることに對して不思議と無頓着なことであつた……。若しこれが犬の話でなかつたら、私は「幻滅」といふ言葉を用ゐたところであつた。犬はいつも短い尻尾を體の下に捲きこんで、うづくまりながら、蹙め面をして、時をり體をぶるぶるっと慄はせたりして、決して笑はない（犬が微笑むこと、しかもなかなか可愛らしい笑ひ方の出來ることは、すでに周知の事實である）。彼はあまりにも醜かつたので、暇な下男は折さへあれば、この犬の風采を口ぎたなく嘲笑ふのであつた。けれども、かうして嘲られ、時には毆られるやうなことがあつても、ワレートカは驚くばかりの冷靜さをもつて堪へ忍んだのである。彼は料理人たちに特別の慰安を與へてゐた。犬に限らぬ弱味からではあつたが、溫い、うまさうな香氣に釣り込まれて、臺所の半ば開いてゐる戸口に饑ゑきつた鼻づらをつきいれでもしようものなら、料理人たちはすぐに仕事をさしておいて、大聲をあげて罵りながら、彼を追ひまはすのであつた。獵に出て疲れを知らないことは格別であつた。また感じも相當鋭敏なものであつた。が、ひよつとして、微傷の兎などに追ひつくことがあると、人の知り、またよく知らない凡ゆる方言をもつて躍

氣になつて呶鳴りつけるエルモライをいい加減に敬遠して置いて、どこか、綠の涼しい樹蔭に入り込んで、骨一つ殘さず、うまさうに喰ひ盡してしまふ。

エルモライは、私の近所の、或る昔風の地主に抱へられてゐた。昔風の地主たちは「野鳥」を好まないで、家禽一點ばりなのである。それでも非常の場合、例へば誕生日だとか、名の日だとか、選擧日だとかに限つて、昔風な地主に抱へられてゐる料理番たちも、喙の長い鳥を料理に用ゐる。ところが、どう料理していいものか、よくわからないときには、露西亞人特有の興奮狀態に陷つて、いかがはしい調味を工夫するので、お客は大部分は物珍しさうに、出された料理を丹念に、と見かう見するのであるが、一向に味を見ようといふ氣にはならないのである。エルモライは月に一度、主人の家の臺所へ松鷄と鷸鴣を二番ひ納めるやうにいひつけられてゐたが、それでも自分の好きな所へ行つて、好きなことをして暮らすことを許されてゐた。彼は何の役にも立たない人間――私たちの方のオリョールで俗にいふ「やくざ」として、人から相手にされなかつた。火藥や散彈はもとより彼は給與されなかつた。彼がその犬に餌をやらなかつたのと、全く同一の筆法によるものである。エルモライは實に奇妙なたぐひの人間であつた。鳥のやうに氣樂で、かなりにおしやべりで、見たところは氣の利かない、ぼんやりした男であつた。恐ろしく酒が好きで一ところに永く落ちついて居られず、歩くときはよろめきながら、あつちへふらふら、こ

つちへふらふらやつてゐた。そのくせ、こんな歩き方をしながら、一晝夜に五十露里くらゐは歩きおふせる。彼は極めてさまざまな冒險をやつて來た。沼澤地や、樹の上や、屋根の上や、橋の下に夜を明かしたり、一度ならず屋根裏や、穴倉や、納屋などに閉ぢこもつたり、鐵砲や犬やどうしても失くしては困る自分の着物を失くしたり、永いこと、こつぴどく毆られたこともあつた、――それでも暫くすると、着物も着、鐵砲もかつぎ、犬をも連れてわが家にかへつて來るのであつた。殆んどいつも上機嫌ではあつたが、決して陽氣な人間とはいへなかつた。寧ろ奇人といふ方であつた。エルモライは好い相手と、殊に一杯やりながら、ひと喋りするのが好きであつた。けれども、それも永くさうしてゐるわけではなかつた。直ぐに立ちあがつてどこかへ行つてしまひさうにする。「おい、貴樣、どこへ行くんだい？　おもてはもう夜だぞ。」「チャープリノへよ。」「十露里も先のチャープリノへなんぞ、なにしに行くんだ？」「あそこの百姓のソフロンて奴がとこへ泊まらうと思つてよ。」「まあ、ここへ泊まれよ。」「いや、もう駄目だ。」かういつて、エルモライは例のワレートカを連れて、眞つ暗な夜道を辿つて、藪をくぐり、水溜りを渉つて、どんどん歩いて行く。そのくせ、百姓のソフロフはなかなか内へ入れてくれないかも知れぬ。おまけに、どうかすると「まともに暮らしてる者に迷惑をかけるな。」といはんばかりに、眞向から毆りつけるくらゐが落ちかも知れぬ。そのかはり、春になつて溢れるやうな川水のなかで魚をつか

まへたり、蝦を手捕りにしたり、野鳥を嗅ぎつけたり、鶉をおびき出したり、「山靈の草笛」とか、「ほととぎすの谷渡り」とかいふ珍しく好い音を囀る夜うぐひすを捕へたりする手わざにかけては、誰ひとりとしてかなふ者はなかつた……。ただ一つ出來ないことといへば、犬を馴らすことであつた。到底それだけの辛抱が出來ないのである。彼には女房もあつた。一週に一度は會ひに行つた。彼女は見すぼらしい、半ばくづれかかつた小舍の中に、その日暮らしをやつてゐた。明日は滿足に食べられるのやら食べられないのやら、一向に分からない日ばかりであつた。およそ悲しい運命を彼女は耐へ忍んだのである。エルモライ、この氣樂なお人好しは、女房を酷く、亂暴に取り扱つてゐた。自分の家では、おどしつけるやうな嚴い顏をしてゐるので、可哀さうな女房はどうして御機嫌をとつたらよいのか分からず、ちよつと睨まれても、はらはらしながら、とつて置きの小錢を出して酒を買つて來てやつたり、亭主が煖爐のうへに大威張りでふんぞりかへり、すさまじい鼾をかいて眠りかけると、まるで奴隷のやうに卑屈になつて、自分の袰をかけてやつた。偶〻、私自身も、この男のどことなしに苦々しい兇暴性が思ひもよらぬところにあらはれるのを再三認めてゐた。例へば、銃彈にあたつて傷ついた小鳥を嚙み切るときの彼の顏の表情などは、私の好まないところであつた。しかし、エルモライは自分の家に一日以上もゐることは決してないので、家を出ると、やはり、百露里四方に通り名の、また時をりは自分自身もさう

いつてゐた、あの「どんぶりじやつぽ」にかへるのである。よくよく下つ端の家僕でさへもこの放浪者に對しては優越感をもつてゐた、――恐らく、そのせゐであらう、彼等はエルモライに對して、ひどく親しい態度を見せてゐた。百姓たちは初めのうちこそ面白がつて、まるで野の兎か何かのやうに追ひまくつては捉まへてゐたが、後では勝手にしろと放してやつて、一たび彼が奇人たることを知ると、もはや彼に手を着けず、麵麭をくれたり、世間話を始めたりするやうにさへもなつた……。すなはち、私はこの男を獵師として迎へ、この男と一しよにイスタ川のほとりの大きな白樺の林へ、「渡り」を邀へ擊ちに出かけたのである。

一體、露西亞の多くの河はヴォルガ河と同じやうに、一方の岸は山になつて居り、一方の岸は草原になつてゐるが、イスタ川の岸も亦さうであつた。この小さな川は甚だ氣まぐれに曲がりくねつて、蛇のやうに這ひめぐり、半露里と眞直ぐに流れてはゐない。場所によつては峻しい丘陵の頂などから十露里ほども流れが見渡されて、兩岸には堤や、池や、水車場や、楊の木立にとりかこまれた菜園や、樹の繁つた果樹園などが望まれる。イスタ川には魚は無數にゐる。わけても鱒魚が多い（百姓たちは日ざかりに、叢林のかげにゐるところを手でつかまへて來る）。小さな川千鳥はぴいぴいと鳴きながら、冷たい澄んだ湧き水が、斑になつて流れてゐる石の多い汀に沿うて飛びわたる。野鴨は池心に浮き上つて、あたりをきよろきよろと見まはし、蒼鷺は入江の絶

壁のかげにじつと佇つてゐる……。私たちは小一時間も待ち伏せして、山鷸を二番ひ撃つたが、日のあがらないうちにもう一度うまく出かしてやらうと思つて（渡りを邀へ撃ちには朝にも行けるので）、最も手近な水車場に泊まることにした。私たちは森を出て、丘を下りて行つた。川は紺碧の波を立てて流れてゐる。空氣は夜露にしつとりして、濃くなつて來た。門をたたく。犬が庭で吠え出した。「誰だね？」としはがれた、睡さうな聲が聞こえる。「獵をするものですが、泊めて貰ひたくて。」返事がない。「金は拂ひますよ。」「そんなら、行つて親方に話して見べえ……しいっ、畜生！……くたばつちめえ！」私たちは雇人が小舍に入つて行つたのを聞いてゐた。間もなく彼は門口へ引き返して來た。「駄目だ。」といふ、「親方が通しちやなんねえつていふんだ。」「どうしていけないつていふんだ？」「心配してんだよ。あんたたち、獵人だらう。だから、ひよつとしたら水車場を燒かれるかも知れねえ。そら、何しろ、火道具をお持ちですべえ。」「何てまた馬鹿なことを！」「一昨年もそれでうちの粉場を燒かれちめえましてね。牛買ひが泊まつたんですね、するとどうしたもんか、火事をおん出しちやつてね。」「そんなことといつたつて、お前、おもてぢや寢られないぢやないか！」「そらあ、おめえさん方の勝手だ。」……彼は長靴の音を立てながら行つてしまつた。

エルモライは彼にさんざんな惡態をついたが、つひには「村へ行きやんせう。」と溜息つきつ

きいふ。けれども、村までは二露里ほどもあつた……。「ここへ泊まらうよ。」と私はいつた、「今夜はおもてでも暖い晩だから、金さへやれば粉屋だつて藁ぐらゐはよこすだらう。」エルモライは一も二もなく同意した。二人はまた戸をたたきはじめた。「一體、何の用だね？」またしても雇人の聲が聞こえる、「駄目だといつたら駄目なんだに。」私たちはこちらの意向をよく話してやつた。彼は主人と相談をしに行つたが、やがて主人を連れて戻つて來た。耳門がぎいと軋り出す。粉屋が姿をあらはす。背の高い、脂ぎつた顏をし、牡牛のやうに逞ましい頸をして、丸々と肥つた大きな腹の男であつた。彼は私の申し出を承知した。水車場から百歩ほどのところに小さな、四方を開け放してある離れ家がある。そこへ私たちのために藁や乾草などを持つて來てくれた。雇人は川のほとりの草のうへにサモワルを据ゑつけ、その前に屈みながら、せつせと管を吹きはじめる。炭火がおこつて、若々しい顏をはつきり照らし出した。粉屋は女房を起こしに駈けて行つた。そして、とうとう自分から私に母屋へ泊まるやうにと申し出た。けれども私は野天にふみとどまる方を選んだ。粉屋の女房は私たちに牛乳や卵や、馬鈴薯や麵麭を持つて來てくれた。ぢきにサモワルも沸つて來たので、私たちはお茶を飲みにかかつた。川のおもてからは水蒸氣が立ち昇る。風はなく、あちこちに水鷄が鳴きしきる。水車場の車輪のあたりには微かな音が聞こえる。それは水斗からこぼれる水の雫と、土堤の水門の門を洩れる水の音であつた。私たち

は少しばかりの火をかきたてた。エルモライが燃えさしの火に馬鈴薯を燒いてゐる間に、私は心地よく一睡りしてしまつた……。私はそつと、しづかにささやく聲に眼を覺まさせられた。頭をあげて見ると、火の前に桶を伏せて、その上に粉屋の女房が腰をかけながら、伴れの獄師と話をしてゐる。私は最前、この女の身のこなし方や、話しぶりなどから推して、この女が百姓女でもなければ町娘でもなく、——お邸に奉公してゐた者であると睨んでゐた。尤も女の容貌をよく見るのは、これが初めてであつた。年は見たところ三十前後らしく、ほつそりした、蒼白い顔には、今も人にすぐれて美しかつた俤が殘つてゐる。殊に私の心を惹いたのは、大きな、物哀しげな眼であつた。彼女は膝に肘をついて、兩手で顔を抑へてゐた。エルモライは私に背を向けて坐りながら、木つぱを火にくべてゐた。

「ジェルトゥヒナではまた畜瘟が流行つて、」と粉屋の女房はいつた、「イワン神父さんのところでは、牝牛が二匹ともやられてしまつてね……やり切れないわ！」

「それでは、おめえんとこの豚はどうしたね！」一寸默つてゐた後で、エルモライが訊ねた。

「みんな大丈夫。」

「せめて豚つころの一匹くれえ、おれに呉れたつてよかりさうなもんだ。」

粉屋の女房は暫く默つてゐたが、やがて溜息をついた。

「お連れのお方はどなた？」と女房が訊く。

「旦那樣だよ——コストマロフの。」

エルモライは五六本の樅の枝を火の中へはふり込んだ。すると、枝は忽ち一せいにぱちぱちと音を立てて、濃い白い煙を彼の顔にまともに吹きつけた。

「どうして、おめえの御亭主は俺たちを母屋へ通さなかつたんだい？」

「險難がつてさ。」

「何だい、太つ腹をかかへて……ねえ、アリーナ・チモフェーヴナ、お利口だから、お酒を一杯、振舞つておくれよ！」

粉屋の女房は立ち上つて、闇の中に消えて行つた。エルモライは聲低く歌ひはじめた。

いとしいひとに逢はうとて、どんなに通つたことぢややら、
靴のかかとが擦り切れた、どいつもこいつも穿き古し……

アリーナは小さな壜とコップを持つて戻つて來た。エルモライは立ち上つて十字を切つて一息に飲み乾してしまつた。「うまい！」と彼は附け加へた。

「時に、どうだね、アリーナ・チモフェーヴナ、やつぱり工合が惡いのかね？」
「惡くつてね。」
「どんな鹽梅だね？」
「夜になると咳が出て困るの。」
「旦那はどうやらおやすみなすつたやうだ。」エルモライは暫く默つてゐたが、やがてかういつた、「ね、アリーナ、醫者樣へは行くなよ、却つて惡くなるからな。」
「だつて、行きはしないもの。」
「でも、俺んとこへは來ておくれよ。」
アリーナはうつむいた。
「おらあその時は、てめえの嬶なんか追ひ出しちまふからな、」エルモライは言葉をつづけて、「ほんとによ。」
「エルモライ・ペトローキッチ、旦那さんを起こした方がいいわ。ほら、お馬鈴薯がすつかり燒けたわ。」
「なあに、ぐうぐう寢かしとけよ、」私の忠實な僕は平然といふのであつた、「散々に駈けずり廻つて草臥れたもんだから、ぐつすり寢込んでんのさ。」

私は乾草の中で寢返りをうつた。エルモライは立ち上つて、私の方へ寄つて來た。「おいもが出來ましたよ。おあがんなすつて。」
私は檐の下から出て行つた。粉屋の女房は桶から立ち上つて、歸つて行かうとした。私は彼女に話しかけた。
「この水車場はよほど前に借りたのかね？」
「三位一體の祝日からで、丁度二年目になります。」
「そして御亭主はどこの人？」
アリーナには私の問ひがよく聞きとれなかつた。
「おめえの亭主はどこの人？」エルモライは聲を高めて、繰り返した。
「ビェーレフの者です。ビェーレフの町人でして。」
「ぢや、お前さんもやはりビェーレフかね？」
「いいえ、わたし、お屋敷の、……お屋敷の者でしたの。」
「どこの？」
「ズヴェルコフ樣の。今では自由の身でございますけれど。」
「何ズヴェルコフつていふ人？」

「アルクサンドル・シールイチ。」

「ぢや、お前さんはあの奥さんの小間使をしてなかつたかね？」

「まあ、どうして御存じでございますの？　さうでしたの。」

私は一そうの好奇心と同情心とをもつてアリーナを見た。

「私はお前さんの御主人を知つてるよ。」と私は言葉をつづけた。

「御存じですつて？」と低い聲で答へて、彼女は顔を伏せてしまつた。

どうして私がかほどの同情心をもつてアリーナを見たかを、私はここで讀者諸君に告げなければならぬ。私はペテルブルグに滯在中、ふとしたことでズヴェルコフ氏と知合ひになつた。彼はかなりに重要な地位を占めてゐて、物わかりのよい敏腕家として評判されてゐた。彼の細君はぶくぶくした、神經質の、涙もろい、そのくせ意地惡な、――まことに取柄のない、話せぬ代物であつた。また一人息子といふのが、甘やかされて、わがまま放題の、典型的な馬鹿息子であつた。ズヴェルコフ氏自身の風采もあまりぱつとしない方で、鼠の眼のやうに小さな眼が、幅の廣い、殆んど四角といつてもいいやうな顔から狡猾さうに覗いて、鼻の孔の天井を向いた、大きな尖つた鼻が聳えてゐる。短く刈り込んだ白髪は、皺の多い額のうへに刷毛のやうに突つ立つてゐて、薄い唇はいつも顫へながら、甘つたるい微笑をうかべてゐた。ズヴェルコフ氏はよく兩足を開き、

肥つた手をポケットに入れて立つてゐた。いつぞや私は二人で郊外に馬車を驅つたことがあつた。二人は談じ合つた。經驗のある敏腕家らしく、ズヴェルコフ氏は私に『眞理の道』を教へはじめた。

「かう申すのはをこがましい次第ですが、」と彼はつひに辯じ立てた、「とかく、あなたみたいに若い方は、みんな向ふ見ずにあらゆることを判斷したり議論したりなさる癖があります。あなた方は自分の生まれた國といふものをあまりよく御存じない。露西亞はあなた方にはまだよくお分かりになつてゐないのです、ほんたうに！……あなた方はいつも獨逸の本なんかばかり讀んでらつしやるから。現に早い話が、今もです、あなたはその何ですね、お屋敷づきの百姓のことなどを、かれこれ仰しやる。まあしかし、それもよろしい、敢へて私は論議しますまい。みんな結構なことですからね。それにしても彼らをあなたは御存じでない。彼らが果してどんな連中なのか、御存じがない。（ズヴェルコフ氏は大きく鼻をかんで、嗅煙草を嗅いだ。）失禮ですけども、一例としてちよつとした逸話を一つお話しいたしませう。それは多分あなたにも興味がありませうから。（ズヴェルコフ氏は咳一咳して。）あなたは私の家内がどんな人間か御存じの筈ですが、あれより以上に氣立のいい女は、又と世間にありますまい。たしかにさうでせう。ですから、あれに附いてる小間使などから見れば、私んとこは人間の住まひではなくて、眼の前に天國が現

はれたやうなものです……尤も、私の家内は原則として亭主のある女を小間使に置かないことにしてゐます。全く役に立ちませんからね。子供が次から次と殖えて來る。やれ何だかんだと、さうすれば自然、奥様の方の用事をきちんきちんと足して、細かい癖までも呑み込むといふやうなことは覺束なくなる。そこまでは構つて居れなくなる。そんなことはもう念頭にないのですからね。それがそれ、人情といふものです。ところで、私たちは或るとき自分の持村へ通りがかりに寄つたことがあります、ええと、何年まへになりますかな、――さう、さう、出鱈目を申しては申しわけがありません。たしか――十五年ほど前でしたよ。ふと見ると、『百姓頭のところに娘が、それはそれは綺麗な娘がゐるぢやありませんか。綺麗だといふばかりでなく、振舞ひにもどことなく人を惹きつけるやうなところがあるんです。そこで家内が私にいふんです、『ねえ、ココー、』實は私のことを家内はかう呼んでたんですが――『この娘をペテルブルグへ連れて行きませうよ。ねえ、ココー、わたし氣に入つたわ、すつかり……』とかうなんです。それで私もいつたのです、『ぢや、ぜひ連れて行かう』つて。百姓頭はむろん三拜九拜でしたよ。何しろ、こんな幸運が廻つて來ようとは夢にも思つてなかつたんですからね……。いや、勿論、娘は泣きましたよ。實際、それは初めの間といふものは空怖ろしいものですからね。何しろ生家を離れるつてことは……誰にしても、無理はありませんがね。しかし間もなく私たちに馴ついて來ました。最初は女

中部屋に置きまして、みんなで躾けてやりました。ところで、あなた、どうお思ひになります。娘は非常な進歩ぶりを見せましてね、家内などはすつかり惚れ込んでしまつて、特別にあの娘を可愛がり、とうとう他の者をさし置いて、あの娘を自分の侍女にまで引き上げてやつたのです……大したもんぢやありませんか！……それに嘘も隱しもないところ、家内はあんないい小間使を抱へたことがないのです、決してないのです。親切で、丁寧で、素直で――全く非の打ちどころのない女でしたよ。そのかはり、正直にいふと、家内もおそろしくあの娘を甘やかしましてね。立派な身なりをさせたり、主人と同じ食卓で食べさしたり、一しよにお茶を喫ませたり、……いや、もうこれだけでも想像がつくでせう！　こんな風で、あの娘は十年ばかりも家内に仕へたのです。ところがどうでせう、不意に、或る天氣のいい朝に、アリーナが――あの娘をアリーナと呼んでゐたのです、――ことわりもなく私の書齋へ入つて來て、――私の足もとへ身を投げ出すぢやありませんか……。忌憚なく申しますと、私はこんなことには我慢がならなかつたのです。人間といふものは、自分の品位といふものを忘れてはならんものだ。さうぢやありませんか？いかがでせう？――『且那様、アレクサンドル・シールィチ、お願ひがございまして。』『どんな？』『どうかお嫁にやつて下さいまし。』私は白狀しますと、とてもびつくりしちやいました。『馬鹿！　お前も知つての通り、奥さんには、ほかにかはりになる小間使がゐないぢやないか？』

『わたし、これまでどほり奥様に使つていただきます。』『馬鹿をいへ！　馬鹿を！　奥さんは亭主もちの小間使なんか置かないよ。』『マラーニヤなら私のかはりが勤まります。』『そんな指圖がましいことはやめて貰はう！』『では、およろしいやうに……』私は正直のところ、全く茫然としちやいました。何しろ私はかういふ人間ですから、これほど癪にさはることはない――敢へて申しますが、忘恩ほど私に癪にさはることはありません、……あらためて申すまでもなく、あなたも、私の家内がどんな人間かといふことは、よく御存じでせうが、あれは天使のやうな女、實にえもいはれぬほど善良な女です……。いかなる惡人といへども、おそらく、彼女をいたはるでせう。さて、私はアリーナを追ひかへしました。その場は兎も角として、いづれは目が覺めてくれるだらうと思つたのです。とかく、私は人間に忌まはしい忘恩などといふ惡德のあることを信じたくなかつたのです。まあ、さうぢやありませんか？　ところが半年も經つと、またのこのことやつて來て、同じことを哀願するのです。實際そのときはむつとして、あいつを追つ拂つた上に、おどしつけてやつた。奥さんに言ひつけるぞといひましてね。じつに癪にさはつた、……それにしても先づ私の驚きを想像して見て下さい。暫くしてから、家内が涙ながらに私の部屋へ入つて來ましたが、ひどく興奮してゐるので、私は思はずもぎくりとしました。『何ごとが起こつたんだ？』『アリーナが……』ね、あなたお分かりでせう、……私、お話しするのも恥かしいくら

ゐです。『よくもそんなことが！……相手は一體誰だ？』『下男のペトルーシカです。』私の癇癪玉は破裂した。私はかういふ人間ですから……中途半端なことは大嫌ひなんです！　ペトルーシカ……あいつが惡いんぢやない。罰しようと思へば罰することも出來るが、私の考へるところでは、あいつには科がないんだ。アリーナこそ……うむ、よしよし、また何をか言はんやだ。私は、勿論、立ちどころに髪を切らせ、棒縞の粗末な麻の着物を着せて、村に送り還さしました。家内はいい小間使を失くしましたが、それは何とも致し方がない。何といつても家内では亂脈に目をつむつてゐるわけには行かない。腐つた分子は一刀兩斷のもとに切り棄てる方がましですからね……さあさあ、ここまで來れば御自身で判斷がおつきになるでせう――御存じの通り、私の家内は、あれは、あれは、やつぱり、天使なんです！……だつて、家内はアリーナに愛着をさへ持つてゐたのですよ、――ところが、アリーナはそれを知りながら、かかることを慚ぢんのですからね……え？　ちがひますか？　どうです……え？　だが、もうこれについては、兎や角いふがものはないでせう！　いづれにしても、仕方がなかつたんです。私は、とりわけ私は、この娘の忘恩に、永いこと、悲しみもすれば、腹も立ててゐました。何といつても、かういふ手合ひに義理や人情を求めたつて始まらない話です！　狼をどんなに養つたところで、狼はやつぱり元の古巣を戀しがるものですからね……まあ、これは將來のために、いい教訓です！　私はただほんの一

つの例ととして申し上げたかつたので……」

ズヴェルコフ氏は話を言ひ切らずに、頭をめぐらして、心ならずもわき起こつて來た興奮を雄雄くも抑へながら、マントに一そうしつかとくるまつた。

讀者は今や、何ゆゑに私が同情の眼をもつてアリーナを見たか、おそらく、おわかりになられたことであらう。

「お前さんは大分まへから粉屋と一しよになつてるのかね？」とつひに私は訊ねた。

「二年になります。」

「よく旦那が許してくれたね？」

「お金を出して、自由にしていただいたので。」

「誰に？」

「サヴェリイ・アレクセーキッチに。」

「それは、どういふ人？」

「良人ですの。（エルモライはひそかに微笑んだ。）旦那様が私のことをお話しになりまして？」

アリーナは暫く默つてから、かう附け足した。

私は何と答へていいかわからなかつた。「アリーナ！」と遠くの方から粉屋が呼ぶ。女房は立

ち上つて、行つてしまつた。

「亭主といふのは、善い人かね？」と私はエルモライに訊いた。

「まあ、どうつてこともねえんで。」

「二人の仲に、子供はあるのかね？」

「一人ありましたけんど、死にました。」

「何かね、粉屋はあの女を氣に入つて、貰つたのかね、え？……お金を出してつて、ずゐぶん出したらうね？」

「そいつは知りましねえ。あの女は讀み書きが出來ますんで、あの商賣には……その何ですよ……重寶ですねえ。だから氣に入つたんでやんせう。」

「ところで、お前は、あの女と前からの知合ひなのかい？」

「へえ、あれの主人の家へ、以前よく出入りしとつたもんですから。あのお屋敷もここからあんまり遠くはありません。」

「では、ペトルーシカといふ下男も知つてるかい？」

「ピョートル・ワシーリッチですか？　知つてるどころぢやありません。」

「今どこにゐるかね？」

「兵隊になつてまさ。」

私たちは暫くの間、默つてゐた。

「どうかね、あの女は加減がよくないやうだが？」しまひに私はエルモライにかう訊ねた。

「ええ、駄目な身體なんでさ！……いや、どうやら明日はいい獵がありさうでさ。ここらで且那も一寢入りなすつてもいいでせうね。」

野鴨の一群れが私たちのうへを口笛のやうな聲で啼きながら翔んで行つた。私たちはやがて、程遠からぬ川に降り立つのを耳にした。今や全く暗くなつて、肌寒くなり出した。林の中には夜うぐひすが聲高く囀つてゐる。私たちは乾草のなかに身を埋めて、ぐつすり寢込んでしまつた。

苺の泉

八月の初めには、たまらない暑さがよく續くものである。その頃になると、正午から三時頃までの間は、ずゐぶん思ひきりのいい、熱心な人でも獵などする元氣がなくなるし、かなり忠實な犬でも、『獵人の拍車のお掃除』を始める。つまり、痛々しげに眼をしばたたき、大げさに舌を突き出しながら、主人のあとをのろのろとついて廻るのである。主人にいくら叱られても、意氣地なく尾を振つて、當惑したやうな顏附をするばかりで、前へは決して出て行かない。偶〻私は丁度このやうな日に獵に出かけたことがあつた。永いこと、たとひちよつとの間でもいいから、どこか、物蔭に身を寄せたいといふ誘惑と私は闘つてゐた。永いこと、私の根氣のいい犬は熱に浮かされてでもゐるやうに、無闇矢鱈に駈けずり廻つたが、あまり效果のないことは萬々承知してゐながら、藪のなかを相變らず探し廻つてゐた。息づまるやうな暑さに、私はとうとう自分たちの最後の體力と能力とを取つておかうといふことを考へさせられてしまつた。すでに寛容なる讀者諸君に知られてゐる、あのイスタの小川に私はやうやくのことで辿りつき、斷崖を下り、黄

いろい、濕つた砂を踏みながら、『苺の泉』と呼ばれて、この界隈にあまねく知れわたつてゐる泉をさして歩いて行つた。この泉は川岸の裂け目から湧き出して、次第次第に小さい、しかも深い谷に流れ、そこから二十歩ほどのところで、樂しげな潺々たる音を立てて川に落ちるのである。谷の斜面には低い槲の木が繁茂し、泉のほとりには短い天鵞絨のやうな草が青々してゐる。太陽の光は殆んど泉の冷たい、銀いろの水のおもてに屆くことがない。私は泉のところまでやつて來た。草のうへには、みんなのためを思つて、通りがかりの百姓が置いて行つた樹の皮づくりの柄杓があつた。私は十分に水を飲み、樹蔭に寢ころんで、あたりを見まはした。泉の水が川に流れ落ちるところに出來た、またそのために絶えず漣を立ててゐる入江のわきに、二人の老人が私の方に背を向けて坐つてゐた。一人はかなりに頑丈さうな、背の高い男で、小ぎれいな木賊いろの百姓外套を着、柔毛の緣なし帽子をかぶつて、釣りをしてゐる。も一人は瘦せ形の小柄な男で、つぎはぎのある交ぜ織りの上衣をまとひ、帽子もかぶらず、膝のうへに餌の入つた壺をおいて、日光を遮らうとでもしてゐるかのやうに、胡麻鹽頭へ、時をり手を翳してゐた。私はこの男をつくづくと眺めた。すると、この男はシュミーヒノ村のスチョープシカであつた。ここに讀者のお許しをえて、この男を紹介させていただくことにする。

私の持村から數露里のところにシュミーヒノの大きな村があり、そこには聖コスマ、聖ダミア

ノ醫者兄弟殉教者のために建てられた石造の教會堂が聳えてゐる。この教會堂の眞向ひには、嘗てはさまざまな斜屋、離れ屋や仕事場、厩や植木小舍や、箱馬車小屋、風呂場や假の臺所、お客用、家扶用の傍屋、花卉栽培用の溫室、民衆用のぶらんこ、そのほか、多少とも役に立つ建物などに取りかこまれた宏莊な地主の邸宅が輪奐の美を誇つてゐた。この邸宅には、富裕な地主の一家が住んでゐて、何事もなく暮らしてゐたのであるが、或る晴れた朝のこと、俄かに、火事が起きて、忽ちにして財寶悉く灰燼に歸してしまつたのであつた。一族の者はよその家に移つて、この屋敷は荒廢してしまつた。廣い燒跡は榮園と變じ、昔の土臺の名殘りをとどめる煉瓦の山がところどころに見えてゐる。火災を免れた丸太をもつて、小さな小舍が無造作に作られたが、屋根はゴシック風の四阿を建てるために十年も前に買つてあつた解板で葺かれ、庭師のミトロファンが女房のアクシーニヤと七人の子供をつれてここに引つ越しをさせられた。ミトロファンは百五十露里も離れた主人のところに、料理用の青物野菜を屆けるやうにといひつけられた。またアクシーニヤはチロール種の牝牛の世話をいひつかつた。この牝牛はモスクワで高い金を出して買はれたものであつたが、殘念なことに生產能力を缺いてゐるから、手に入れて以來、一滴の乳も出さなかつた。アクシーニヤにはまた、唯一の『お屋敷の』鳥である冠毛のある灰色の雄鴨の世話も託されてゐた。子供たちはまだ年が行かないところから、何らの義務も仰せつけられてゐなか

つた。しかも、これがために彼らは全く懶惰になり切つてしまつたのである。折あつて、私も二度ばかりこの庭師のところに泊まつたことがあり、通りがかりに胡瓜を求めたこともあつたが、これはどうしたわけなのか、夏でさへも無闇に大きく、まづい水つぽい味といひ、厚い黄いろい皮といひ一種特別なものであつた。私が初めてスチョープシカに會つたのは、實はこの男の所であつた。ミトロファン一家と、片目の兵士*の妻のところの小さな部屋に、お情けで置いて貰つてゐる、ゲラシムといふ年老いた、耳の遠い教會の世話役を除いては、シュミーヒノの村には誰一人の家僕も殘つてゐなかつた。なぜといふのに、私が讀者に紹介するつもりでゐるスチョープシカなんぞは、大體が『人間』の勘定に入れられない類ひの者であつて、殊に『家僕』と見做すことなどは尙さら出來なかつたのである。

人は誰しも社會において、たとひどんなものであらうとも、地位といふものをもち、多少の親戚とか知人とかくらゐはもつてゐる。どんな者でも、邸(やしき)に勤めてゐる以上、給金を貰はないまでも、少くとも所謂『あてがひ扶持』くらゐは頂戴する。然るにスチョープシカに至つては、全く何らの補助も受けず、どこにも緣邊といふ者がなく、誰ひとり彼の消息を知つてゐる者がなかつた。この男には過去といふものさへもなかつた。彼についての噂もなく、彼は戸籍調べにも勘定に入れられてゐたかどうか覺束ない。嘗て誰かのところに從僕を勤めてゐたとかいふ、おぼろげ

な噂があつたけれど、彼が何者であるか、何處から來たのか、誰の息子なのか、どういふ風の吹き廻しでシュミーヒノの農奴になつたか、どんな工合にして、交ぜ織りの、あのいつとも知れぬ遠い昔から着込んでゐる百姓外套を手に入れたのか、どこに暮らしてゐるのか、何によつて暮らしを立ててゐるのか、――さういふことは、誰にもまるで見當がつかなかつたし、また、正直のところ、誰一人こんな問題に心を配る者はなかつたのである。四代まで溯つて、どの家系の系譜をも知つてゐるトロフィームィチ爺さんでさへ、ただ一度こんな話をしたばかりであつた。それによると、スチェパンは亡くなつた先代の領主で、旅團長であつたアレクセイ・ロマーヌィチが、凱旋に際して、戰場から輜重車に乘せて連れかへつた土耳古女の筋にあたるとか。よく祭の日など、露西亞の舊習として、あまねく人に物を惠んだり、蕎麥饅頭や綠酒を出して大盤振舞ひをする日――かういふ日にさへもスチョープシカは並べられた食卓のところへも、酒樽のところへも寄りつかず、主人に禮をしたり、近づいて主人の手に接吻するやうなこともしなければ、主人の眼の前で、執事の肥つた手でなみなみと注(つ)がれた酒盃(さかづき)を、主人の健康を祝しながら一いきに飲み乾すやうなこともしなかつた。ただ時として、通りがかりの親切な人が、食べさしの饅頭のきれはしを、哀れな男に分けてやるくらゐのものであつた。復活祭の日が來ると、彼とも接吻*の禮は交はされた。けれども脂じみた袖を折返しもしなければ、うしろのポケットから赤く染めた卵を

とり出して、息をはずませ、まばたきしながら若主人夫妻や大奥様にこれを捧げるやうなこともしなかつた。夏は鷄舍のうしろの物置に暮らし、冬になると湯殿の脱衣場に寢起きし、きびしい寒さの日には乾草小屋に夜を明かした。人は彼を見馴れて、時には足蹴にさへもした。しかも誰ひとり彼とは口をきかなかつた。彼自身も生まれ落ちるとから口をきいたことがなささうに見受けられる。例の火事があつてからはこのあぶれ者は庭師のミトロファンのところに身を寄せた。すなはちオルロフ人の言ひ方をもつてすれば『轉げ込んだ』のである。庭師は彼をそのままにして置いた。別に自分のところに居れともいはなかつた。さうかといつて、別に追ひ出しもしなかつた。スチョープシカは庭師のところに住んでゐたのではない。菜園に暮らして、そこに落着いてゐたのだ。歩くのにも、動くのにも、少しの音を立てず、口に手をあてて、びくびくしながら嚏をしたり咳をしたりした。いつも蟻のやうにこつそりと、あちこちと駈けずり廻つたり、小まめに動いたりしてゐた。さうしてこれがみな、食ひ物にありつくため、——ただただ食ひ物のためにであつた。また、朝から晩までかうして身過ぎの心配をしなければ、わがスチョープシカ先生は干乾しになつたに違ひない。日暮れに何を食べて腹ごしらへをしたらよいのか朝のうち分からないとは、まことに因業な話であつた。時には生垣の下に坐つて、大根を嚙つたり、人參をしやぶつたり、泥だらけの甘藍の丸く固つてゐるままのを細かく刻んだりしてゐる。時には水桶を

かついで、うんうん唸つてゐる。また小さな壺の下に火を焚いて、ふところから何か黑いものの片をとり出しては、壺の中にはふり込んでゐる。かと思ふと、自分の小屋の中でこつこつ板をたたいたり、釘をうちつけたりして、麵麭をのせる棚を作つてゐることもある。すべて、かういふことをまるで人目をぬすんでするかのやうに、默々とやつてゐる。だから、人が氣がついて振り向く頃には、もうかくれてしまつてゐる。時によると、二日くらゐ、急に姿をかくすことがあるが、もとより彼の居らぬことに氣のつくやうな人はゐないのである……。ところが、またひよつこり現はれて、どこか生垣の下あたりで、五德に木つぱをくべてゐる。顏は小さく、眼は黃いろ味がかつて、髮の毛は眉のあたりまでかぶさり、鼻は尖つてゐて、耳はかなりに大きく、蝙蝠の耳のやうに透きとほつてゐる。髯は剃り落としてから二週間になりますといつたやうな恰好で、決して、それより長くも短くもならない。

さて私は圖らずもイスタ川のほとりで、もう一人の老人と一しよにゐるスチョープシカに出會つたのであつた。

私は彼の方に近づいて行つて、挨拶をし、その傍に腰を下ろした。よく見ると、スチョープシカの連れも私の知合ひであつた。これは今では自由の身となつてゐるが、もとはピョートル・イリッチ＊＊＊伯爵のところにゐた農奴で、名をミハイル・サヴェリエフ、綽名を霧（トウマン）といふ者。この

男は、私が實に屢々、泊まつたことのある旅籠屋の亭主で、ボルホフ出の肺病やみの町人のところに暮らしてゐるのであつた。オルロフの街道を通り過ぎる若い役人や、その他の暇な人たち（縞の羽毛布團にくるまつて旅する商人などはこの限りでないが）は、今でもトロイツキイの大きな村から程遠からぬ所に、道に寄つて、二階建の、今は見るかげもなく荒廢し、屋根は落ちかつて、窓を閉め切つた大きな木造家を見ることであらう。よく晴れて、陽の照りつける眞晝時など、何が哀愁をそそるといつて、先づこの廢屋に越したものはないのである。ここには嘗ては、客好きで有名な、前世紀の富裕な貴族ピョートル・イリッチ伯爵が住まつてゐた。昔は縣内の相當の人士が擧つて彼の家に集まり、耳も聾せんばかりの素人仕込みの音樂の高い調べや、打ち上げる火箭や花火の爆音に心ゆくまで踊り、遊び興じたものであつた。そこで今、この荒れ果てた地主の邸宅のほとりを通りかかつて溜息をもらし、過ぎ去つた昔の日、過ぎ去つた青春の頃を思ひ起こす老婦人なども、おそらく一人や二人ではないであらう。伯爵は永いあひだ、饗宴を催しつづけ、永いあひだ、媚びを呈するお客たちの群がる中を、愛想よく微笑みながら歩き廻つたものである。けれども、不幸にして彼の財產は一生を歡樂のうちに過ごすのには足りなかつた。二遁も三遁も行かなくなると、伯爵は職を得ようとしてペテルブルグに出かけて行つたが、何らの解決をも俟たずして、ホテルの一室で死んでしまつた。霧はこの人の從僕をしてゐたが、伯爵の

存命中に自由の身にして貰つてゐた。彼は年のころ七十ばかり、几帳面な、氣持のよい顏をしてゐる。殆んど絶え間なく、今ではエカテリナ朝時代の人のみが浮かべるやうな、溫和な、しかも氣品のある微笑を浮かべてゐる。人と話をするときは、おもむろに唇を開いたり緘ぢたりして、眼をやさしく細め、少しく鼻にかけて物をいふ。また何か大きな事でもするかのやうに、悠々と鼻をかみ、嗅煙草をやるのである。

「おい、どうだい、ミハイル・サヴェーリッチ、」と私は言葉をかけた、「魚はだいぶ釣れたかい？」

「まあ、どうか一つ、魚籠を覗いて下せえ。川鱸が二ひきと、鯉魚が五ひきばかりかかりました……おいスチョープシカ、お目にかけろよ。」

スチョープシカは私の方へ魚籠を差し出した。

「どうだい、この頃は、スチェパン？」と私は訊ねた。

「ま……ま……ま……大した……ともなくう……旦那……ぽちぽち。」とスチェパンは舌に重たいものでも載つてゐるかのやうに吃りながら答へた。

「ぢや、ミトロファンは達者かね？」

「へい、達者ですとも、……も、もちろん、旦那。」

可哀さうな男は向ふを向いてしまつた。

「どうもあんまり食ひつかないぞ。」と霧がいひ出した、「何せ恐ろしく暑いもんで、魚の奴め、みんな藪のかげへもぐり込んで、晝寢をしてやがるんだな……餌つけてくれよ、スチョーパ。（スチョープシカは蟲を取り出して、掌のうへに載せ、二度ばかり叩きつけて釣針につけ、唾をかけて霧に渡した。）ありがたう、スチョーパ、……ときに旦那樣は、」私の方を向いて言葉をつづけた、「獵にお出かけでございますかな？」

「御覽の通りだ。」

「大きに……。して、旦那樣の犬は英國種ですかな、それとも紐芬蘭島種ですかな？」

老人は時には、『私たちはこれでも世渡りして來ましたよ』とでもいふやうな風をするのが好きである。

「どこ種だか知らないが、良い犬だよ。」

「大きに……して、いつも犬を連れてお出かけなさるんですかね？」

「二番ひばかり飼つてあるよ。」

霧はにこにこして、首を振つた。

「たしかにさうですなあ、人によつてはとても犬の好きな人があるし、さうかと思ふと、てんで犬など見向きもしない人がある。手前どもの素人かんがへでは、犬なんてものは大體が、その、いはば、勿體をつけるために飼つておくもんですからね……。何ごとも先づこの式ですからね、馬もこの式だし、獵犬方もむろんさうだし、何もかもさうですからな。お亡くなりになつた伯爵樣は——*ああ、天國に安らはせ給へ——實を申すと、根つからの獵好きではありませんでしたがな。それでもちやんと犬を飼つておいでになつて、年に二度くらゐは獵にお出かけになつたものです。金モールのついた赤い上衣をつけた獵犬方がお庭に勢揃ひをして、角笛を吹きます。すると殿樣がお出ましになる。お馬が曳き出される。やがて殿樣がお乘りになると、主獵頭が、おみと足を鐙にかけて、自分の帽子をとつて、そのうへに手綱をのせて差し出します。すると殿樣はこんな按配式に長い鞭をお鳴らしなさる。それを合圖に獵犬方が閧の聲をあげて、ぞろぞろとお庭から繰り出して來る。一人の獵僕が伯爵樣の後乘りをつとめて、絹紐で二匹の御寵愛の犬を追ひ立てて、世話をしたものでございますよ……この人も、コサック鞍に高々と跨りまして。頬つぺたの赤い、眼玉をこんなにぎよろぎよろさせる奴でしたがな……。さあ、それで、こんな時にはお客樣もたくさん見えましてね。お遊宴があつたり、厚いお款待があつたり……あ、逃げやがつた、畜生！」

「どうだね、伯爵樣は大分お盛んだつていふぢやないか？」

老人は餌に唾をかけて、また釣絲を垂れた。

「それは御存じの通り、豪儀なお方でしたからねえ。ペテルブルグ一流の、その何でございますよ、上つ方がよく訪ねて見えましたものでしてね。淺葱いろの綬を帶びて、食卓について、お食事を召し上つてゐるところを、よくお見かけしたものでした。さて、殿様は何せお客様をもてなすことにかけては名人でございましたからね。よく私をお呼びになつて、『霧や、』と仰しやる、『明日までに儂は生きた蝶鮫が欲しいんぢやが、とらしてくれ、いいかい？』『はい、かしこまりました。』 刺繍をした上衣だとか、鬘だとか、杖だとか、香水だとか、極上等のコロン水だとか、煙草入れだとか、とても大きな繪だとか、みんなパリからぢかにお取り寄せになりましてね。宴會をお開きになると、いやもう、——それこそ、そのさわぎてつたらどえらいもんでしてね。お花火がぽんぽんあがる、馬車を乘り廻す！ 大砲までぶつ放すさわぎ。樂隊だけでも全部合はせりや四十人も揃つてゐましたよ。獨逸人の指揮者を置いたんですが、この獨逸人め、いやに天狗になつちまつて、御主人様たちと同じ食卓で食事をしたがる始末、あまりの事に殿様もやり切れなくなつて、暇をお出しになりました。うちの樂士連中はあんな指揮者がゐなくたつて、自分のすることくらゐはわかると、かう仰しやいましてね。そこらはどうしても殿様の勢ひですよ。それからまた踊りに耽つて、——夜の明けるまで踊りましたよ。いつも大がいは古い踊りでした

がね……、おや、おや、おや……兄弟分がかかつたぞ！（老人は小さな川鱸を釣り上げた。）そら、どうだ、スチョーパ？ ——さて、殿様はいかにも殿様らしいお方でした。」 老人は再び絲を垂れながら語りつづける、「また氣立てのいいお方でしたよ。どうかすると、下々の者を毆りつけることもござりましたが、ぢきにもう掌をかへすやうに、けろりと忘れておしまひになる。ただ一つ困つたことは、お妾をたくさん置かれたことです。ああ、あんな妾どもは眞つ平だ！ あいつ等があの方を落ちぶれさしたんだ。あいつ等は何といつてもみな下々の者からお擇りになつたのでしてね。そんなら別に文句はないぢやないかと思へるでせう？ ところが、どうして、——どんなものでも歐羅巴中で一ばん金目のものを貰はなければ、承知しないと來てるのです。『好きなことをして暮らすのが、何故いけないんだ、どうせ殿様のなさることだ』と、かう仰しやるお方があるかも知れない……けれども、何も好き好んで、身上を臺なしにするつて法はねえでせう……。中にもかういふのがありましてね、アクリーナといふ奴で、今は亡くなりましたけんど、——ああ、天國に安らはせ給へ！——ただの百姓あがりで、シートフ村の小頭の娘だつたんですが、これがいやはや、飛んだあばずれでしてね。時によると、伯爵様の頰つぺたを打つたりしたんです。すつかり殿様をたぶらかしましてね。私の甥なんかも、その女の仕立ておろしの着物へチョコレートをこぼしたといふんで、兵隊にやられたのです。あいつのおかげで、兵隊なんぞに

やられたのは甥ばかしぢやありませんがね。だが、何ですねえ……何といつても、あの頃はなかなか結構な御時世でしたよ！」老人は深い溜息をつきながら附け加へた。やがて俯向いて默り込んでしまつた。

「ぢや、お前の旦那は嚴しいお方だつたんだね？」私は暫く默つてゐたあとで、かう切り出した。

「何しろ、あの頃の風尙でしてね、旦那樣。」と老人は頭を一振りして異議を申し立てた。

「今はもう、そんなことはしなくなつたよ。」私はじつと彼を見ながら、かういつてやつた。

彼は私を流し目に見た。

「そりやもう、この節はたしかに昔よりはずつとよくなりましたよ。」と彼は呟いて、釣絲を遠くの方へやつた。

私たちは樹蔭に坐つてゐたのであるが、樹蔭にゐてさへも、息づまるやうに暑かつた。蒸し暑い空氣に氣が遠くなりさうだ。燃えるやうな顏はさみしく、一陣の風を待ちわびてゐる。しかも、そよとの風もなかつた。太陽は黝ずんで見えるほど青い空からつよく照りつける。眞向ひの岸には燕麥の畑が黃ばんで、あたりに苦蓬が伸びてゐる。燕麥の穗はただ一つとして動かなかつた。少し下手の方には、百姓の馬が川の中に膝まで浸して佇ち、濡れた尻尾を物憂げに振つてゐる。

時をり、流れに垂れかかる茂樹のかげに、大きな魚が浮き上つて、水の面に泡を立て、かすかな漣を後に殘して、靜かに水底に沈んで行つた。焦げたやうな草の中には蟋蟀がかまびすしく鳴いてゐる。氣うとげに鶉は啼いて、禿鷹は曠野のうへをすうと翔り、絕えず忙しく羽ばたきし、扇のやうに尾を擴げては、同じ所にとまる。私たちは暑さに參つて、身動きもせずに坐つてゐた。すると俄かに、うしろの谷に物音がして、誰かが泉へ下りて來た。ふりかへつて見ると、年ごろ五十ばかりの百姓で、ルバーシカを着て、樹の皮沓を穿き、白樺の皮で編んだ佩囊と上衣を肩にかついで、埃りにまみれた男であつた。彼は泉に近づいて、貪るやうに水を飲み、やがて立ち上つた。

「おや、ヴラスだな？」と霧が彼を見つめながら叫んだ、「兄弟、今日は。どこから舞ひ戻つたんだい？」

「やあ、今日は、ミハイル・サヴェーリッチ。」百姓は私たちの方へ近づきながら、かういつた、「遠くからだよ。」

「どこへ雲がくれしたんだい？」と霧が訊ねる。

「モスクワへ行つて來たんだよ。旦那ん所へな。」

「何しに？」

「お願ひがあつて行つたのさ。」

「何を？」

「年貢を負けて貰ふか、それとも、賦役をさして貰ふか、ほかの土地へやつて貰ふか、何とか、……悴が死んだんで、はあ、一人ぢや、やり切れねえんだよ。」

「おめえの悴が死んだつて？」

「うん死んだのよ。故人は、」とちよつと息休めをして、百姓は附け足した、「モスクワで、辻馬車屋になつて暮らしてたんだがな、實をいふと、年貢はあれが拂つてくれてたんだ。」

「ぢや、今んところおめえは年貢にしてあるのかい？」

「さうだよ。」

「で、旦那はどうだつたい？」

「どうだつたつて？　おれを追つ拂ひやがつてさ。おめえ、旦那の言ひ草ぢや、『どうして直接に來るんだ。そんなことなら、ちやんと管理人といふ者がある。先づ第一に管理人のところへ申し出なくちやいかん……それに、ほかの土地へといつたところで、どこへ遣つたらいいんだ？』つてさ……。おめえ、かうなんだよ、『先づ、手前の未納金を納めろ』つて。すつかり旦那は怒つちやつたんだ。」

「それで、何かね、引きさがつたといふ譯かい？」

「さうよ。悴の野郎がまだ身上でも殘してゐるかどうだか、訊き合はしたかつたんだけんど、はつきりしたこたあ分かんなかつた。俺あ、あいつの親方に『わしはフィリップの親父でがす』つていつてやつた。すると、かういふのさ、『そんなこと俺が知るもんか、貴樣の息子は何一つ殘しちやゐねえ。それどころか、まだ俺に借りがある』つて。そんで俺あ引きさがつたのよ。」

百姓はまるで他人事ででもあるかのやうに、にこにこしながら一部始終を物語つた。けれど、小さな、くしやくしやした眼には涙がたまつて、唇は引き吊つてゐた。

「それで、これからどうするんだい、家へ歸るのかね？」

「だつて、ほかにどこに行くところがある？　あたりめえよ、家へ歸んのは。嬶も今頃はいい加減に腹を減らして、參つてるだらうよ。」

「ぢやあ、お前……いつそのこと、それ……」とスチョープシカはだしぬけにいひかけたが、妙にどぎまぎして、口をつぐみ、餌壺の中を搔きまはし始めた。

「それで、管理人のとこへ行くのかい？」いくらかびつくりしたやうに霧はスチョーパの顏を覗いて、言葉をつづけた。

「あんな奴がとこへ行つてどうするだ！……あんなに滯りもあんのに。悴は死ぬ前に一年ばか

りも患つたもんで、手前の年貢も拂へなかつたんだ……。だが、俺あもう半分やけくそだ。どんなにしたつて鐚一文出つこはねえだからな……。な、おい、お前がどんなに狡くつて、盗まうつて、俺はきれいさつぱり文なしなんだからな！（百姓は笑ひ出した。）あのキンチリヤン・セミョーヌィチがどんなに利口だといつたつて……。とても……」

ヴラスはまた笑ひ出した。

「おい？　そんなこといつたつて、――それぢや困るぢやねえかよ、ヴラス？」と霧は、ゆつくりと一句一句、間をおいていつた。

「一體、何で困るんだらう？　い……や……（ヴラスの聲はとぎれた）何ちふ暑さだ。」顔を袖で拭きながら、言葉をつづける。

「あんたの主人は誰だね？」と私は訊ねた。

「ワレリヤン・ペトローキッチ・＊＊＊伯爵様です。」

「ピョートル・イリッチの息子かね？」

「ピョートル・イリッチ様の……、さやうでございますよ。」と霧は答へる、「亡くなつたピョートル・イリッチ様は御存命中に、あのヴラスの村を息子さんにお分けになつたのです。」

「どうかね、お達者でゐるかね？」

「結構なことに、お達者でございますよ、」とヴラスが答へた、「とてもお血色がよくなつて、お顔なんか、まるで見違へるやうになりましたよ。」

「時に、旦那様、」私の方を向いて、霧が言葉をつづけた、「モスクワ近邊ならいいんでせうけれど、ここらぢや年貢に難儀をしましてね。」

「一戸あたりいくらなんだね？」

「九十五ルーブリで。」とヴラスは呟いた。

「まあ、そのとほりでさ。地所はほんの少ししかなくつて、有るのはお邸の山林くらゐでしてね。」

「それにね、あれも賣つたといふ話で。」百姓が口を出した。

「まあ、そのとほりで、スチョーパ、餌をくれ……何だ、スチョーパ、寢てんのかい、え？」スチョープシカはびくりと身を慄はせた。私たちの傍に百姓は腰を据ゑた。また、しんとした。向ふの岸で、誰かが唄をうたひ出した、またひどく力のない唄を……。可哀さうにヴラスは悄氣かへつてゐた。

半時間のうちに、私たちは別れ別れになつてしまつた。

郡の醫者

或るときのこと、人里遠く離れた秋の野原からの歸り途で、風邪をひいて寢込んだことがあつた。仕合せにも熱の出たのは、郡役所のある町の宿屋へ來てからだつたので、さつそく、醫者を迎へにやつた。半時間ほどして、郡役所づきの醫者がやつて來たが、背の大きくない、かなり痩せた、髪の毛の黑い人であつた。一通りの發汗劑を處方して、芥子泥（からしでい）を貼るやうに命じてから、謝禮の五ルーブリ紙幣を實に手際よく袖の折返しに押し込んだ、――尤もこのとき、空咳をして、あらぬ方を見た、――そこでそのまま歸らうとしたのであつたが、どうしたわけか話がはずんで、つい坐り込んでしまつた。私は熱に惱まされてゐて、夜つぴて眠れまいと豫想してゐたところなので、氣のおけない人と少しばかりお喋りをすることが、まことに嬉しかつた。茶が出た。醫者は話に耽つた。この人はなかなか話せる人で、元氣よく、大へん面白かつた。世の中には妙なことがあるもので、或る人とは一しよに暮らして懇意にしてゐながら、唯の一度も心の底から打ちとけた話をしないこともあるし、さうかと思ふと、或る人とは知合ひになつたかならないうちに、

ぢきに、こちらからの場合も、先方からの場合もあるが、まるで敎會堂で懺悔をするときのやうに、祕密といふ祕密を喋つてしまふことがある。私はどうしてこの新しい友人の信用を博し得たのか知らないが、――兎に角、彼は何といふこともなしに、いはゆる『のつけに』、まことに珍しい出來ごとを聞かしてくれたのであつた。そこで今、私はこの人の話を、私に好意を寄せて下さる讀者諸君にお傳へしようと思ふ。私はなるべく醫者の言葉をもつてお話しすることとしよう。

「御存じありませんでせうかな、」彼は低い、顫へ聲で（これは混ぜ物のないベレゾフ煙草をやるせゐである、）話し出した、「御存じありませんでせうかな、ここの裁判官のムィロフさんを、あのパーヴェル・ルキッチさんですが？……御存じがない……まあ、どつちでもいいことですが。（彼は咳拂ひをして、眼をこすつた。）さて、あの何ですがね、その事件といふのは、はつきり申し上げると、大齋期の時分、あの雪解けの眞最中のことです。私はその裁判官のところへ遊びに行つて、骨牌（プレフェランス）をやつてゐたんです。あの裁判官は好い人でしてね、骨牌（プレフェランス）の大好きな人でした。ところへ、俄然（この醫者はよくこの俄然といふ言葉をつかふ、）下男がたづねて來てゐるといふことなんです。私が『一體、何の用でせう？』といふと、家の人が『書附を持つて來ました。きつと病家からでせう。』といひます。『ぢやその書附を下さい。』と私が申しました。見ると案の定、病家からでした。……あ、よろしい、ねえさうでせう、これが飯の種なんですからね……

…、ところで用向といふのはかうなんです。書附はさる地主の未亡人から來たもので、それには『娘が死にかかつてゐます。どうか御來診の程を……云々、馬車をお迎へに遣はします……云云』とあります。なるほど、それだけならば、お安い御用だ……。ところが、町から二十露里もあつて、おもては眞暗だし、それにあの道と來てはやり切れない！　それに、あの人は貧乏してゐるから、留銀貨二枚以上はとてもあてにすることは出來ない、それだつてまだ怪しいもんだ。惡くすると、布や何かの端つくれ位が關の山かも知れない。けれど、御承知のやうに、義務は何より先のことでせう。一人の人間が死にかかつてゐるんですからね。私は俄然、常務員のカリオピンに歌留多を渡して、家に向ひましたのです。見ると、玄關の踏段の傍に見すぼらしい、がた馬車が待つてゐます。馬は百姓馬で、太鼓腹の、とても太鼓腹のやつで、毛といへば蓬々と、蓬そのまま。馭者は遠慮をして、帽子をとつて腰を下ろしてゐる。私は腹の中で思つたんです、『いやはや、こりや、文なしの家だな……』つて。あなた、お笑ひですね、けれど實際のところ、私どものやうな貧乏人は何でもかんでも考慮に入れなければなりませんからね……。若しも、馭者が大名のやうに坐り込んで、帽子もとらず、それにまた髯の中から冷笑を洩らし、鞭を振つてゐるとでもいふんでしたら、十ルーブリ札二枚は平氣でとれるんですがね。ところが、今夜のは勝手がちがふやうだ。さればとて仕方はないと考へました、義務が第一ですからね。私は最も必

要な藥劑を持つて、出かけました。あなたには御想像もつかないでせうが、やうやくのことで向ふへ着くには着きました。道はまるで地獄の道のやうだし、小川がある、雪がある、水溜りがある、水窪がある。すると俄然、堤防が切れてたり――お話のほかです。けれど、とうとう着きました。ちつぽけな、藁葺の家でしたよ。窓に灯りが見える。たしかにみんなが私を待つてゐるんです。レースの部屋頭巾をかぶつた、かなり品のいいお婆さんが出て來て、『どうかお助け下さいまし、死にかかつて居ります。』とのことです。私は『御心配なさいますな……、御病人はどちらで？』といひました。『どうぞこちらへ。』と言はれて、行つて見ると、小綺麗な部屋で、隅には御燈明がともり、寢臺には二十歳ばかりの娘が、昏睡狀態に陷つてゐる。かなりの熱を出して、苦しげな息づかひをしてゐる。熱病だつたのです。ほかに姉妹になる二人の娘がうろうろして涙に暮れてゐました。そこで話を聞くと、昨日は元氣で少しも變つたこともなく食事も進んだのですが、今朝になつてから頭が痛いとこぼし、夕方近くなつて、不意にこんな工合になつたとのことです……私はもう一度、『御心配は要りません。』と言つてやりました。何せ、これが醫者の任務ですからね、――さういつて、私は診察にかかりました。惡い血を出して、芥子泥を貼るやうにいひつけ、水藥を調合しました。その合間に、私は娘を見ました。見ると、どうでせう、――たしかに私はこんな顏を未だ嘗て見たことがない！　一言にしていへば、美人なんです！

私はすつかり可哀さうになつてしまひました。こんな氣持のいい容貌が、眼が……、ところが有難いことには、少し落ちついて來ましてね。汗も出るし、いくらか正氣ついたらしく、あたりを見廻し、につこりして、手を顏のところへ持つて行きました……、姉妹たちが覗き込んで、『どうなの？』と訊ねました。『大丈夫よ。』といつて、向きかへりました……、見てゐると、病人はすやすやと寢てしまひました。ところで、私は、『御病人をここで、絶對安靜にして置かなければいけません。』といひました。それからみんなで爪先歩きをして、出て行きました。ただ小間使だけはいつも殘つてゐましたけど。客間には、もうサモワルが置いてあり、ジャマイカ島產の糖酒も備へてありました。私たちの商賣では、あれがなくてはやれませんでしてね。お茶を入れてくれて、私に泊まつて行つてくれとの賴みでした……、無論、承知をしました。もうこの時刻になつて、どこへ行けるものですかね！　お婆さんは、しよつちゆう溜息をついてゐます。私は『あなたはまあ何を？　御病人はきつと助かりますよ。御心配なさいますな。それよかお寢みになつた方がよろしうございます。もう二時ですよ。若しかして何か事がございましたら、すぐに起こすやうに仰しやつて下さい。』『はい、宜しうございます。』お婆さんが出て行くと、つづいて娘たちも自分の部屋へ引き取りました。私のためには客間へ床をしつらへてくれました。さて、横になつたのですが、どうしても寢つかれないのです、――何ていふ不思議なことだらう！　た

しかに、身體はもうへとへとに疲れ切つてゐた筈です。けれど、病人のことが氣になつて仕方がないのです。とうとう私はこらへ切れなくなつて、いきなり起き上りました。『患者がどんな樣子か、見て來よう。』と私は考へました。病人の寢室は、客間と並んでゐます。で、私は立ち上つて、靜かに扉を開けました。胸がはげしく動悸をうつてゐます。中を見ると、小間使は眠つて、口をあけ、鼾までかいてゐます、怪しからん奴です！　病人はこちら向きに寢て、兩手を伸ばしてゐます、可哀さうに！　私は傍へ寄つて行きました……、すると、俄然、眼をあけて、じつと私を見つめるのです！『どなた？　どなた？』私はどぎまぎしちやいました。『驚いてはいけません。お孃さん。私は醫者ですよ。お氣分がどうか、ちよつと拜見に來たんです。』と私は申しました。『あなたがお醫者樣？』『さう、醫者ですよ、……お母さまが町へ私を迎へによこされたんです。お孃さん、惡い血をとつてあげましたよ。ですから、お寢みになつて下さい。もう二日もすれば、かならずお歩きになれるやうにして差し上げますよ。』『ああ！　さうだわ、さうだわ、先生、私を死なさないで頂戴……どうぞ、どうぞですから。』『どうしてそんなことを、そんなつまらないことを！』けれど病人はまた熱が出てゐるなと思つたので、脈をとつてみると、果して、熱がある。娘は私を見て、俄然、私の手をとりました。『私がどうして死にたくないのか、お話しませう、お話しませう、……今、誰もゐませんし、けど、どなたにも、……ね、……聞いて下

さいな。』……私は身を屈めました。娘は私の耳元ちかく唇を寄せましたが、髪の毛が私の頰にさはるのです……。正直のところ、私は頭がくらくらして來ました……、それから囁き始めたのですが……、何が何やらさつぱり分からんのです……、ああ、やつぱり譫言をいつてゐるのです……ひつきりなしに囁くのですが、ひどく早口で、何だか露西亞語ではなささうです。やがて、話が濟むと、身ぶるひをして、頭をぐつたり枕に落し、他言してくれるなといふ合圖をしながら、『よございますね、先生、どなたにも……』と、指で私を脅かすやうな風をしました。私はどうかかうかして、娘を落ちつけ、飲み物をくれて、小間使を起こし、それから部屋を出たのでした。」

ここで醫者は、烈しく嗅煙草をやつて、しばらくの間、茫然たるさまであつた。

「ところが、」と彼は言葉を繼いだ、「次の日は、私の豫期に反して、一向によくならないのです。私は考へに考へた末、俄然、逗留することに肚を決めました。ほかの患者が私を待ち受けてはゐたのですけれど……御承知のやうに、その方も等閑には出來ません。さういふことをすれば、商賣の方で難澁しますからね。しかし、何といつても、第一に病人は實際のところ、絶望に瀕してゐるのです。第二に、有體に申しますれば、私は娘に強い愛着を感じてゐたのです。のみならず、家中の人も氣に入りましてね。不如意な人たちではあつたのですが、實に珍しく教養のある方た

ちでした……。何でも父親は學者で、文章家で、勿論貧困のうちに亡くなりはしましたが、子供に立派な教育だけは受けさせることが出來たのです。また、たくさんの書物も遺して行きました。私がむきになつて病人の身のまはりのことを心配してやつたためか、それともほかに仔細があつたのか、兎に角、敢へて申しますが、私を家内の者が、身内の者のやうに大事にかけてくれるのです……、さうかうしてゐるうちに、怖るべき惡路の季節になつて、あらゆる交通は、その何ですね、全く杜絶し、藥品類を町から取り寄せるのも非常に骨が折れた次第です……、病人は快方に向はず……、一日一日と日が經ち……、ところが……、ここで……、（醫者はちよつと言葉を休めた。）全く、どういふ風に申し上げたらいいのか分かりませんが……、（また嗅煙草をやつて、喉を鳴らし、ちよつとお茶を啜つた。）尻込みせずに申しますが、病人がですね……、どういつたらいいでせう……、その何が、私を戀しましてね……、いや、さうぢやない、娘が戀した譯ではありません……、が、といつて……、實際、どういつたら、その……」（醫者は目を伏せて、顔を赧らめた。）

「いや、」と彼は勢ひこんで言葉をつづけた、「何の戀したなんぞと！　結局、人間は身のほどを知らなくてはなりません。あの娘は、教養があつて、利發で、物識りでした。それで私はといへば、自分のつかふ羅甸語さへも、まあすつかり忘れてゐる始末。それでは見かけはどうかとい

ふと（醫者は微笑みながら、わが身を顧みて、）これまたどうも、自慢になりさうもありません。けれど神様は、やつぱり私を空馬鹿にも產みつけなさらなかつたので、私は白いものを黑いといふやうなことはなく、多少は物の判別もつきます。早い話が、アレクサンドラ・アンドレーヴナ――これは娘さんの名前なんですが――あれは私に愛を感じたといふのではないけれども、いはば、なつかしいといふ氣持、尊敬とでもいふやうな氣持を感じたのでせう。もつとも娘の方では、別の意味にとつてゐたかも知れません。兎に角、娘の素振りはそんなものだつたのですよ。そこはお察しを願ふことにしませう……、けれども、」と、息もつかずに、かなりまごつきながら、とぎれとぎれな話を終へた醫者は附け加へた、「すこし脫線したやうですね……、これでは何が何やらお分かりにならないでせう……、さて、今度は何もかも順序を追つてお話しすることにいたしませう。」

醫者はお茶を一杯飲み乾して、いくらか前よりも落ちついた聲で話し出した。

「ところでですね。病人はだんだん惡くなるばかりでした。あなたは醫者ではないから、病氣がとても自分の手に負へないと氣がつき出したとき、わけても氣のつき出した最初の頃に、醫者の胸中がどんなものか、お分かりになりますまい。自信もへつたくれもあつたものではありません！　俄然、お話しにもならないほど、怖氣づいて來る。今までに覺えたことは何から何まで忘

れてしまつたかのやうな氣がして來る。それに病人の方でも信用してくれないし、もう他の人もこつちのまごついてゐることに氣がつき出して、不承不承で容態なんかを知らしたり、危かしさうに、こちらを見て、こそこそ話をしてゐるやうな氣がして來る……、いや、實に忌々しい！　こちらではこの病氣に利く藥がある筈だ！　何でもそいつを一つ見つけなければならんと考へる。この藥ではないか知ら？　と思つてやつて見る。が、駄目だ、これではいけない！　藥がうまく利いてくるまで待つてはゐられなくなる……、これをやつて見たり、あれをやつて見たり。時には處方全書を取り出して、――ここにある。ここにあるこれかなと思ふ！　實際、時には手あたりばつたり本を開けて、一か八かやつて見る氣になる、――ところが、そんなことをしてゐるうちに、病人は死にかけてゐるのです。ほかの醫者なら、或ひは助けたかも知れないと考へる……。『ほかの醫者にも立ち合つて貰はなければ、――私一人では責任がもてません。』と言ひ出す。こんな場合に、醫者の馬鹿面つたらない！　まあ、年を食つて馴れつ子になれば、もう何でもなくなる。人が死んだ、――それはこちらの手落ちではない、こちらは道にかなつたことをしたのだと考へる。ところがもつと辛いことがあります。盲滅法に信用されてゐながら、自分でも、とても助けられないといふ氣のする時です。ところで、アレクサンドラ・アンドレーヴナの家中の者は、丁度、こんな工合に私を信じ切つてゐて、家の娘が危險に瀕してゐるといふことを忘れて

ゐたのです。私は私で、やはり、大丈夫だといつて聞かしてゐたのですが、その實、心はすつかり滅入り込んでしまふのです。かてて加へて、不仕合せなことには、いよいよ道の悪い季節になつて、馭者が藥をとりに行つて歸るまでに、幾日もかかるといふ始末。私は病人の部屋をちつとも出られない。何しろ離れるわけには行きませんのでね。いろんな、何ですね、それ、面白い話をして聞かせたり、一しよに骨牌をやつたりして。夜も附き添つてゐてやりました。お婆さんは涙をこぼしてお禮を言ふのですが、私は心の中では何もお禮をいはれるにはあたらないと考へてゐました。打ち明けてお話しいたしますとね、――今さら隱し立てをしたつてはじまりませんからね、――私は病人に惚れ込んでしまつたのでした。そしてまたアレクサンドラ・アンドレーヴナの方でも、私を憎くは思はんやうになつて來ましてね。どうかすると、一切、ほかの者を自分の部屋に入れないのです。話をしかけて、どこで私が修業したかとか、どんな暮らしをしてゐるかとか、親戚にはどんな人がゐるかとか、どんな家へ往診に行くかとか、根掘り葉掘り、こまごまと訊ねるのです。話をさせてはいけないとは心に思ひながらも、差しとめることが、――お察しのとほり、斷然と差しとめることが出來ない。頭を抱へては自分の心に訊いて見たこともありました、『お前は一體、何をして居るのだ、この惡黨め？』と。……ところが娘は私の手をとつて、離さずに、私を見つめる。しげしげと暫く見つめた後、傍を向いて溜息しては、『ほんとにあなた

は、おやさしい方ね！』といふんです。娘の手はかなり熱くなつて、眼を大きく見張つて、暗い眼を……『ほんとに、あなたは、おやさしい、いいお方ですわね。この邊の人とはまるきり違つて、ほんとに、違つてらつしやるのね……、あたし、どうして今まであなたを知らずにゐたのでせう！』『アレクサンドラ・アンドレーヴナ、靜かにして下さいね。』と私はいひました、『私のいふことを聞いて下さいね、私には、何の取柄があつて、そんな風に仰しやられるのか分かりませんが……まあ、靜かにしてらして、どうぞですから、靜かにしてらして……きつとよくなりますよ、今に丈夫になりますよ。』ところで、かういふことを申し上げて置かなければなりません。」と、醫者は乘り出し氣味になつて、眉をつり上げながら言葉をつづけた、「それは、この家の人は近所の人とあまり往き來をしないことです。身分の低い者とは性が合はないし、さればといつて金持と近づきになるには、自尊心（プライド）が邪魔になるといつた工合で。何しろ、珍しく教養のある家庭でしてね。それが私にはとても嬉しかつたのです。娘は私の手からでなければ藥を飲まうとしない……、可哀さうに、私が手を貸してやると起き上つて、それを服んで、私をじつと見る……、私は氣が氣ではありません。そのうちにも病氣はだんだん悪くなる一方です。この分ではもう死ぬばかりだ。どんなにしたつて死ぬのだと私は考へました。全く、いつそのこと、こちらで一足（ひとあし）お先にお墓へ行きたいくらゐです。それに母親や姉妹（きやうだい）たちは私のすることを見てゐて、私の眼の

いろを窺つてゐるのです……、信用はなくなりかけてゐる。『あの如何でございませうか。』『大丈夫、大丈夫ですよ。』と言つたところで、何が大丈夫なのやら、私はどうしていいのやら分からなくなつてゐます。さて、或る晩、また私はたつた一人で病人に附き添つてゐました。女中も居るには居つたのですが、ぐうぐう高鼾をかいてゐるのです……、それも無理のない話だ。あれはくたびれ切つてゐたのですからね。アレクサンドラ・アンドレーヴナはその晩ぢゆう容體が惡い。熱に苦しめられてゐたのです。眞夜中になるまで、ひつきりなしに寢返りを打つて、そのうちにやつとのことで寢ついた樣子。少くとも、じつと、靜かに横になつてゐたのです。お燈明は部屋の隅の聖像の前にともつてゐます。私は腰をかけてゐましたが、つい頭が下つて、やつぱりうとうとしてしまふのです。と、俄然、誰かが横腹を突いたやうな氣がしたので、振り返つて見ると……、どうでせう！ アレクサンドラ・アンドレーヴナが、しげしげと私を見つめてゐるぢやありませんか……、唇をあけて、頰は燃え立つばかりなんです。『どうしました。』『先生、あたしはもう、いけないんぢやないでせうか！』『どうしてそんなことが！』『だつて、だつて、先生、あたしが助かるなんて仰しやらないで……仰しやらないで下さいな……、若しあたしの氣持がお分かりでしたら……、ね、後生ですから、本當の容體を隱さないで仰しやつて下さいな。』息づかひは、だいぶ忙しくなつて來る。『たしかに死ぬものと分かれば……、あたしは何もかもお話

しませう！』『アレクサンドラ・アンドレーヴナ、たわいもないことを！』『ね、あたし、ちつとも寢ないでゐたんですの……、あたし、ずつとあなたを眺めてゐたんですわ……、後生ですから……、あたしはあなたを信じてゐます。あなたはやさしいお方、正直なお方、この世の中の聖いといふ望いものにかけてお願ひいたしますから……、ほんとのことを仰しやつて下さいな！ 若し、このことがあたしにとつてどんなに大事なことだかお分かりでしたら……、先生、後生ですから、教へて下さいな。あたしは危篤なんでせうか？』『何をお教へすることがありませう。アレクサンドラ・アンドレーヴナ、つまらぬことを！』『どうぞ、後生ですから！』『あなたに、かうなつた以上は、かくし立てなんか出來ませんよ。アレクサンドラ・アンドレーヴナ。あなたはなるほど危險な狀態にゐます。けれど神樣にはお慈悲がありますからね……。』『あたし、死ぬんだわ、死ぬんだわ……。』かういつて何だか喜んでゐるかのやうに、顏の色も晴々して來たので、私はぎよつとしました。『何も氣づかひなことはございませんのよ。御心配には及びませんのよ。死ぬことなんか、あたし、怖かありませんわ。』娘はいきなり身を起こして、肘をついて身體を支へた。『今になつて……、さう、今になつて申し上げられるんですわ、あたしが眞心から感謝してゐること、あなたがやさしい、いいお方だつたこと、あたしがあなたを愛してゐることなど……』私は氣の狂つた人間か何ぞのやうに娘を見つめたのです。氣味が惡くなりましてね

……。『分かりまして？　あたし、あなたを愛してますの……』『アレクサンドラ・アンドレーヴナ、どうしてまた私風情が！』『いいえ、いいえ、あなたにはあたしの氣持がお分かりにならないんです……。』かういつて、俄然、手を伸ばして私の首にしがみついて、接吻したのです……。全くもう少しで聲をあげるところでした……。私はそのまま跪いて、枕のところに俯伏しになつてゐました。娘は默つてゐました。その指先は私の髪の毛の中でふるへてゐましたが、娘の泣いてゐるのが聞こえました。私はあれやこれやとなだめたり、すかしたりしました……。實際もう、何をいつたのか、さつぱり覺えてゐません。『女中さんが眼をさましますよ、アレクサンドラ・アンドレーヴナ。』と私は申しました、『ありがたう。本當に……、私のいふことを聞いて、靜かにしてらつしやい。』『ええ、よして下さい、もう澤山ですわ。』と娘は繰り返しました、『みんなのことなんか構はないの、眼を覺まさうと、入つて來ようと、どうでもいいの……、どうせあたしは死ぬんですもの……、だのに何をびくびくなさるんです。何を怖がつてらつしやるんです？お頭をあげてて下さいな……それとも、ひよつとしたら、あなたはあたしを愛して下さらないのかも知れません。若しかしたら、あたしは勘ちがひをしてたのか……、若しさうだつたら、御免なさい。』『アレクサンドラ・アンドレーヴナ、何を仰しやるんです！　私は愛してますよ、アレクサンドラ・アンドレーヴナ。』娘は眞ともに私の眼に見入つてゐましたが、やがて兩手を擴げ

て、『そんなら、あたしを抱いて下さいな……。』打ち明けて申せば、あの晩どうして私は氣が狂はなかつたのか分からないのです。私は病人が我と我が身を殺すやうなことをしてゐるのも感じてゐたし、病人が記憶といふものを殆んど失つてゐることも分かつてはゐたのです。それにまた自分がもう直きに死ぬ身だと思はなかつたら、私のことなんか考へもしなかつただらうくらゐは、ちやんと分かつてゐました。何せ二十五にもなつて、色戀も知らずに死んで行くなんて辛い話ですからね。それが娘を苦しめたんでせう、だからこそ絶望のあまり、私みたいな者にもすがりついたのでせうね。……お分かりでせうね？　けれど娘はしつかりと私を抑へつけて離してくれないのです。『私のことも察して下さい、アレクサンドラ・アンドレーヴナ。それに御自分のお身もおいたはりにならなければ、いけませんね。』と私はいひました。すると娘は『何故ですの』つていふんです、『何をいたはるんですの？　だつて、あたし、どうせ死ぬにきまつてるんでせう……。』娘はこの言葉をひつきりなしに繰り返してゐました。『若し、あたし、丈夫になつて、もとのやうに、ちやんとしたお孃樣顏をするんだつたら、あたし、恥かしくつて恥かしくつて仕樣がないわ……、ほんとに……、そしたら、どうしますの？』『一體、あんたが必ず亡くなるなんて、誰がいひました？』『あつ、もう、いいわ、澤山だわ、瞞されはしませんよ、あなた、嘘なんかつけないお方だわ、ね、さうでせう。』『きつとお癒りになりますよ。アレクサンドラ・アン

ドレーヴナ、私が癒してあげますよ。癒つたらお母様に祝福していただいて、……夫婦になりませう。そして幸福に。』『いいえ、いけません、もう何ていつたつて駄目だわ、あたし、ちやんと聞いてゐたの……、死ぬにきまつてるわ……、あなたはわたしに受け合つたでせう……、たしかにさう仰しやつた……。』私は辛かつた、――いろんな理由があつて辛かつた、――いろんな理由があつて辛かつたんです。時をりつまらんことが起きるものですね、何でもないやうに見えて、その實、苦しいつていふやうな。ふつと、娘は止してくれればいいので、私の名を訊いてみたくなつたのです。私の苗字ではなく、名前の方をですね。ところが生憎と、私の名はトリフォンといふんです。さう、さう、トリフォンです、トリフォン・イワーヌィチつていふんです。家に居れば、みんなが先生、先生つていつてくれるんですがね。しかしこの場合、何とも致し方がないものですから、『*トリフォンです。お孃さん』と、明らさまに名乘りましたよ。すると娘は、かすかに瞬きして、首を振つて、何だか佛蘭西語でぶつぶついつてゐましたが、――いやはや、あんまり氣持のいいものぢやありません。やがて、笑ひ出しましたが、これもやはりいい氣持はしませんでした。またこんな工合で、その晩は娘と一しよに夜を明かしました。朝早く、まるで氣でも違つたやうになつて部屋を出て、再び部屋に入つたのは、もう日が大分あがつて、お茶を濟ましてからのことです。ところが、何たることでせう！　娘は見分けがつかないほどに變つてゐるのです。棺の中へ入れられる人間だつて、これよりはきれいなものです。實際のところ、今でも分からんのです、どうしてあんな心苦しい思ひを持ちこたへたのか、自分ながらはつきり分からんのです。それでも病人はなほ三日三晩露命をつないでゐましたが、どんなに夜は苦しかつたでせう！　どんなことを私に話したでせう！……そして最後の晩には、まあお察しを願ひます――私は病人の側に坐つて、ただ一途に、『娘を一時も早く引き取つて下さい、私も一しよに引き取つて……』と神様に祈つてゐました。俄然、老母が部屋に入つて來ました……。私は前の晩に、母親に、もうすつかりいけなくなつて、とても望みがないから坊さんを迎へにやつて置いてもよからうと話しておいたんです。病人は母親を一目見ると、『ああ、來ていただいてよかつたわ……、お母さん、御覽なさい、二人はお互ひに愛し合つて――お互ひに約束をしましたの。』と言ひました。『どうしたんでございませう、先生、この娘は？』死人のやうに私は死のやうに色を變へて、『譫言をいつてるんです、熱があつて……、』といひました。けれども娘は、『ああ、いい加減にして頂戴よ、あんたはたつた今、まるで別のことを仰しやつたくせに……。指環まで受け取つておきながら……、何をとぼけてらつしやるのです？　お母さんはいい人ですもの、許して下さるわ、分かつて下さるわ、――死にかかつてるもんですもの、――嘘をいふ必要なんかないわ。手を貸して頂戴な……』私は飛びあがつて、駈け出したのです。老母は勿論、この氣配を悟りま

した。

「しかし、私はもうこれ以上、長話をしてあなたを惱まさないことにしませう、勿論、私にしたつて、正直にいふと、こんなことを何から何まで思ひ出すのは辛い話です。病人はその次の日に亡くなりました。御惠みあらせ給へ！（醫者は口早に溜息をしながら、かう附け加へた。）息を引き取るまへに、娘は身内者には座をはづして貰つて、私だけ傍にゐてくれるやうにと賴みました。『堪忍して頂戴。』と娘は言ひました、『あたし、きつとあなたに濟まないことをしたでせう……、病氣が……、けれど信じて下さいな、あたし、あなたを差しおいて、ほかの方なんか戀はなかつたわ……、忘れないで頂戴な、あたしの指環を大切にとつておいて下さいな……』」

醫者は顏をそむけた。私は彼の手をとつた。

「いや！　もう何かほかの話をしようぢやありませんか。」と彼は言つた。「でなければ、少しばかり賭けて骨牌でもやりませうか？　あんまり高尙な感情に耽るのは、私みたいな者には向かないことです。ただ一つどうしたら子供がわいわい泣かなくなるだらう、細君ががみがみ惡態をつかなくなるだらうくらゐのことを考へればいいんです。その後まあ私も正式の結婚といふやつをやりましたがね……、さうです……、商人の娘を貰つたのです。持參金は七千ルーブリでしてね。名はアクリーナ*と申しまして、トリフォンとは似たり寄つたりの奴です。何といつても性

質の惡い奴なんですが、まあそれでも、一日ぢゆう寢てばかりゐるので大助かりです……、さて骨牌はいかがです？」

私たちは一カペイカづつ賭けて骨牌をやつた。トリフォン・イワーノヰッチは二ルーブリ五十カペイカ儲けたので――自分の勝つたことにいたく滿足して、夜おそく歸つて行つた。

わが隣人ラヂーロフ

秋になると、山鴿はよく古い菩提樹の庭園に籠る。かやうな庭園は、わがオリョール縣にはかなりに多い。私たちの祖先は安住の地を選ぶにあたつて、かならず二町歩ばかりの良地を、菩提樹の並木のある果樹園にしたものであつた。ところが、五十年、あるひはせいぜい七十年がほどのうちに、これらの『貴族の巣』と呼ばれる地主の邸宅は、次第次第に影をひそめて、家は頽れ落ちてしまつたり、人手に渡されて、取り毀されてしまつた。石造りの離れ家はいたづらに廢墟と化し、林檎は枯れて薪にされ、柵や籬はあとかたもなくなつてゐた。ただ菩提樹ばかりが昔のままに生ひ榮えて、今はよく耕された畑に取り圍まれながら、私たち浮氣な子孫たちに、遠く永久の眠りについた親兄弟の身の上を物語つてゐる。名木といふのは、かういふ菩提樹の老樹で……露西亞の百姓の無慈悲な斧でさへも、この樹を避けるのである。葉は小さく、勢ひのよい枝は四方八方にはびこり、下には不斷の樹蔭をつくつてゐる。

或るときのこと、エルモライと一しよに鷸鴁を追うて、野原をうろつき廻つてゐるうちに、向

ふの方に荒れ果てた庭園が見えたので、その方へ進んで行つた。木立の中へ足を踏み入れるや否や、一羽の山鴿が叢からけたたましい羽音を立てて飛びあがつたので、私は發砲した。すると、そのとたんに私から數歩離れたところに人の叫び聲が聞こえた。木立の間から若い娘のびつくりしたやうな顔が覗いたかと思ふと、すぐにまたかくれてしまつた。エルモライは私の傍へ駈け寄つて來て、「なんでここで撃つんです。ここは地主の住居ぢやありませんか。」

これに答へる暇もなく、また犬が勿體ぶつて、射とめた鳥を嚴かに持つて來る間もなく、早くも駈けつける足音が聞こえ、やがて、髯をはやした背の高い男が繁みの中から出て來て、不足さうな顔をして私の前に立ちどまつた。私は平あやまりにあやまつてから、自分の姓名を名乘つて、彼の繩張りの中で射とめた鳥を返さうと申し出た。

「よろしい、」と彼は微笑みを浮かべていつた、「あんたの獲物をいただいて置きませう。尤も、あんたが私んとこへいらして食事をして下さるといふ條件で。」

實をいふと、この申し出はあまり嬉しくはなかつたのであるが、拒むわけにも行かなかつた。

「私はここの地主で、あなたとはお隣り同志になるラヂーロフといふ者です。多分御承知のことでもございませうが。」新しいこの知合ひは言葉を繼いだ、「今日は日曜のことでもありますから、大かた御馳走もそれ相當には出來ることと存じます。さもないとお招びする譯にも行かなか

つたのですが。」

私はかういふ場合に多くの人がするやうなあたりまへの返事をして、主人の後をついて行つた。近ごろ掃除されたばかりらしい小徑をどんどん行くと、間もなく菩提樹の林をぬけて、私たちは菜園へ入つて行つた。林檎の老樹と、勢ひよく生ひ茂つたすぐりの叢との間には、甘藍のまるい淡みどりの卷葉が斑紋をなし、忽布が高い竿にうねうねと絡みつき、畝には鳶色の桿がこまかに立ち並んで、熟れ切つた豌豆がもつれてゐる。大きな平たい南瓜は地面を轉がつてゐるかのやうに、胡瓜は埃にまみれた刺々しい葉のかげに黄ばみ、背の高い蕁麻は籬に搖れて、二ところか三ところ、韃靼忍冬、接骨木、野茨などのしげみがあるが、――これらはみな昔の『花壇』の名殘りであつた。赤ちやけた、粘り氣のある水を湛へた小さな生簀のほとりに井戸があつて、ぐるりは水溜りになつてゐる。この水溜りの中を、水をはねとばしながら、家鴨がしきりに方々を突つき廻してゐる。一匹の犬が全身をふるはし、眼を細くしながら、空地で骨を齧つてゐる。そこにはまた斑の牝牛が、をりをり尾を振つては、痩せた背中をたたきながら、氣うとげに草を拐つてゐる。小徑を一方へ曲がると、太い楊や白樺のかげから古ぼけた灰色の小さな家が見える。板葺屋根で、上り段が廻り段になつてゐる家であつた。ラヂーロフは立ちどまつた。

「尤も、」と彼は私の顏をやさしい眼附で、まともに見ながらいつた、「よく考へて見ると、あ

なたは私の家なんかへいらつしやるのは、氣が進まんでせうね。もしさうとすれば……」

言ひ切らないうちに、私は口を出して、飛んでもないことだ、あなたと食事を共にすることは、私にとつては實に愉快なことだと釋明した。

「それでは、そのやうにいたしまして。」

家の中へ入つて行く。青い、厚ぼつたい、羅紗の長い上着を着た若者が階段のところに出迎へる。ラヂーロフはすぐにエルモライに火酒を持つて來てやるやうにといひつけた。私の連れの獵師は氣前のいいこの家の主の後ろ姿に恭しくお辭儀をした。色とりどりな、さまざまな繪を貼りつけて、鳥籠をぶらさげておく應接間を通りぬけて、私たちは小さな部屋――ラヂーロフの書齋に入る。私は獵仕度を解いて、鐵砲を片隅に立てかけた。長裾のフロックを着た若者が、まめまめしく埃を拂つてくれる。

「さあどうぞ、客間へいらして下さい、」とラヂーロフが慇懃にいふ、「うちの母を紹介さしていただきます。」

私は彼について行つた。客間に入ると、眞ん中の長椅子に、鳶色の衣裳をつけて、白いレースの頭巾をかぶつた、あまり背の大きくない老婦人が腰をかけてゐた。人のよさそうな、やさ形の顏をして、おどおどと、悲しさうな眼つきをして居る。

「ではお母さん、ちよつと御紹介しますが、この方は隣り村の＊＊＊さんです。」

お婆さんは立ち上つて私に會釋をした。袋みたいな厚い毛糸の手提を、痩せて筋張つた手から離しもせずに。

「もう大分まへに、こちらへおいでしたか？」と眼をしばたたきながら力のない靜かな聲で彼女が訊ねる。

「いいえ、つい近頃です。」

「永くこちらに御滯在のおつもりですか？」

「冬までと思つて居ります。」

お婆さんは默つてしまふ。

「それから、これは、」ラヂーロフは、客間へ入るときに私が氣づかなかつた背の高い、痩せぎすな男を指して、口を挿んだ、「こちらはフョードル・ミヘーキッチ……さあ、フェーヂャ、お客様にお前の十八番を御覽に入れんか。何だつて、そんな隅つこにかくれてゐるんだ？」

いはれたフョードル・ミヘーキッチはすぐに椅子から立ち上つて、窓から不出來なヴァイオリンを取り出し、弓をとつて、――あたりまへに端の方を持つのでなく、眞ん中を持つて、――ヴァイオリンを胸にあて、眼をつむつた。やがて歌をうたひ、絃を擦りながら踊り出した。年は見た

ところ七十ばかり、痩せて骨ばつた手足には裾の長い南京木綿のフロックが物哀しげに搖れてゐた。散々踊つて、威勢よく跳び上るかと思へば、時には正氣を失つてゐるかのやうに小さな禿頭をちよつと動かしたり、筋ばつた頭を伸ばしたり、一ところを踏み鳴らしたり、さうかと思ふと、時にはいかにも難儀さうに膝を曲げたり。齒のない口から老いぼれらしい聲が洩れる。ラヂーロフは必ずや私の顏附からして、フェーヂャの『十八番』があまり私を滿足させなかつたのを見てとつたに相違ない。

「ああ、結構結構、もういいよ、爺さん、」と彼はいつた、「あつちへ行つて、何か御褒美をいただきなよ。」

フョードル・ミヘーキッチは直ぐにヴァイオリンを窓のところに置いて、先づお客分の私に、次にはお婆さんに、それからラヂーロフにお辭儀をして出て行つた。

「あれは元はやはり地主でしてね、」と新しい知人は言葉をつづける、「しかも、裕福だつたのですが、落ちぶれちやいましてね、――今ではこの通り、私んところに居候してゐるやうな始末です。……尤も若い頃はここら界隈切つての發展家として鳴らしたものでしてね。よその女房を二人も連れて駈落ちしたり、歌うたひを抱へておいて、自分も歌ふし、なかなか上手に踊つたものです……ところで火酒を一ついかがです？　お食事ももう出來てはゐますが。」

若い娘、庭園でちらりと見たあの娘が入つて來た。

「ああ、これがオーリャで！」とラヂーロフは顔を輕く反らして、「どうぞよろしく、……ではお食事に參りませう。」

私たちは食堂に入つて、席に着く。客間を出て、私たちが席に着く間に、『御褒美に』一杯きこし召して、眼をかがやかし、鼻をいくらか赤くしたフョードル・ミヘーキッチが『勝利の勝鬨、あがれかし！』を歌つてゐた。彼のためには隅の方の卓布のない小さな食卓に特別な設けがしてあつた。この氣の毒な年寄はどう見ても清潔とはいへなかつたので、いつも一座とは少し離れたところに置かれたのである。彼は十字を切つて、溜息をついて、鱶のやうに、あたりかまはず食べ始めた。食事は前觸れ通り、かなり上等で、わけても日曜のことであつたから、綺麗なゼリーや、『西班牙の風』と稱するもの（ケーキ）なども勿論ついてゐた。この席で、十年ほども地方の歩兵聯隊にゐて、土耳古戰役にも從軍したといふラヂーロフはいろんな話に耽つた。私は彼の話を、身を入れて聞きながらも、ひそかにオリガの樣子を見まもつてゐた。オリガは飛び離れて美しいといふ譯でもなかつたが、きつぱりと、落ちついた顏の表情や、廣い、色の白い額や、房々した髮の毛や、わけても蔦いろの眼、大きくはないが、はしこさうな、活々した眼には、私ならずとも誰もが動かされたことであらう。ラヂーロフの一言一句にオリガは耳を傾けてゐるかのやうに見える。その顏には、ただ單に關心をもつてゐるといふくらゐのことではなく――一生懸命に注意してゐるけはひが見うけられた。ラヂーロフは年からいへば父親といつてもよいほどであつた。オリガを『お前』といつてゐたが、その實、娘でないことは、すぐにも察しがついた。話が進むにつれて、ラヂーロフは亡くなつた細君のことを話し、オリガを指して『家内の妹です』と附け加へた。オリガは赧い顏をして、眼を落した。ラヂーロフはちよつと口をつぐんでゐたが、やがて話をそらした。お婆さんは食事の間ぢゆうには一言も口をきかなかつた。物もろくろく食べず、また私に振舞つてくれるでもなかつた。その樣子には、何かしらおどおどした、やるせない心だのみ、見る人の心を痛ましく緊めつけるやうな老いの悲しみが浮かんでゐた。食事が終る頃に、フョードル・ミヘーキッチは主客に『祝辭』を呈しようとしかけたのであつたが、ラヂーロフは私の顏いろを窺つて、默つてゐるやうにといつた。老人は唇を手にあてて、瞬きながら、お辭儀をして、また腰をかけた。しかも今度は椅子のごく端の方に。食事が濟むと、私たちはラヂーロフと一しよに書齋に歸つて行つた。

いつも一心に一つのことを考へたり、一つのことに熱情を寄せたりしてゐる連中には、たとひ性質や能力や社會的地位や教育程度が、どんなにちがつてゐようとも、交際してゆくうへに、何かしら共通な、一種の表面的な類似があるものである。ラヂーロフを氣をつけて見れば見るほど、

彼もまたさういつたやうな連中のお仲間だといふ氣がするのであつた。彼は世帶のことや、作柄のこと、草刈りのこと、戰爭のことや、地方の噂ばなし、さし迫つてゐる選擧のことなどを話したが、その話ぶりはわざとらしくなく、かなりに身を入れてさへもゐるやうに思はれた。然るに、不意に溜息をついて、非常に面倒な仕事に疲れた人かなんぞのやうに、肘椅子にどつかと身をもたせて、顏を撫でまはすのであつた。人のよい、懇ろな彼の魂全體が、或る一つの感情に浸されて、それで一ぱいになつてゐるやうであつた。私は彼が、食べることにも飲むことにも、獵をすることにも、クゥルスクの夜うぐひすにも、癲癇もちの鳩にも、露西亞文學にも、跑足の馬にも、洪牙利舞踊にも、歌留多あそびや球突きにも、舞踏の會にも、田舍の町や都の町への旅にも、製紙工場や甜菜糖の工場にも、色美しい園亭にも、お茶にも、放埒といつてもよいほどに飼ひ馴らされた側馬にも、乃至は腋の眞下へ帶を締めた肥つちよの馭者、——どうしたわけか頸を動かす度に眼が横目になつて、いやに飛び出す、あの堂々たる馭者にも、何らの興味を有つてゐないことに、早くも私は驚かされた。『結局、この地主は何ていふ人間なんだらう！』と私は考へた。それにしても、彼は決して憂鬱な、自分の運命に慊らない人間といふやうな風もしてゐなかつた。却つてむやみに親切で、上機嫌で、誰とでも親しくならうといふ、こちらの方で顏負けするほどの心がけをもつてゐるやうに感ぜられた。それでゐて、この男は誰と友達になることも、本當に

親しくなることも出來ず、それといふのも別に相手に不足があるといふのではなく、生活といふものが、全く内へ内へと向いて來たからだといふことは、同時に誰もが實際に感ずることであつた。ラヂーロフをじつと見てゐると、私は今も、これから先も、幸福な彼を想像しえないのである。彼はまた美男子ではなかつた。尤も眼眸や、微笑みや、全體の樣子には何かしら非常に人を惹きつけるものが祕められてゐた、——たしかに祕められてゐた。だからこそ、もつとよく了解して、好きにならうといふ氣がするのだと思ふ。勿論、時によると、曠野地方に住む地主の風貌があらはれた。しかし、兎にも角にも、愛すべき人物であつた。

私たちが新任の郡貴族團長の話をしかけたところへ、不意に戸口でオリガの聲が聞こえた、「お茶の仕度が出來ました。」私たちは客間へ行く。フョードル・ミヘーキッチは依然として、隅つこの小窓と扉の間に、兩足を控へ目に揃へて腰かけてゐた。ラヂーロフの母は靴下を編んでゐた。開け放した窓をぬけて、庭園からは秋らしい涼氣と林檎の香りが吹き込んで來た。オリガは、甲斐甲斐しくお茶を注いでゐた。私は今は食事のときよりも一そう氣をつけてオリガを見た。田舍娘の御多分に洩れず、至つて口數をきかないけれど、少くとも私には、彼女が何か氣のきいた、いいことを言はうとしてゐる氣持や、自分がつまらない、力のない者だといふことに氣を痛めてゐるやうな樣子は氣づかれなかつた。いかにも言ひ知れぬ苦しい思ひにあふれて洩らすやうな溜

息をつきもしなければ、思はせぶりに上をふり向くやうなことも、物思はしげに、そこはかとない微笑みを洩らすやうなこともしなかつた。恰も大きな幸福が、大きな興奮ののちに息休めをしてゐる人のやうに靜かに落ちつき拂つてゐた。立居振舞ひははきはきしてゐて、ゆとりがあつた。私はこの娘がすつかり氣に入つてしまつた。

私はまたラヂーロフと話し込んだ。どうしたはずみからか今は覺えてもゐないが、どうかすると甚だつまらない事柄が極めて重要な事柄にもまして、更に大きい感銘を與へることがよくあるといふやうな分かり切つた話にまでも及んでゐた。

「さやう、」とラヂーロフがいひ出した、「私も自分でそれを經驗しましたよ。御存じのやうに私も結婚しましてね。それもたつた三年ばかりで、家内はお產でなくなりまして。もうおめおめと生き殘つてなんかゐまいと思ひましたよ。悲しくて悲しくて、腸をかきむしられるやうでした。ところがそれでゐて、泣けない、――まるで氣でもちがつたやうに、うろうろしてましてね。死體は型のごとく被はれて、卓子の上に安置されました、――そら、丁度この部屋でしたよ。司祭がやつて來る。供の者がやつて來る。やがて歌をうたつたり、お祈りをしたり、香を焚いたりする。私はひれ伏してゐたのですが、涙は一向に出て來ない。心が石になつてしまつたやうで、頭もまたその通りで、――私はすつかり重苦しくなつてしまひました。かうして最初の日が過ぎて

しまつたのです。ところが、ほんたうにはなさらないでせうが、その晩はぐつすり眠れましてね。次の朝になつて、家内のところに入つて行きますと、丁度、夏のことで、足の先から頭の先まで陽があたつて、まことに明るい。と、不意に眼にとまつた……（そこでラヂーロフは思はず身ぶるひした。）何だとお思ひになります？　一方の眼がすつかり閉ぢ切らないでゐて、そのうへに蠅が動いてゐる……、私はどつかと倒れてしまつた。やがて氣がつくと、泣いて、泣いて、散々に泣き出して……、どうしても止められなかつたんです……」

ラヂーロフは默つてしまつた。私は彼を見、それからオリガを見た……、そのときの彼女の顏いろといつたら、死ぬまで忘れることが出來ない。お婆さんは編みさしの靴下を膝のうへに置いて、手提からハンカチを取り出し、ひそかに涙を拭つた。フョードル・ミヘーキッチは急に立ち上つて、ヴァイオリンをつかんだかと思ふと、嗄れた奇聲を發して歌をうたひ出した。たしかに一同の氣を引き立てるつもりであつたらう。しかし、私たちはみな、最初の調べを聞くなり身ぶるひしてしまつた。そこでラヂーロフは靜かにするやうにといつた。

「尤も、」とラヂーロフは言葉を繼いだ、「過ぎたことは過ぎたことですからね。過ぎたことは今さら取り返せるものでもなし、そしてつまるところは……たしかヴォルテールだかがいつたやうに、この世のものは何もかもが、よりよくなつてゆくのでしてね。」と急いで彼は附け足した。

「さうです、」と私は相槌をうつた、「勿論です。のみならず、どんな不仕合せでも辛抱は出來るものですし、どうしても逃れられない逆境なんていふものはあるものぢやありません。」

「さうお考へになりますか？」とラヂーロフがいふ、「いや、多分あなたの仰しやる通りでせう。私は、さうですね、今でも覺えてゐますが、土耳古戰爭に行つた時に、死にさうになつて病院に寢てたことがあります。創傷熱にやられましてね。いや、設備も、何もあつたものぢやありません。何しろ戰時のことですからね、――しかし、お蔭樣で入院は出來たのです！　ところが、不意にまた傷病兵が擔ぎ込まれて來る。どこへ寢かしたものだらうと、軍醫はあちこち駈けまはるのですが、――容れる場所がない。そこで私んところへやつて來て、看護兵に訊ねるのです。『生きとるか？』つて。すると答へる、『今朝は生きとりました。』軍醫は屈み込んで耳を澄ます、私はまだ呼吸をしてゐる。先生、我慢がならなかつたんですね。『や、何ていふ始末の惡い體質なんだらう。どんなにしたつて死ぬに決まつてるぢやないか。それだのに、ぐづぐづ引つぱつて、ただ場所ふさぎをして、ほかの者の邪魔をしとるばかりだ。』まあ、私は肚の中で思ひましたよ、『ミハイロ・ミハイルィチ、お前もいよいよ、いけねえらしいぞ……。』ところが快くなつて、御覽の通り、今日まで生き永らへて來たんです。だから、なるほど、あなたの仰しやる通りですよ。」

「まあ、いづれにしても、私の申した通りですよ。」と私は答へた、「よしんばあなたが亡くなられたにしたところで、やつぱり逆境から逃れたといふことになりますからね。」

「御尤も、御尤も、」と彼は卓子を强くたたきながら……、附け加へた、「ただ決心さへすればいいのです……逆境なんぞといふものに、何の意味がありませう？……何も、ぐづぐづ引つぱつてゐることはない……。」

オリガはつと立ち上つて、庭園へ出て行つた。

「さあ、フェーヂャ、踊るんだ！」とラヂーロフは叫んだ。

フェーヂャは跳び上つて、見世物の熊のまはりを、熊に元氣をつけるために囃して歩く『山羊』の役の男のやうに、乙に氣どつた、妙な態をつくつて部屋を歩きながら、『わが家の門のほとりにて……』をうたひ出した。

玄關のあたりに輕快な馬車の音が聞こえる。と思ふ間に、程なく背の高い、肩幅の廣い、がつしりした老人が部屋に入つて來た。鄕士のオフシャニコフといふのであつた……。ところが、オフシャニコフは注目に値する、一風變つた人物であるから、讀者のお許しをかうむつて、彼の話は改めて次の章ですることにしよう。ただここでは單にこれだけのことを附け加へて置きたい。すなはち、次の日、私はエルモライを連れて獵に出て、獵をしてから家に歸つた、――一週間た

つて再びラヂーロフを訪れたところ、主人もオリガも不在であつた。それから二週間すると、彼が不意に姿をかくし、母を置きざりにして、例の義妹と手を携へて、どこかへ行つてしまつたといふ話を聞かされた。縣下こぞつて騒ぎ立つて、この事件を話題にしたのであるが、この時になつて私は初めて、ラヂーロフが身の上話をしてゐたときのオリガの顔の表情がはつきりと呑みこめたのであつた。そこには單に同情の色ばかりでなく、嫉妬の炎が燃えてゐたのだ。

私は田舍を引き上げようといふときに、ラヂーロフの老母を訪れた。お婆さんは客間にゐて、フョードル・ミヘーキッチとやさしい骨牌をやつてゐた。

「御子息から何かおたよりがありますか？」つひに私はかう訊ねた。

するとお婆さんは、しくしく泣き出した。私はもうこのうへラヂーロフのことを根掘り葉掘り訊かなかつた。

鄕士オフシャニコフ

親愛なる讀者諸君よ、先づ年の頃七十ばかりの、どこかしらクルィロフの顔を想ひ起こさせるやうな顔をして、垂れさがつた眉毛のかげに、澄んだ賢さうな眼をもち、威嚴をそなへ、言ふことがきちんとしてゐて、物腰のゆつたりした、肥つて、背の高い人を想像していただきたい。これが今お話しするオフシャニコフである。彼は長い袖のついた、だぶだぶの青い上着を着て、それに上まで釦をかけ、頸に薄むらさきの絹のハンカチを卷きつけ、房のついた、磨き上げた長靴を穿いて、先づ見たところは裕福な商人然としてゐた。手はきれいな、しなやかな白い手であつた。よく彼は話をしてゐるうちに、上着の釦をいぢくつてゐた。オフシャニコフは堂々として、落ちついてゐて、物わかりがよく、懶惰で正直で頑固なところなどから、私にピョートル大帝の前の時代の露西亞貴族を想ひ起こさせるのであつた。……古風な寛衣（フェリヤス）でも着たら、さぞかし似合ふだらうと思はれる。彼は舊時代の最後の人たちの一人であつた。近所の人たちはいづれも一方（ひとかた）ならず尊敬して、彼と知合ひになることを名譽と心得てゐた。同じ身分の鄕士たちは拜まんばか

りに崇めて、遠くの方から帽子を脱ぐといふ有様で、彼あるを以て誇りとしてゐたものである。概していふと、私たちの地方では今日に至るまで郷士と百姓との區別はつけにくく、暮らし向きなども百姓より悪いくらゐで、仔牛はみじめなほど小さく、馬は辛うじて生きてゐるといふばかり。鞍具は繩で拵へてあつた。オフシャニコフは決して金持とはいはれなかつたけれど、一般の郷士とは譯がちがつてゐた。細君と二人きりで、居心地のよい小綺麗な家に暮らし、少しばかりの召使を置いて、露西亞風の服裝をさせ、『働き手』と呼んでゐた。召使はここでは土地を耕しもしたのである。オフシャニコフは敢へて貴族らしい風などはせず、地主顔もしなかつた。一度として、いはゆる『得手勝手な振舞ひ』をした例しがなく、よそへ招かれて行つても、直ぐに席につかうとはせず、新しいお客が入つて來ると必ず一應は席を立つのであつた。それも、威儀を保ち、慇懃を極めてゐるので、お客の方でも知らず識らず、一そう腰を低くするのである。オフシャニコフは昔ながらの慣はしに從つてゐたが、それも迷信からではなく（彼は極めて自由な精神の持主であつた、）しきたりでさうするまでのことであつた。例へば彈機（はね）つきの馬車を乘心地がよくないといつて好まず、競爭用の馬車か、或ひは鞣皮のクッションのついた小馬車を乘り廻して、自分自ら逞ましい栗毛の馬を驅るのであつた。（彼は栗毛の馬だけを飼つてゐた。）馭者は年が若く、赤い頰つぺたをして、髪の毛をお河童に刈り込んだ男で、革帶のついた青味がかつた百姓外

套を着て、羊の皮でつくつた低い帽子をかぶり、恭しく主人のそばに坐る。オフシャニコフはいつも晝食のあとで一寢入りして、土曜日ごとにお湯屋へ出かけ、宗教書ばかりを讀んで、（讀むときには勿體ぶつて、鼻のうへに圓い銀緣の眼鏡をかけた、）早く起き、早く寢るのであつた。けれど、鬚などはよく剃つて、髪も獨逸風に刈つてゐた。客が來ると、きはめて愛想よく迎へたが、平身低頭するのではなく、大さわぎをして、ありつたけの食べ物を御馳走するといふのでもなかつた。「おい！」と席から立ち上りもせず、細君の方へわづかに頭を振り向けて、おもむろにいふのであつた、「お客さま方に何か御馳走を持つておいで。」彼は穀物を神の賜物なりとして、賣ることを罪惡と見做してゐた。一八四〇年の、地方の大飢饉で、ひどい物價騰貴の際には、周圍の地主や百姓たちに、貯への全部を頒けてやつた。次の年に彼らは有難く、現物をもつて借りを返濟した。オフシャニコフのところへはよく近所の者が、裁いてくれの、仲裁に立つてくれのといつてやつて來たが、大抵は彼の裁斷に納得し、その忠言を肯き入れた。多くの者は彼のおかげによつて、遂にはつきりと境界を定めたのであつた……。ただ、二三度、女地主の衝突に立ち入つてからは、女の人たちの仲へ入ることは一切お斷りすると聲明した。慌しいこと、落ちつかないこと、女どものお喋りや『虚榮』には耐へられなかつたのである。或るとき、どうかして家（うち）から火が出たことがあつた。例の働き手はまつしぐらに「火事だ！　火事だ！」と喚いて彼のもと

へ駈けつけた。「おい、何を喚き立てるんだ？」とオフシャニコフは落ちつき拂つていつた、「帽子と杖を出してくれ……」彼は自分で馬を馴らすのが好きであつた。或るときは駻の強い馬が彼を乘せて、一目散に山を下りて斷崖のところへやつて來た。「おい、こら、若いのはしやうがないな、もうやめ、やめ、——死んぢまふぞ。」とオフシャニコフはやさしくいつて聞かせたが、あつといふ間に馬車はうしろに乘つてゐた少年や馬もろ共に、谷へ雪崩れ落ちてしまつた。幸ひにして、谷の底には砂が一ぱいにたまつてゐた。誰も怪我した者はなく、ただ馬だけが、足の關節をはづしたばかりであつた。「そうれ、見ろ。」とオフシャニコフは地べたから起き上りながら落ちついた聲でつづけた、「いはんこつちやない。」細君も彼には相當な女房であつた。タチヤーナ・イリイニチナ・オフシャニコフといつて、背が高く、重味があつて、口數の少い女で、いつも肉桂色の絹のハンカチを頸に卷きつけてゐた。彼女は何となく冷たい感じはしたけれど、誰ひとりとして彼女のきついことを苦情いふ者もなかつたし、それどころか、却つて多くの貧乏人から小母さんとか恩人とか呼ばれて慕はれた。よく整つた顏かたち、大きな黑味がちな眼、薄い唇など、嘗ては評判の美人であつたことを今もなほ物語つてゐる。オウシャニコフには子供がなかつた。

讀者諸君の既に御承知の通り、私はこの男とラヂーロフの家で知合ひになつた。そして二日し

て、私の方から出かけて行つた。折よく家に居るところであつた。大きな革製の肱椅子に腰をおろして、殉教者傳を讀んでゐた。灰いろの猫が肩のうへで咽喉をごろごろ鳴らしてゐた。例によつて、慇懃のうちにも重々しい態度を以て迎へてくれた。私たちは心おきなく談し込んだ。

「ほんとのところ、ルカ・ペトローキッチ、」と私は話の合間にいつてみた、「昔、あなた方が血氣ざかりの頃には、今より世の中がよかつたんぢやありませんか？」

「さうですね、今よりはまあ、全くいいところもありましたですね、」とオフシャニコフが答へた、「何しろ今よりはずつとおだやかに暮らせましたし、ずつと世の中が氣樂でしたよ、全く……しかし、さうはいつても、けふ日の方がいいですね、あんた方の孫子の代になれば、もつともつとよくなるでせう、きつと。」

「ところがね、ルカ・ペトローキッチ、私はまた、あなたが昔の自慢をなさるとばかり思つてましたよ。」

「いや、別に昔のことは取り立てて自慢するがものはありませんよ。早い話が、あなたがいまれつきとした地主様でいらつしやるのは、やつぱりお祖父さまが地主様でいらした昔と、ちつとも變りはないにしても、もうあれほどの威勢は得られないでせうね。尤も、あなたはお人柄がちがつていらつしやる。今でも私たちはほかの地主方から壓迫を蒙つて居りますが、それはどうも

致し方がないらしいです。苦は樂の種といふ譯でしてね。いや、若い自分に見飽きてゐたやうなことは、けふ日はさつぱり見られませんよ。」

「といひますと、例へば？」

「まあ、一例としてお祖父さまのことをまたお話しいたしませう。實に豪勢なお方でしてね！われわれ風情は大ぶん傷めつけられたものですよ。多分、御承知でもございませうね、――いや、御自分の土地を御存じないなんて法はないでせう――チェプルィギノからマリーニノへかけて、楔形に食ひ込んでゐる地所は、……あれはもとは手前どものものなんで、――あれこそそつくり手前どものものぢやありませんか。それをお祖父さまは取り上げておしまひになつたのです。馬に乘つてお出かけになりましてな、あの地面を指して、これはわしの所有地だ、と仰しやつて、御自分のものにしてしまつた。うちの亡くなつた親父は（天國に憩はせ給へ！）、几帳面な男で、やはり癇癪持でしたから、我慢し切れなくなつて、――實際また自分の財産を捲き上げられて喜ぶ奴もないものですからね！――裁判所へ訴へて出たのです。ところが、一人が訴へ出ただけで、ほかの者は寄りつかない、――先が怖ろしかつたのです。ところで、お祖父さまのところへは、――ピョートル・オフシャニコフが地面をお取り上げになられたといつて訴訟を打つてるさうだ――と、みんなが告げ口をしましてね、……お祖父さまは、さつそく獵師のバウーシュに配下をつけておよこしなすつて……。そこで、親父はバウーシュにつかまへられて、御領分の方へ引き立てられたのです。そのころ、私はまだほんの子供でしたが、跣足になつて親父のあとを追ひかけたものです。ところで、どうしたでせう？……親父はお屋敷の傍へ連れて行かれて、窓の下で折檻までされるぢやありませんか。お祖父さまはバルコンにお立ちになつて見ていらつしやる。お祖母さまもやはり窓の下にお腰を下ろして、やはり見てらつしやる。親父は『奥さま、マリヤ・ワシーリエヴナさま、どうぞお取りなし下さいまし。あなた樣だけでも、可哀さうと思召し下さいまし！』と叫ぶのです。けれど、お祖母さまはただ伸びあがつて、やつぱり見てらつしやる。あげくの果ては無理矢理に、地面の一件から手を引くといふ約束をさせられ、生きて歸らして貰へるのにお禮を申せとまでいひつけられ。こんな工合で、あれがお宅のものになつたのです。まあ、お宅の百姓どもに訊いてごらんなさい、あの土地を何と申して居りますか。『棍棒畑』といつてゐますが、それといふのも、棍棒で撲つて取つたといふ因緣からです。まあ、かういつたやうな譯で、私ども下つぱの者には、昔風のことを、あんまり懷しいとは思へないのでしてね。」

私はオフシャニコフに何と返事をしたらいいのか分からなかつた。顏を見る勇氣もなかつた。

「その頃も一人、近所にスチェパン・ニクトポリオーヌィチ・コモフといふのがゐました。こ

れがまた、あの手この手と、何かにつけて親父を虐めたものです。ひどい呑んだくれで、人に奢るのが好きで、醉ひが廻つて來ると、佛蘭西語で『セ・ボン』などといつて、涎を垂らす、――實に見つともないつたらありません。近所隣りの地主に、どうか自分のところへ來ていただきたいなんて使ひを出して頼みまはるのです。いつもトロイカはちやんと用意が出來て、停まつてゐる。若し、招かれても行かないとなれば、早速自身で不意にやつて來る、……また實に奇人でしてね！　『素面』のときは大して法螺も吹きませんが、一杯やると、やれペテルブルグのフォンタンカに家を三軒もつてゐる。一軒に煙突が一つ附いてゐる赤塗の家、もう一軒は黄いろ塗で、煙突が二つ、もう一軒は青塗で煙突がないとか、やれ息子が三人あつて（實は結婚したこともないくせに）、一人は歩兵、一人は騎兵、あと一人は自分で獨立してゐるとか、……さういふ話をはじめる。それから、いふことがいいでせう。三人の息子が一軒ごとに一人づつ住んでゐて、長男のところへは海軍の將官連中が乘りつけるとか、次男のところへは陸軍の將官連中がわんさと訪ねて來るとか、三男坊のところへはしよつちゆう英國人がやつて來るとか。さうかうするうちに立ち上つて、『長男の健康を祝して乾杯。うちではあいつが一ばん心掛けがいい！』といつて、――それから泣き出してしまふ。誰にもせよ、乾杯をいやがつたりする者があると、それこそ、大へん。『射ち殺してやる。葬式も出させないぞ！』といふえらい權幕です。……それから躍り上

つて喚き出す、『さあ、踊れ、皆の衆、自分も樂しみ、わしをも面白くしてくれよ！』さあ、かうなつたら、踊らないわけには行きません。命がけでも踊らにやなりません。自分のところの農奴の娘は、くたくたに草臥れさせられる。時によると、夜どほし、全く朝までコーラスを歌ひつづけて、一ばん高い聲のつづいた者が御褒美にあづかる。娘たちが疲れて來ると、コモフ先生、頭をかかへて、呻き出す、『ああ、よるべない身の上とは俺のこつた！　みんなが、俺みたいに、いい男を見棄ててしまふ！』すると馬丁どもが直ぐに娘たちを激勵する。困つたことに、うちの親父はまたコモフを好きでしてね。とんでもないことになつたものです！　親父は危ふく棺の中へ突つ込まれんばかりの目に遭ひました。實際、殺されてしまつたかも知れないのですが、有難いことには、親父は人手にかからないで死んでくれたのです。酒に醉つぱらつて鳩小舍から落ちましてね、……まあ、手前どもの近所の地主連中と言や、昔はこんなものでしたよ。」

「ずゐぶん時勢が變つたもんですね！」と私はいつた。

「さうですとも、さうですとも、」とオフシャニコフも同意して、「……まあ、さうはいふものの、昔の貴族たちは、今どきよりはずつとずつと豪勢に暮らしてゐたものです。都會の大貴族のことなどは、もはや言ふがものはありません。私もモスクワで見飽きるほど大貴族を見ましたから。ところが、今では、あちらでもあんな人たちが絶えてしまつたといふ噂です。」

「モスクワへおいでになつたことがあるんですか？」

「ええ、昔、もうだいぶ昔のことです。私は當年とつて七十三になりますが、モスクワへ行つたのは、やつと十六の時でした。」

オフシャニコフは溜息をついた。

「あちらでは、どなたにお會ひでした？」

「大貴族の方々に大ぜいお目にかかりました。みんながお目にかかれましたのでね。と申すのは、あの方々は開けつ放しに、みんながびつくりするほど素晴しい暮らしをしてをりました。ただ亡くなられたアレクセイ・グリゴローキッチ・オルロフ＝チェスメンスキイ伯爵様には、どなたも敵ひませんでした。そのアレクセイ・グリゴローキッチ様には度々お目にかかりました。丁度、伯父貴が家令をして居りました縁故で。伯爵様はカルーガ門に近いシャーボロフカにお住居がございましたが、あれこそ、まぎれもない大貴族でしたよ！　あの威嚴、あの懇ろな御挨拶といつたらとても筆にも言葉にも盡せないほどでした。お身丈だけでも大したもので、それに御威力といひ、お目元といひよくお人柄を呑み込まないうちは、とてもお傍へなど近よれないほどでした。實際、怖ろしくなつて、氣おくれがするんです。そのくせ近づいて見ると、まるでお天道様に暖められて、すつかりいい氣持になるといつたやうな工合でした。あのお方は誰彼となく直

かにお會ひになりましてね。何ごとにも通人でいらしつた。競馬などにも御自分でお出かけになり、みんなと競走なすつて、決して不意に相手を追ひ越すやうなことをして相手の氣を惡くしたり、いら立たせるやうなことはなさらず、ただお終ひに來てお拔きになるのでした。また、まことにやさしいお方で、相手をなだめたり、馬を賞めたりなさるのです。また極上等の宙返り鳩を飼つていらした。よくお庭へお出ましになつて、肘椅子にお掛けになつて、鳩を放してやれとおいひつけになる。ぐるりの屋根の上には、下男どもが大鷹を來させまいと鐵砲を持つて立つてゐる。伯爵様の足もとには大きな銀の盥に水を入れて置く、水に映る鳩の影を御覽になるのです。片輪や乞食は何百人となく伯爵様からお扶持をいただいて暮らしてゐました……。お金をどれほどお遣りになつたことでせう！　ところが、一旦お怒りになると、まるで雷様でも落ちたやうです。誰も彼もすつかり恐れ入つてしまふ。しかし、その場かぎりで、泣くほどのことはない。見上げると、もう伯爵様はにつこり笑つておいでになる。饗應があると、モスクワ中の者を集めて大盤振舞ひをなさる！　……それにまた何ていふ賢明なお方だつたでせう！　土耳古を御征伐なすつたのもあの方ぢやありません。相撲もやはりお好きで、トゥラやハリコフや、タムボフや、諸々方々から力持がやつて來たものです。伯爵様が誰かをお投げになると、投げられた方に御褒美を下さる。若しも伯爵様を投げる者があると、引出物をうんとこさとおやりになつて、唇へ接

吻しておやりになる……。これは私がモスクワに逗留中のことですが、こんなことがあつた。伯爵様はこれまでに露西亞にまだ例しがなかつたやうな獵競べをお催しになりました。實に全國の狩獵家が悉くお客に招待されて、期日を定めて、三箇月の猶豫を置かれた。やがて、集まつて來ました。犬を連れ、獵手を連れて、全く軍隊が來たやうな騷ぎでした。たしかに軍隊です！　集まる者は先づ型の如く酒宴をして、さてそれから、見付のそとへ繰り出しました。集まる者は雲のごとしです……、ところで、どうでせう？　……あなたのお祖父さまの犬が一番がけをしたぢやありませんか。」

「美公ぢやありませんでしたか？」と私は訊ねた。

「さうさう、美公です、美公です……。そこで伯爵様はお祖父さまに御所望なすつたものです。『君の犬を賣つてくれないかな。そのかはり何でも好きなものを取らさう。』『いや、いや、伯爵様、折角ですが私は商賣人ではありませんから、不用の襤褸一つだつて賣る譯には參りません。あなた様のおためとあらば女房を差し上げてもいいくらゐの心算がございますが、美公だけは……、そのくらゐならいつそのこと私が捕はれの身になりませう。』するとアレクセイ・グリゴローキッチ様はそれをまたお賞めになつて、『だからお前が好きなんだ。』と仰しやる。お祖父さまはその犬を馬車に乘せてお歸りになりましたが、美公が死んだときは、樂隊に吹奏させて、お庭園に埋葬なすつた。――たかが、牝犬一匹ぢやありませんか。そのうへに犬の墓へもつて來て、銘を誌した石碑を建てておやりになりました。」

「それごらんなさい。アレクセイ・グリゴローキッチは、誰をひどい目に遭はせたこともないぢやありませんか。」と私は口を出した。

「まあ、いつもさうしたもので、やつと浮かべる位の手合ひに限つて、えて、人をいぢめたりするものです。」

「一體、あのバウーシュといふ男はどんな男だつたのかな？」としばらく默つてゐた後で訊いて見た。

「美公の噂をお聞きになつてゐるのに、バウーシュのことをどうして御存じないのでせう？……あれはお祖父さまの獵師頭で、獵犬番もしてゐました。お祖父さまは美公同樣にお氣に入りでしたよ。命知らずの奴で、お祖父さまがどんなことをいひつけなすつても、忽ちのうちにやつてのける、――たとひ火の中であれ水の中であれ。あいつが獵犬をけしかけると、獵犬の吠え聲が山中に鳴りひびくのでした。が、ふとすると强情を張り始めて、馬を下りて、ごろりと寢てしまふ……。さうして犬に奴の聲が聞こえなくなるや否や――もう萬事休矣です！　歴然たる獸の足跡があつても見向きもしないし、どんな餌で釣らうとしても獲物を追つかけなくなる。さあ、

さうなるとお祖父さまの御立腹つたらありません！　『畜生、縊り殺しても足らん！　引ん剝いてやるぞ、あの極道奴！　踵を咽喉へ押し込んでやるぞ。おのれ、奴畜生！』でも、とどのつまりは、何が氣に入らないのか、どうして犬に掛け聲をかけないのか、家來をお遣はしになつて、お訊ねになる。大抵こんな場合にはバウーシュの奴、お酒をおねだりして飲んでしまつて、のこのこ起き上つて、又もとのやうに、ほいほいと威勢よくやり出すのでした。」

「ルカ・ペトローキッチ、あなたも獵はお好きなやうですね？」

「まあ、好きは好きですけれど……たしかに……、もう今はやりません。何分、今はもうそんな年齡でもありませんし……しかし、若い時分には……、といつても、お察しの通り、私どもの身分ではうまく行きませんがね。貴族衆の眞似をするなんてことは、私どもの分際では及びもつかないことでしてね。全く、手前どもの仲間には飲んだくれの、やくざ者のくせに、大地主連中のお仲間入りをして居る奴もありましたが……、これはまた何たる物好きでせう！　……ただ面汚しになるだけのことです。見すぼらしい、やくざ馬に乘せられて、しよつちゆう、帽子を叩きおとされ、馬を擲るやうな振りをして、小つぴどく鞭の先を食はされて、しかもなほ當人はのべつに笑つてゐなければならず、おまけに他人樣のお笑ひ草になるんですからね。いや、全くのところ、身分が低ければ低いほど、自分をしつかりと抑へつけることですね。でないと、すぐに身

の恥になりますからね。」

「さやう、」とオフシャニコフは溜息つくづく言葉をつづけた、「私が生まれてからといふもの、ずゐぶん世の中の樣子が變つてしまつて、すつかり別の時世になりましたよ。わけても貴族衆の變りやうといつたら大へんなものです。あまり領地を持つてゐないお方は、お役人になつたりなどして、じつと自分の土地に落ちついてゐる者は少いのですが、もう少しでも餘計に持つてる方になると、まるで昔の面影はありません。あの、地境を決める時に、この連中、つまり大地主連中をつくづく眺めて見てゐましたが、正直のところ、その變りやうを見て、惡い氣持もしなかつたものです。御愛想がよくつて、丁寧な方々でしてね。ただ一つ驚いたことは、學問といふ學問を修めなすつて、惚々するほどよく筋道の通つたお話をなさるのですが、實際問題といふものは一向にお解りになつてゐない。御自分の利益になることさへもお氣づきにならない。現在自分が百姓から取り立ててやつた番頭風情に、さんざ勝手なことをされて、いいおもちやになつてゐる。まあ、御存じでもありませうが、アレクサンドラ・ウラヂーミロヰッチ・カラリョフですが、あの方なんかは申し分のない貴族ぢやございませんか？　男ぶりはよし、金は持つてゐるし、『大學校』で勉強はして來てゐるし、外國へもおいでになつたやうだし、お話しをなされば流暢で、私どもとも等し並に握手をして下さる。御存じでせうね？　……まあ、そこで一つ聞いていただき

ますが、先週のことでしたよ。世話役のニキーホル・イリイッチに招ばれて、ベレゾフカに集まりました。すると世話役のニキーホル・イリイッチがかういふんです、『皆さん、これから地境を決めてしまはねばなりません。當區だけがよそのどこよりも後れてゐるのは恥辱でありますから、さつそく著手いたしたいと存じます。』そこで著手して見ると、案の定、いつもの通りで、意見が出る、口論がはじまる。私どもの代理人なんかは大威張りを始めるといふ始末です。ところが眞つ先に亂暴を始めたのはポルフィーリイ・オブチンニコフでした、……何だつてあんな亂暴をしたのか？　と申しますと、あれは一寸の地面も持たないので、兄弟の代理をやつてるのです。それで喚き立てる、『駄目だぞ！　お前らなんかに乘せられはしないぞ！　その手は食はぬ！　圖面をここへ出して見ろ！　測量師をここへ、あのぺてん師をここへ出してくれ！』『では、結局、あんたの要求はどういふもんなんだ？』『何だと、人を馬鹿にしやがる！　見損つちや困るよ！いまおいそれと俺が自分の要求はかうかうだといつて説明でもすると思ふのか？　……駄目だよ、とにかく圖面をここへ出してくれ、――それが所望なんだ！』かういつて、圖面のうへを拳固でたたくのです。マルファ・ドミートリエヴナなんかは、さんざんに恥をかかされましてね。女は『どうして私の評判を貶すやうなことをするのです？』と喚き立てる。すると、『おらあ、おめえさんの評判なんぞ、俺の栗毛馬にだつてさせたかないよ。』つていふんです。仕方がないから、

やつとのことでマデラ葡萄酒でごまかすんです。奴が治まつたかと思ふと、ほかの奴らがあばれ出す。アレクサンドル・ウラヂーミロキッチ・カラリョフ先生は隅つこの方に坐つて、ステッキの握りを嚙みながら、しきりに頭を振つてござる。私は恥かしくなつて居たたまれない。一體、この方は私どもをどう考へてゐるのだらう？　と、さう思ひましてね。ところが、どうでせう！アレクサンドル・ウラヂーミロキッチは立ち上つて、何かいふことがあるといふやうな風をしてゐる。世話役が躍起になつて、『皆さん、皆さん、アレクサンドル・ウラヂーミロキッチのお話が始まるのです。』といふと、さすがに貴族衆は見上げたもので、直ぐにひつそりと鎭まりかへる。そこで、アレクサンドル・ウラヂーミロキッチの話が始まる、われわれは何のために寄り合つたのかを忘れてゐるやうに見受けられる。なるほど、地境を決めることは、地主連中のためになることは言ふまでもない。けれども實際、何のためにこんなことをやることになつたかといふと、――それは百姓の負擔を輕くし、働きよくしてやらう、納めもよく出來るやうにしてやらうといふのだ。目下のところでは、農民は自分の土地さへ知らず、時によると五露里も先へ野良仕事に出かけるといふ有樣である。こんなことでは百姓から嚴重に取り立てる譯には行かんではないか、さう仰しやる。それからまたアレクサンドル・ウラヂーミロキッチは、百姓の繁榮に心を配らないのは抑〻地主の恥辱である。結局、正當に判斷すれば、農民の利益と、われわれ地主の利益と

は一致するものであつて、農民がよければ、われわれもよく、向ふが困れば、こちらも困る……、従つて、つまらんことを楯にとつて、みんながうまく折り合はないのは恥辱であり、無謀といふものだ、と仰しやつた。……それからまだまだお話があつたのですが、……いや、そのお話しぶりの達者なことといつたら！　もう心の底へ沁み込んで……貴族連中も、誰しも頭を下げてしまつた。かくいふ私なんぞも實に涙をこぼさんばかりです。正直のところ、昔の本にだつて、あんな立派な文句は滅多にあるもんぢやありません……、ところで、どんなことで鳧がついたとお思ひになります？　あの方御自身からして、四町歩餘りの苔の生えた沼を讓らうとしないし、賣るのも氣が進まんといふのです。その言ひ草に、『私は家の者を使つてあの沼地を涸かし、そこへ完備した羅紗工場を建てよう。もう地所もちやんと選んであるし、それについてはいろいろ斟酌もしてゐる』といふんです……、それも筋道の通つたことならば、まことに結構な話ですが、事實は馬鹿げた話で、アレクサンドル・ウラヂーミロキッチの隣り村の地主で、アントン・カラシコフといふのが、カラリョフ家の執事を買收するのに、百ルーブリの紙幣一枚を出し澁つたので、事が運ばなかつたといふ、それだけのことから來てゐるのです。まあ、かういつた工合で、私どもは何一つまとまりもつけずに散會しました。ところが、アレクサンドル・ウラヂーミロキッチは今でも自分の言ひ分に間違ひはないと思つて、相も變らず羅紗工場の話をされますが、沼を涸

かす方にはまだ手を著けてゐません。」

「ところで、その人はどんな工合に領分内の經營をしてゐますか？」

「全部、新式を採り入れてゐます。百姓どもはよくは申しませんが、――なあに、あんな連中のいふことを聽くがものはありません。アレクサンドル・ウラヂーミロキッチのやり方は立派ですよ。」

「何ですつて、ルカ・ペトローキッチ？　あなたは古い習慣に據つてらつしやるとばかり思つてゐましたが？」

「私はわけが違ひます。何しろ私は貴族でもなければ、地主でもない。經營もへちまもあつたもんぢやありません……。それに、今よりほかのやり方が出來ないのですし。まあ、道にかなつたこと、掟にかなつたことを心掛けて居りますが、それだけのことでも、出來れば結構といふわけです！　若い地主たちは昔のしきたりを好きませんが、それも私は結構だと思つてゐます……、大いに覺醒すべき時ですからね。ただ困つたことには、青年諸君が、やけに屁理窟をこねることです。まるで人形みたいに百姓を取り扱つて、こちらへ向けたり、あちらへ向けたり、毀して見たり、投げつけたりするのが落ちでしてね。百姓あがりの執事か、さもなくば獨逸生れの支配人が、元々どほり農民に對して辣腕を振ふことになるのです。まあ、この節の若い人たちで『さあ、

領地の經營はかういふ風にするものだ！』とお手本を出して、敎へてくれるやうな人が、ただの一人でもありませうか？　……こんなことで、結局、どうなるんでせう？　私もかうして、新しい世の中といふものを見ないで、このまま死んでしまふのでせうか？　……それ、何とかいひましたね？　古きは死したれども、新しき生まれず！　とか。」

私はオフシャニコフに何と答へたらいいのか分からなかつた。彼はあたりを見まはして、私の方へ身を近づけて、ひそひそ聲で話をつづけた。

「ときに、あなたはワシーリイ・ニコラーキッチ・リュボズヲーノフの話をお聞きになりましたか？」

「いや、聞きません。」

「何ていふ奇妙なことなんだか、よく合點のゆくやうに説明していただきたいものです。まるきり私には呑み込めませんのでしてね。あの人んとこの百姓どもが話してくれはしますけれど、その話がまた、とんと要領を得ないのです。あの人は御承知のやうに若い人でしてね。つい近ごろ亡くなられたお母さんの遺産相續をなすつたばかりです。それで領地へやつて來たので、百姓どもは新しい御主人を拜まうと思つてぞろぞろ集まつて來る。すると、やがてワシーリイ・ニコラーキッチがお出ましになる。百姓どもが氣をつけて見ると、實に可笑しいぢやありませんか！

――旦那樣とゃあらうお方が馭者みたいに、絹綿天鵞絨のズボンを穿いて、緣飾りのある長靴を穿いて、赤い襯衣と、それにこれもやはり馭者の着る上衣を著てらつしやる。髯は伸び放題だし、頭には妙ちきりんな帽子をかぶつてゐるが、その顏がまた妙ちきりんで、醉つてゐるかと思ふと、さうでもない。けれど、あんまり正氣でもなささうです。『やあ、皆の衆、今日は！　御機嫌よう！』といふので、百姓たちは平身低頭したのですが、一言も口をきく者がない。怖氣がつき始めたのですね。旦那の方もびくびくしてゐる樣子。さて一同の者に話をしかける、『私は露西亞人である。またお前たちも露西亞人である。私は露西亞のものは何でも好きだ……。私は露西亞魂を持つてゐるし、身體を流れる血もまた露西亞のものだ……』かういつたかと思ふと、いきなり號令がかかる、『さあ、みんな、露西亞の民謠を一つ歌つてくれ！』百姓どもは膝つ瘤がぶるぶる慄へる。すつかり呆氣にとられてしまふ。それでも一人、向ふ見ずな奴がゐて歌ひ出しましたが、すぐに地べたに、へたばり込んで、人かげにかくれてしまつた……。ところで、驚くべきことといふのは、かういふことなんです。一體、この界隈には、成らず者で、札つきの道樂者といつたやうな地主がゐなかつたわけではない。馭者みたいな服裝をして、露西亞の踊りを自分で踊つたり、ギターを彈いたり、歌をうたつたり、下男なんかと酒をさんざん飲んだり、百姓どもに振舞つたりするやうな手合ひがゐたものです。ところが、このワシーリイ・ニコラーキッチと來たら、

まるで箱入娘みたいにおとなしくて、いつも本を讀むとか、字を書くとかするばかり、さもなくも大きな聲で讃美歌をうたふといふ風で、誰とも一さい話をせず、人目を忍んで、たつた一人で庭園(には)を散歩などなすつてゐる。何だか退屈さうだつたり、悲しさうだつたり。前々からゐる執事なんかも、最初のうちは、すつかり怖がつてゐたもので、ワシーリイ・ニコラーキッチが村へお着きになる前には、百姓たちの家を一軒一軒駈けずりまはつて、みんなにぺこぺこお辭儀をしました。『脛に傷もつ』といふのはこれですね！　百姓たちは新しい旦那に望みをかけて、かう思つてゐたのです、『この野郎、その手に乘るものか！　今度こそは貴樣の年貢の納め時だぞ。今に貴樣はぎうぎういふ目に遭はされるんだぞ。このいんちき野郎！』……ところが、あてが外づれてしまひました、どういつたらいいでせうね？　神樣だつて、こんなことにならうとは、御存じないでせう！　ワシーリイ・ニコラーキッチは執事を居間へお呼びよせになつて、かう仰しやるんです。顏を赧らめて息をはずませながら、『俺んところでは公平に賴むぞ、誰ひとり、いぢめないでくれよ、いいかい？』その日からといふもの、執事をお呼び出しなど、一向になさらない！御自分の領地に暮らしていらつしやるのに、まるで他人のところにいらつしやるやうです。そこで執事の方でもほつと息を休めてゐる。百姓どもはといふと、ワシーリイ・ニコラーキッチのところへなんか、寄りつきさうにもしない。怖ろしくつて。それからまた、どうでせう、實に奇妙

なことがあつたもので、旦那さまが百姓どもへお辭儀もすれば、愛想のよい應對もなさるのです、……ところが、百姓どもは怖ろしさに、生きた空もないのです。まあ、何ていふ不思議な話でせうか、御意見をお聞かせ下さいませんか……。年をとつて馬鹿になつたせゐでせうか、……私にはさつぱり譯がわかりません。」

私はオフシャニコフに、恐らくリュボズヲーノフ氏は病氣なのだらう、と返事した。

「病氣ですつて！　どういたしまして。あんなに肥つてゐて、顏なんかもあんなで、とんでもない。若いくせに、髯をあんなに生やして、……尤も、そんなことはどうでもよろしい！」(オフシャニコフは深い溜息をついた。)

「ぢや、貴族連中の話はこれくらゐにして、」と私がいひ出した、「何か鄕士について御意見がおありでせうね、それを聞かして下さいませんか、ルカ・ペトローキッチ？」

「いや、その話はもう御免をかうむります。」と彼は急き込んでいつた、「實は、……話して話せないことはありませんが、……何も別に！　(オフシャニコフは手を振つた。)それよりかお茶でも飲みませう、……百姓はやつぱり百姓でしてね。さうかといつて、正直のところを申し上げれば、私どもどうしたらいいのか迷つてゐます。」

彼は口を噤んでしまつた。お茶が出る。タチヤーナ・イリイニチナは今までの席を立つて、私

たちに一そう近いところに腰をおろす。この晩、何度となしに、彼女は音のせぬやうに部屋を出て行つては、また靜かに席にかへつて來た。部屋の中には靜寂がみなぎつてゐた。オフシャニコフは重々しげに、ゆつくりと、幾杯となしお茶を飲んだ。

「今日はミーチャが參りましたよ。」とタチヤーナ・イリイニチナが低い聲でいつた。

オフシャニコフは苦い顔をした。

「何用あつて？」

「お詫びに參りましたので。」

オフシャニコフは頭を振つた。

「ねえ、あなた、一つ考へてみて下さい、」私の方を向いて言葉をつづける、「親戚といふやつは、どうすればいいんでせうね？　まるきり放つとくわけにも行きませんし……。現に私にも何の因果かして、甥つ子が一人ありましてね。たしかに頭のいい、活潑な青年で、學問もよくやりましたし、申し分がないのですが、それでゐて、將來、大を成す見込みがありません。暫くお上の役人になつたこともあるんですが、止してしまひました。何しろ出世の道がありませんのでしてね……。もともと貴族とは違ひますからね。貴族だつて、すぐに閣下にはなれないのですから。そこで今は職がなくて、ぶらぶらしてゐるのです……、それだけならば別に文句はありませんが、

三百代言の仲間入りなんかしましてはね！　百姓どもに願書を作つてやつたり、報告書を書いてやつたり、百姓頭に入れ智慧をしたり、測量師の罪過を明るみへ出したり、飲み屋に出入りしたり、町の素町人や下男と旅籠屋で懇ろになつたりしてゐる。こんな工合ですから、身の破滅が來るのも遠いことではありますまい。警部や署長さんからきつくお目玉を頂戴したことも、一度や二度のことではありません。ところが、仕合せと、おどけることがうまいので、警察の人をさんざ笑はした擧句、あとではみんなを手古摺らしてしまふのです……、それはさうと、あいつは今お前の部屋にゐるんぢやないのかい？」と細君の方を向いて附け足した、「ちやんと分かつてるよ。お前は情に脆いから、何かにつけてあいつの肩ばかり持つてる。」

タチヤーナ・イリイニチナはうつ向いて、微笑みをうかべながら顔を赧らめた。

「まあ、仕方がないや、」とオフシャニコフは言葉をつづける……、「ああ、お前は甘くて困る奴だなあ！　さあ、ここへ來いつていひな……、仕樣がないな、大切なお客樣の手前、馬鹿者もまあ、許してやるさ……、さあ、さういつて來な、さういつて來なよ……。」

タチヤーナ・イリイニチナは扉のところへ行つて、「ミーチャ！」と呼んだ。

ミーチャは二十八九の、背の高い、からだつきのいい、捲毛の青年で、部屋へ入つて來て私を見るなり、ぴたりと閾ぎはに立ちどまつた。着てゐる服は獨逸型であつたが、肩の襞が不自然に

大きいところを見ただけで、仕立屋が露西亜人のうちでも、生えぬきの露西亞人だといふことが、はつきり分かるのであつた。

「さあ、こつちへ寄らんか、おい、」と老人は口を切つた、「何を恥かしがつてるんだ？　お前は伯母さんにお禮をいはなくちやならんぞ、許して貰つたんだからな……、時に、あなた、ちよつとお引合せいたしますが、」ミーチャを指さしながら、言葉をついで、「これは親身の甥なんですが、どうにも手に負へない奴でしてね。全く世も末ですよ！（私たちは互ひに會釋し合つた。）おい、今度は一體、何をごてついて來たんだい！　話してみい。何だつて、みんながお前の苦情をいつてくるのか、話してみろよ。」

ミーチャは私のゐるところで、事のいきさつを述べたり、言ひわけしたりするのをいかにも好まないらしかつた。

「また、後ほどね、伯父さん。」と彼は口ごもつた。

「いや、後ほどぢやなく、今やれよ。」と老人はつづける……、「ちやんと俺には分かつてるがな、お前はその何だな、この旦那の手前が恥かしいんだな。そんなら尙更いいや、――いい見せしめだ。おい、おい、話してみい、……聽いてやるからな。」

「何も恥かしいことはありません、」とミーチャは威勢よく話し出して、首を振つた、「まあ、

伯父さん、考へても見て下さい。私んところへレシェーチロヲの鄕士連中がやつて來て、『どうか應援してくれ』といふんです。『どうしたんだ？』と訊くと、『實はかうなんで。私どもの村の穀倉はちやんと規則どほりになつてゐて、あれ以上には出來ない。ところが、だしぬけにお上の役人がやつて來て、命によつて倉を檢査しに來たといふのです。檢査をしてから、「貴樣たちの倉はてんで規則どほりに成つて居らん。容易ならん手ぬかりが多々あるによつて、これを上司に報告せねばならん。」と、かういふんです。そこで、「では一體、どこが手ぬかりで？」と訊くと、「もうそれは貴樣たちの知つたことではない。」といふ御挨拶……。私どもは寄り合ひをいたしまして、これはどうしても、いつもの傳で、役人に袖の下をつかませようといふことになつた。ところが、プローホルィチの爺がそれを差しとめて、「それはただ、役人に味をしめさせるだけのもんだ。本當に、何ちふことだよ？　一體、われわれに、裁判を受ける權利がねえつていふのかよ？」さういふのです……。それでみんなは爺の言ひなりになつたんですが、役人の方では、ひどく腹を立てて、報告書を書いてお上に訴へ出たのです。そこで、こちらではいま、答辯をしなくてはならんことになつた。』さういふものですから、『本當にお前さんたちの倉は規則どほりになつてるんだね？』と訊きましたら、『規則どほりになつてることは神樣も御承知で、お上で定められただけの物は間違ひなく藏まつてゐる……』といふので、『よし、そんならば何もびくびくす

るがものはない。』といつて、私は歎願書をこさへてやりました……。まだ、どつちが勝訴になるか、それは分かりません……、この問題のどこが悪くつて、伯父さんとこへ私の苦情をいつて來たんでせう、――尤も無理はありませんね。誰しも先づ自分が何より大切だつていひますからね。」

「誰でも。なるほど。しかし、お前だけはさうでもなささうだよ。」と老人は低い聲でいつた……、「ところで、シュトローモヲの百姓たちとは、どんな計略をめぐらしてるんだい？」

「どうして御存じなんですか？」

「なあに、ちやんと知つてるさ。」

「それも私の方に理窟があるんです、――もう一度これも考へて見て下さい。シュトローモヲの百姓どもの地面を隣り村のベスパンヂンが四丁歩ばかり鋤を入れたんです。『これは俺の地所だ』といひましてね。シュトローモヲの連中は年貢で借りてゐたんですが、肝腎の地主が外國へ旅に出てしまつた。すると誰が百姓の味方なんぞするでせう、さうぢやありませんか？　地所は勿論、昔からのお極まりで、その連中が作つてゐるものです。そこで百姓どもが私んところへやつて來て、『嘆願書を書いてくれ』つていふんですね。だから、書いてやりましたよ。すると、ベスパンヂンがそれを聞き込んで、おどし文句を並べ立てる、『あのミーチャの野郎の胴腹をぶん抜

いてやる。さもなくば、首根つこを叩き落してやる。』……どんな工合に叩き落してくれるのか、見たいものです、今のところまだ、ちやんとしてますがね。」

「ふん、あんまり大かいことをいふなよ。お前の首も碌なことにはならんぞ。」と老人がいふ、「ほんとにお前は氣違ひみたいな奴だからなあ！」

「何ですつて、伯父さん？　あなたが御自分でさう仰しやつたぢやありませんか……」

「分かつてる、分かつてる、お前のいふことぐらゐ、」とオフシャニコフが甥をさへぎる、「勿論、人間といふものは眞正直に暮らして、傍の者を助けてやらなくちやならん。時と場合によつては、骨身を惜しんではならん……、けれども、お前はいつもそんな風にやつてるかい？　お前はしよつちゆう居酒屋へ引つぱり込まれないかい、え？　酒をふるまつて貰つて、拜み倒しにされてないかい？　ドミートリイ・アレクセーキッチ、どうかお助け下さい。お禮の儀は前もつていたします――だなんて、一ルーブリ銀貨か、五ルーブル紙幣をつかまされてゐるんぢやないかい？　え、さういふことはないかな？　どうだ、ないかい？」

「それは、たしかに私が悪いんです。」ミーチャがうつむいて答へる、「しかし、貧乏人から金を取つたりなんかしませんし　曲がつたことなんか、これつぱかしもしませんよ。」

「今はまあ、取らないにしろ、自分が工合が悪くなつて來れば、ぼちぼち取るだらうさ。曲が

つたことはしないつて？　……何をぬかしやがるんだ、貴様！　まるで、聖人みたいな連中の辯護ばつかりしてるやうだが……、お前．あのボリカ・ペレホードフのことを忘れたのかい？　……誰があれの世話をしたんだ？　誰があいつを庇つてやつたんだ？　え？」

「ペレホードフは身から出た錆に苦しんだんです。むろん、その譯ですけれど……。」

「あいつは公金を費消した……、ふざけてけつかる！」

「けれど、伯父さん、察しておやんなさい、あれの貧乏暮らしや、家の者のことを……」

「貧乏暮らし、貧乏暮らしだつて……、飲んだくれの博奕うちぢやないか、――だから、あんなことになるんだ！」

「あれは憂さ晴らしから飲み出したんですよ。」とミーチャは聲を落していつた。

「憂さ晴らしだつて！　いかにもな、お前にそれほど親切氣があるんなら、あいつを本當に助けてやつてもよかつたらうに。何も、呑兵衞と一しよに居酒屋へ坐り込むには及ぶまいにな。あいつが巧いことをいふからつて……、それが一體、珍しいのか！」

「あれはこの上もなく氣立てのいい男なんで……。」

「お前から言や、誰でも氣立てがいいんでな……時に、」オフシャニコフは細君の方を振り向きながら言葉を續ける、「あいつに送つてやつたらうな……ほら、あの、あいつに、お前、分かつて

るだらう……。」

タチヤーナ・イリイニチナは頷いてみせた。

「この二三日、お前はどこに雲がくれしてたんだ？」再び老人が話し出した。

「町にゐました。」

「どうせ、ずつと玉突場で遊んだり、お茶を飲んだり、ギターを鳴らしたり、あちこちの役所を駈けずり廻つたり、裏部屋で嘆願書の文句を綴つたり、商人の悴どもと見榮の張り合ひをしたり、そんなことをしてたんだらう？　なあ、そんなことぢやないかい？　……どうだ！」

「大方、その邊でせうよ。」とミーチャは微笑みながらいふ……、「ああ、さうだ！　すんでのことに忘れるとこだつた。あのアントン・パルフェヌィチ・フンチコフが、あんたに日曜日に食事において願ひたいつて、さういつてましたよ。」

「あんな太鼓腹んところへなんぞ行くもんか。一束いくらの魚を出して、それにバタといへば腐つて臭ふやつを出すんだからな。勝手にしやがれだ！」

「それから、フェドーシャ・ミハイロヴナに會ひましたよ。」

「フェドーシャつて、どこの？」

「ガルペチェンコ、あのミクーリノ村を競り落した地主の妾ですよ。ミクーリノ出のフェドー

シャです。一時、モスクワの仕立屋に奉公してゐて、年貢は金で納めてゐましたが、それも凡帳面に、年に百八十二ルーブリ五十カペイカといふ相當な金を納めてゐました……、腕がしつかりしてゐるので、モスクワでもいいところからの註文を受けてました。ところが今になつてガルペチェンコは手紙をやつて、あの女を呼び戻して、こちらへずるずると引きとめてしまつて、別にこれといふ仕事もいひつけない。女は身代金を拂つて、自由の身になりたいつもりがあるので、且那にも話してみたんですが、こつちは一寸も、きつぱりしたことをいつてやらない。伯父さん、あんたはガルペチェンコとお知合ひなんですから、――何とか一言あなたから言つてやつて下さいませんか？　……フェドーシャの方でも、身代金はかなり出す筈ですよ。」

『それは、お前の金ぢやあるまいな？　え？　うむ、うむ、いいとも、言つてやらう、ほんとに。でも、分からないな、」と老人は浮かぬ顔をして言葉をついだ、「あのガルペチェンコといふ男は、かう言つちや悪いけども、とてもけちん坊だからな、手形を買ひ占めたり、高利で金を貸したり、競賣に出た領地をうまく手に入れたり、……誰があんな奴をこの土地へ連れて來たんだ？　ああ、もう、あんな渡り者は眞つ平だ！　話をしてみたところで、すぐに確かな返事も貰へまいし、……だが、まあ、當つて見ようよ。」

「骨折つて下さい、伯父さん。」

「よし、骨折つてみよう。ただ、お前も氣をつけろよ、俺んところへ來たら、氣をつけろよ！まあ、まあ、言ひ譯なんかするなよ、……お前のいいやうにするがいい、……ただ先々のことに氣をつけろよ、さもないと、ミーチャ、きつとひどい目に遭ふんだぞ、――本當に身の破滅になるんだぞ、……伯父さんだつていつまでもお前のことを背負ひ切れるもんぢやない、……それに俺だつて別に權力のある人間ぢやなし……。さあ、もういいから、歸れ、大事にな。」

ミーチャは出て行つた。タチヤーナ・イリイニチナがその後を追つて行く。

「まあ、あいつにお茶でも飲ましてやれよ。なあ、甘い小母ちやん。」とオフシャニコフはうしろから聲をかける。「……あれも馬鹿ではなし……」と彼は言葉をつづける、「氣のいい奴なんですけれど、どうも氣にかかりましてね……、いや、どうも濟みませんでした、こんな下らんことにお暇どりをさせまして。」

おもての控への間の扉が開いた。天鵞絨の上衣を着た背の低い、胡麻鹽頭の男が入つて來た。

「や、フランツ・イワーヌィチ！」とオフシャニコフが大きな聲で、「こんにちは、いかがです、御機嫌は？」

親愛なる讀者諸君、この紳士をも紹介させていただきたい。

フランツ・イワーヌィチ・レジョン(Lejeune)は私の隣りの者で、オリョール縣の地主であ

るが、一通りならぬ道筋を辿つて、光榮ある露西亞貴族の地位に上つた人である。彼はオルレアンの町に、佛蘭西人を兩親として生まれ、ナポレオンの露西亞侵略の際に鼓手として蹤いて來たのであつた。最初は萬事がすらすらとうまく行つて、この佛蘭西人は昂然としてモスクワに入つて來た。然るに退却の途中、哀れにもムッシウ・レジョンは半ば凍えて、太鼓を失ひ、スモレンスクの百姓の手に囚へられた。スモレンスクの百姓たちは、何もない羅紗工場にその晩一晩を閉ぢ込めて置いて、夜が明けると、土堤のほとりの氷孔のところに連れて行き、この la grrrande armée（偉大な軍隊）の鼓手にむかつて、俺たちの面目を立ててくれといひ出したが、それは氷の下へ潛り込んでくれといふのである。ムッシウ・レジョンはこの申し出を直ちに肯き入れることが出來なかつた。かへつて、佛蘭西の方言で、どうかオルレアンへ歸らせてくれと說得しはじめた。「あそこには、messieurs（みなさん）」と彼はいつた、「私の母、une tendre mère（優しい母）が暮らしてゐます。」けれども百姓たちはオルレアン市の地理的位置を知らなかつたからでもあらう。やはり、うねうねと廻り廻つてゐるグニロチョールカ河の水中旅行を强ひつづけて、つひには頸筋や脊骨を小突いて、せき立てるやうになつた。と、不意に、レジョンにとつて、何ともかともいへないほど嬉しいことには、鈴の音が聞こえて來て、見ると、土堤の上を大きな橇が走つて來る。ひどく高い背當（せなあて）に花毛氈をかけて、三頭の葦毛の駒に曳かせて來る。橇の中には、狼の毛皮の外套を

着た赤ら顏の肥つた地主が坐つてゐた。

「お前たちはそこで何をしてゐるのだ？」

と彼は百姓たちに訊ねた。

「佛蘭西の奴を沈めてるんで、旦那。」

「あ！」地主は冷然と答へて、わきを向いてしまつた。

「Monsieur！ Monsieur！（あなた！あなた！）」と哀れな男は叫び立てた。

「あ、あ！」狼の毛皮の外套は咎めるやうに言つた、「十二箇國もの軍勢を引きつれ、露西亞に攻めて來て、モスクワを燒き拂ひ、この外道奴が！ イワン大帝鐘樓の十字架を曳きずり下ろし、今になつて、ムッシウ、ムッシウもないもんだ！ 今になつて尻尾を振つたつて駄目だぞ！ 惡黨にそれくらゐの罰は當りまへだ、……さあ、行け、フィリカア！」

馬は動き出した。

「だが、待てよ！」と地主は附け足して……、「おい、君、ムッシウ、君は音樂が出來るかい？」

「Sauvez-moi, sauvez-moi, mon bon monsieur！（お助けなすつて、お助けなすつて あなた！）」とレジョンは繰り返した。

「ちえっ、なんていふくだらない國民だ！ 一人だつて露西亞語を知る奴がゐない！ ミュー

ジック、ミュージック、サヴェ ミュージック ヴー？ サヴェ？（音樂だ、音樂だ、君は音樂が出來るかい？ 出來る？）さあ言つてみい！ コンプレネ？（分かるかい？）ピアノをジュエ サヴェ？（できるかい？）」

レジョンはやつとのことで地主のいはうとしてゐる意味が悟れたので、頷いて見せた。

「Oui, monsieur, oui, oui, je suis musicien ; je joue tous les instruments possibles ! Oui, monsieur …… Sauvez moi, monsieur !（できますよ、旦那樣、できますよ、はい。私は音樂家なんです。樂器にかけては何でめやれますよ、はい。旦那樣、どうかお助けなすつて！）」

「いや、お前の星廻りがいいんだぞ！」と地主は答へた、「おい、皆の者、放してやれ、ここに酒手がある、それ二十カペイカ。」

「ありがたうございます、旦那樣、どうも。では、お渡し申します。」

レジョンは橇に乘せられた。彼はあまりの嬉しさに息をつまらせ、涙を流し、身をふるはせたり、お辭儀をしたりして、地主や馭者や百姓どもにお禮をいふのであつた。着てゐるものは、ただ薔薇色のリボンのついた綠いろのジャケツ一枚きりで、しかも寒さは膚をつんざくばかりであつた。地主は青味を帶びて、生きた色もなくなつてゐる手足を默つて見てゐたが、やがてこの不幸な男を毛皮の外套にくるんで、わが家へ連れ歸つた。召使どもが駈け出して來た。佛蘭西人は直ぐに溫めてもらつたうへに、食べる物、着る物をおしいただいた。地主は彼を自分の娘たちの

ところへ引つぱつて行つた。

「おい、みんな、」と彼はいつた、「お前たちの先生が見つかつたぞ。しよつちゆう、音樂を敎はりたいの、佛蘭西の國訛りを敎はりたいのと、おれに附きまとつてゐたものだが、ほれ、この通り、佛蘭西人の先生が見つかつたぞ。この人はピアノも彈くんだよ……、さ、ムッシウ、」とコロン香水を商つてゐる猶太人から五年まへに買ひ入れた小さな、見すぼらしいピアノを指さしながら、言葉をつづけた、「ひとつ、お手並を見せていただかう、ジュエ（彈きなさい）！」

レジョンは生きた心地もせず椅子に腰をかけた。生まれてこのかたピアノにさはつたこともないのである。

「さ、ジュエ、ジュエ（彈きなさい）！」と地主は繰り返した。

哀れな男は、まるで太鼓でも敲くやうに、やけに鍵盤を敲いて、出鱈目に彈き出した……。

「私はそのとき、覺悟してゐましたよ、」と後でよくいつたものである、「私をせつかく救つて下さつたあの方が、襟髮をつかんで、お邸から追ひ出してしまふだらうと。」ところが、ゆくりなくも卽席音樂家にされたレジョンが極度に愕いたことには、地主は暫くしてから意に適つたといふやうな風をして、輕く彼の肩を叩いて、「結構、結構、なかなか達者らしいな。では、あちらへ行つて、お休み。」といつた。

二週間ほどして、レジョンはこの地主の許を去つて、或る富裕な、教養のある人のところに身を寄せた。快活で、おとなしい性質であつたから、大へん可愛がられて、その人の世話になつてゐる女の人と結婚し、役に就いて貴族となり、オリョールの地主で退役の龍騎兵で、且つ詩人でもあるロヴィザニェフといふ人に娘をめあはせ、自分もオリョールの町に永住の目的をもつて居を移したのである。

つまり、このレジョン、といふよりは今ではフランツ・イワーヌィチで通る人が、かねて親しい間柄にあるオフシャニコフのところへ、私のゐた時に入つて來たのである……。

それにしても、恐らく讀者諸君は私のおつき合ひをして、鄉士オフシャニコフのところで長居することには既にお倦きになられたことであらう。それゆゑ私は雄辯に口を噤むこととしよう。

リゴフ

「リゴフへ參りやんせう。」と、或る日のこと、讀者諸君がすでに知つて居られるエルモライが私にいふのであつた、「あすこなら思ふ存分鴨が撃てますから。」

くろうとの遊獵家にとつて、野鴨ごときは、別にこれといふほどの魅力があるものではないが、時節柄、ほかの獵物に事を缺いてゐたので（丁度、九月の初めのことで、山鷸はまだ渡つて來ないし、鷸鴣を追つて野原を駈けまはるのにも、いいかげん倦いてゐたから）、私はうちの獵師のいふことを聽いて、リゴフへ出かけた、

リゴフは曠野地方にある大きな村で、そこには圓屋根の一つしかない、極めて古い石造の教會堂と、ロソタといふ泥つぽい小川にのぞんだ水車場が二軒あつた。この小川は、リゴフから五露里ばかり先へ行くと、廣々とした沼になつてゐて、その周りばかりではなく、池心のあたりまで、オリョールで俗に『葭』といつてゐる葦が一ぱいに生ひ茂つてゐた。この池の入江や、葦の間の風のあたらないところには、眞鴨、蒼頸、尾長鴨、島阿治、小鴨など、あらゆる種類の鴨が數か

ぎりも知れぬまでに、たくさん棲んでゐた。わづかな群れは絶え間なく飛び渡つたり、水のうへに浮かんだりしてゐるが、一たび鐵砲を撃たうものなら、雲霞のやうな群れが飛び立つて、獵師の方でも思はず帽子を片手に執つて、『うわあ』と長い嘆聲を洩らすくらゐ。私はエルモライと二人で池のほとりを歩き出したのであるが、第一、鴨といふ奴は用心ぶかい鳥で、岸のぢきそばには來てゐないし、第二には、仲間にはぐれた、氣の利かない小鴨などが、彈丸の屆くところへ出て撃たれたとしても、私たちの犬には一面の葦の茂みのなかからくはへ出してくることが出來ず、どんなに無我夢中になつたところで、泳ぐことも渉ることも出來ず、ただ徒らに大事な鼻を鋭い葦の葉末で切るくらゐがおちであつた。

「いや、こんなぢや駄目だ。」つひにエルモライもかういひ出した、「小舟を持つて來なくつちやいけませんや……、まあ、リゴフへ一先づ引つ返しませう。」

私たちは引き返した。まだ幾足も歩き出さないうちに、實に見すぼらしいセッター種の犬がこんもりした水楊のかげから私たちの前へ駈け出して來たが、そのうしろから中背の男があらはれた。見ると、青い、ひどくすり切れた上衣に、黄色味がかつたチョッキを着て、グリ・デ・レン色だか、ブルー・ド・アムール色だかのズボンを穿いて、穴だらけの長靴にぞんざいに足を突つ込み、赤いハンカチを頸に巻きつけ、肩に單身銃をかついでゐる。こちらの犬どもが、持ち前の

支那流の禮儀によつて、新しい仲間を嗅いでゐる。嗅がれる方は怖氣づいたと見えて、尾を捲き込み、耳を立てて、膝もまげずに齒をむき出して、くるくると廻つてゐる。その間に見知らぬ男は私たちの方へ近づいて、大へん丁寧にお辭儀をした。年の頃は見たところ二十五ぐらゐで、長い、亜麻色の髪はクワスがきつく侵みこんで、鰭のやうに突つ立ち、小さな鳶色の眼は人なつこげにまばたいてゐた、――齒痛のせゐでもあるかのやうに黑い布を頤に巻きつけた顔いつぱいに、愉しさうな微笑を浮かべてゐた。

「失禮ですけれど、自己紹介をさしていただきます、」と彼は物柔かな取り入るやうな聲で口を切つた、「私はこの土地の獵師で、ウラヂーミルと申します……、こちらへお見えになられまして、この池の岸邊へお出向きなされたと伺ひましたので、若しおよろしうござりましたら、何かお役に立たせていただきたいと存じまして。」

獵師ウラヂーミルは主役の二枚目をやる年若い田舍役者そつくりの言葉づかひをした。私は彼の申し出を肯きいれて、リゴフへ着くまでに、すつかり彼の身の上話を聞いてしまつた。彼は自由の身にして貰つた邸づきの農奴で、物思はしい年頃に音樂を學んで、やがて侍僕に使はれ、讀み書きが出來て、私の見たところでは、多少は物の本も讀んでゐるらしかつた。今は露西亜人の多くの者のやうに、一文の貯へもなく、一定の職業もなしに暮らして、殆んど天來の甘露といつ

てもよいやうな、きはめてあてにならないものによつて身過ぎをしてゐたのである。ウラヂーミルはひどく高尙な物の言ひ方をして、たしかに話ぶりの上手なのを誇つてゐるらしかつた。必ずやまた、おそろしい女たらしであつたらうし、多分は女をうまくひつかけることも出來たであらう。何しろ露西亞の娘どもは、口說き上手が好きだからである。ウラヂーミルはいろんな話をするうちに、時をりは、近所の地主たちを訪ねることや、町へお客に行つたり、骨牌（プレフェランス）の相手になつたり、都の人たちとも近づきになつてゐることなどを、それとなく匂はすのであつた。上手に、かなりいろんな笑ひ方をして見せたが、わけても彼に似合ふのは、他人の話に耳を傾けてゐるときに唇に浮かべる、しとやかな含み笑ひであつた。他人の話を聽いて、一から十まで相槌を打ちながら、やはりどこまでも自分の威嚴といふものを忘れず、折さへあれば、自分の意見を言ひ表はすことも出來るといふことを相手に仄かさうとしてゐるらしかつた。ところが、エルモライと來ては、あまり教育のある人間でもなし、それほどデリケートな男でもなかつたので、もう馴れ馴れしく『おめえ』呼ばはりをしてゐるのであつた。ウラヂーミルが『あなた』『あなた』といふ時の微笑み方はまた見ものであつた……

「なぜ君は頤んとこを卷いてるんです？」と私は訊いてみた、「齒でも痛むんですか？」

「いいえ、ちがひます。旦那。」と彼は打ち消した、「油斷をしたために酷い目に會つたんでご

ざいます。私の友達に、人のいい奴がありまして、これがまたよくある事ではございますが、獵にかけては全くの素人なんです。それが或る日のこと、『ねえ、君、鳥打ちに連れてつてくれないか。どんなに面白いものか、一つやつてみたいんだ。』つていふのです。私は申すまでもなく、親友のいふことをみすみす斷わるつもりがなかつたものですから、鐵砲を持たして、獵に連れ出しました。さて、相當に擊ちまして、先づ一休みしようといふことになりましたのです。私は木かげに腰をおろしましたが、向ふは銃の操法なんかを練習し出して、おまけに私を狙ふぢやありませんか。私は止せ止せと賴んだのでございますけれど、相手は素人だもんですから、こつちの言ふことをとんと肯きません。そのうちに、ドンと來まして、私は下顎と、右の手の人さし指をとられたんでございます……。」

私たちはリゴフへ着いた。ウラヂーミルもエルモライも、二人とも、小舟なしには獵が出來ないと決めこんでゐた。

「スチョーク（※）んとこに平田舟（ひらた）がありますが。」とウラヂーミルがいつた、「あいつ、どこへしまつちやつたか分かりません。早速、奴んとこへ行つてみなくちやなりません。」

「誰のことだね、それは？」と私は訊ねた。

「ここに住んでる男でして、スチョークつて綽名でございます。」

ウラヂーミルはエルモライを連れて、スチョークのところへ行く。私は教會堂のところで待ち合はせようといつた。墓地へ行つて、墓碑を見廻してゐるうちに、私は次のやうな銘のある、黒ずんだ、四角い碑に突きあたつた。一方の側には佛蘭西語で、『Ci-gît Théophile Henri, vicomte de Blangy（ブランジイの子爵テオフィール・アンリイの墓）』と誌され、別の側には『この石のもとに佛蘭西の臣民ブランジイ伯爵の遺骸を葬る。一七三七年生、一七九九年歿、行年六十二歳』とあり、も一方の側には、『君が骸に安らひあれ』とあり、第四の面には次のやうな挽歌が誌されてゐた。

この石のもと、移り來し佛蘭西の人ぞ　横たはる、
この人や氏高く、才能高かりし、
妻家族　殺されし歎きにたへず、
亂賊の蹂むにまかする祖國を棄てて、
辿り來し　露西亞の岸邊、
年老いて、人の情けの蔭を見いだし、
子等を敎へぬ、父母の胸を安めつ……
かくていま　神のまにまに安らけく眠る

エルモライ、ウラヂーミル、それにあの妙な綽名のスチョークが近づいて來たので、私の冥想は中斷された。

跣足で、ぼろぼろの着物を着て、髪を蓬々にしたスチョークは、年のころ六十くらゐで、見たところ、暇をとつた下僕といつた風であつた。

「お前さんところに舟はあるかね？」と私は訊ねる。

「舟はございますが、」と、ぼんやりと、もつれた聲で答へる、「まことにはあ、ひどい奴でして。」

「どうしたんだ？」

「つなぎ目が剝がれちめえまして、それに鎹が拔けちめえまして。」

「何も大したことはねえ！」エルモライが口を挿んだ、「麻屑を詰めりやいい。」

「むろん、さうすりや。」スチョークが相槌をうつ。

「一體、お前は何をしてる？」

「お邸の漁師でさ。」

「どうしたもんだ、漁師のくせに、舟をそんなに粗末にしとくなんて？」

「ここらの川にや魚もゐましねえんで。」

「魚あ、沼の浮渣は好かねえからな。」と私の連れの獵師は勿體ぶつて註を入れる。

「ぢや、麻屑をな、」と私がいふ、「どこかでさがして來て、舟を直してくれ、さあ、早く。」

エルモライは立ち去つた。

「さあ、こんなことぢや、どうも陷ちこみさうだな？」と私はウラヂーミルにいふ。

「そんなことはありますめえ、」と彼が答へる、「どつちにしたつて、池は深かないと見なけりやなりません。」

「さうでさ、深かありませんよ。」夢でも見てゐたかのやうに、今まで妙ないひ方をしてゐたスチョークがいふ、「底は泥と草で、草が一面に生えてまさ。だけんど、ところどころに、深間もありまさ。」

「それにしても、そんなに草がひどくちや、漕げねえぢやないか。」とウラヂーミルがいふ。

「平田舟に乘つて漕ぐ人があるもんですか？　竿で押せばいいんで。わしがお伴いたしませう。棹はあそこにありますけんど、棹でなくつて、鋤でも大丈夫でさ。」

「鋤ぢや樂ぢやねえな。場所によつちや底まで屆かねえだらう。」とウラヂーミルがいふ。

「全く樂ぢやござんしねえ。」

私はエルモライを待つあひだ、墓石に腰をかけた。ウラヂーミルは少しばかり遠慮して、少しばかり離れて、これも同じく腰をかけた。スチョークは首を垂れ、昔の習はしに從つて、背中に手を組んで、相變らず元のところに佇つてゐた。

「お前は、何かね、永いことここで漁師をしてるのかね？」と私は話し出した。

「ちやうど今年で七年目です。」と彼は身ぶるひしながら、かう答へた。

「ぢや、その前には何をしてた？」

「前には馭者をして居りやんした。」

「誰が馭者を廢さしたんだ？」

「新しい奥樣で。」

「奥樣つて、どういふ？」

「それはわし等をお買ひなすつた方で。御存じありますめえが、アリョーナ・チモフェーヴナつていふ、大へん肥つたお方で、……もう若かねえんですが。」

「どうしてお前を漁師になんかする氣になつたんだらう。」

「そりや分かりましねえ。タムボフの御領分から、ここさいらしつて、召使にみんな集ばれつて仰しやつて、そけえお出ましになつたんでさ。わしらその手さ口をつけて御挨拶申したけんど、

うんともすんともねえ、別に怒つてもゐねえ……、そんで一人一人に訊かつしやることにや、『何をしてゐたか、お役目は何だつたか？』と仰しやる。わしの番になりやんすと、『お前は何だつた？』とお訊ねになりますんで、『駄者でごぜえました。』つていふと、『駄者だつて？　まあ、何ていふ駄者だらうね、まあ御覽よ、何ていふ駄者だらうねえ？　お前は駄者には向かないから、うちの漁師になつて、髯をお剃りよ。私がここへ來たら、お臺所へ魚をとつて來ておくれよ、いいかい？』つて仰しやる。それからまあ漁師の數に入つたわけでさ。『それに、うちの池をきちんとして置くんだよ……、』つて仰しやつたけんど、どうしてあれをきちんとなんぞして置けますべえ？」

「お前たち、その前は誰に抱へられてた？」

「セルゲイ・セルゲェキッチ・ペフチェレフ様に。わし等、遺産相續であの人の手へ渡つたんですけんど、それも永えこと、わし等を置いとけねえで、まる六年きりでお終ひになりやんした。私やこの人の駄者を勤めてたんですけんど、それも町でぢやございません、――町にや町で、別のがゐやんしたから、村でだけでさ。」

「それぢや、若い時から駄者ばかりやつてたんだね？」

「何ですつて、駄者ばつかりつて！　駄者んなつたなあ、セルゲイ・セルゲェキッチ様んとこ

で初めてで、その前にや料理番でやんした。それも町でぢやなくつて、やつぱり村の方で。」

「では誰のところで料理番してたのかな？」

「前の旦那のアファナーシイ・ネフェードィチ様つて、セルゲイ・セルゲェキッチの伯父様んとこでさ。リゴフはあの、セルゲイ・セルゲェキッチ様がお買ひになつたんですけんど、この地所は伯父様が亡くなつたので、そつくりおゆづりでセルゲイ・セルゲェキッチ様のものになつたんです。」

「誰から買つたのかね、伯父さんは？」

「タチヤーナ・ワシーリエヴナ様から。」

「タチヤーナ・ワシーリエヴナ様つて、誰のこと？」

「それがその一昨年、ボルホヲ在で……ええと、さうぢやない、カラーチェヲ在で、死ぬまで獨り身でしてね、……あの人はお嫁に行つたことはねえんです。御存じありませんかな？　わし等あ、あの人のお父様のワシーリイ・セミョーヌィチ様から、あの娘さんの手に渡りましたので。あの人はずゐぶん永えこと、わしらを置いたんですがね……、かれこれ二十年くらゐも。」

「それぢや何かね、その人んところで料理番をしてたのかね？」

「初めは、へい、全く料理番でやんしたが、それから珈琲係にされました。」

「何にだつて？」
「あのう、珈琲係に。」
「それはまた、どんな役目だね？」
「そりや、旦那様、わしも知りましねえ。食堂に勤めてまして。クジマーと呼ばれねえで、アントンつて呼ばれてました。奥様がさうしろつていふおいひつけでして。」
「ぢや、本當の名前はクジマーだね？」
「へえ。」
「で、ずつと、いつも珈琲係をしてたんだね？」
「いんえ、いつもぢやありましねえ。役者もしてましたんで。」
「まさか？」
「どういたしまして、ほんとです……舞臺さ出て演りやんした。わしらの舞臺を奥様が自分でお邸ん中へ拵へなすつて。」
「一體、お前はどんな役を演つたんだい？」
「なんておつしやるんですか？」
「舞臺で何をしたつていふのさ。」

「ああ、御存じねえんですか？　みんなが、はあ、わしをつかまへて、衣裳をさせやんしたから、それを着て、歩いたり、立つたり、坐つたり、その場その場でいいやうにやりやんした。みんなが、かういふんだぞつて言ひますから、その通りに言ひやんした。一度は盲人になりやんした……、その時あ兩方の眼瞼の下へ小つちやい豌豆の粒を一つづつ、くつ附けられやんして……、へえ、全く！」
「それから後はどうした？」
「そいからまた、料理番になりやんした。」
「何だつてまた、料理番になんぞ貶されたんだい？」
「うちの兄弟が逃げましたんで。」
「うむ、それぢや初めの奥様のお父様の頃は、どんなことしてたんだい？」
「いろんな勤めをやりやんした。初めは侍童になり、そいから別當になり、庭師になり、或るときは獵犬番にもなりやんした。」
「獵犬番に？　……ぢや犬を連れて騎りまはしてたんだね？」
「へえ、犬を連れて騎りまはしもしましたけんど、酷い目に遭ひやんしたよ。馬から落ちて、馬にや怪我させる。大旦那はとても厳いお方で私を小つびどく叩かせて、モスクワへ年期にやつ

たんです、靴屋がとこえ。」

「年期になんぞ？　だつて獵犬番になつた位なら子供ぢやなかつたらうが？」

「へえ。ええと、二十歳には充分なつてました。」

「二十歳にもなつて、このこの年期奉公に行く奴があるものかな？」

「そりや、造作もなくやれるもんでせう、何せ旦那様の仰しやることだもん。でも有難えことにやぢきに旦那様はおつ死んで、私や村へ返されたんでさ。」

「ぢや料理渡世なんか、いつ習つたんだい？」

スチョークは痩せて、黄ばんだ顔を上げて苦笑した。

「一體、あんなことは習ふもんでせうかね？　……嬶どもでも煮焚きはやつてまさね！」

「それでは、」と私は言つた、「クジマー、お前はこれまでの一生涯に、ずゐぶんいろんなことをやつて來たんだな！　今ぢや漁師だといつて、魚がゐないのに、何してるんだい？」

「なに、旦那、私は何も苦情いふこたありませんよ。漁師にして貰つたのは、有難えこつてさ。私みたいな年寄が、もう一人、アンドレイ・プープィリつていふのがゐやんしたが、こいつにや奥様が、紙工場さ入つて水汲みしろつて言ひつけなすつたんでさ。『遊んで食つてると罰があたる』つて仰しやいましてね。それでその、プープィリの奴は甘い事あんべとあてにしてたんです。

奴の又甥になるのが奥様の帳場で書役をしてて、そのうち奥様に申し上げて取り立つてやらうと約束したもんで。それでまあ、水汲みに取り立てて貰つたんですがね！　……それでもプープィリは私の見てゐる眼の前で、甥の足もとへ這えつくばつてお辭儀をしてましたつけ。」

「お前、家族は？　女房は持つたの？」

「いんえ、旦那様、持つたことはありましねえ。亡くなつたタチヤーナ・ワシーリエヴナは――天國に安らはせ給へ！――あの方は誰にも嫁事あ、お許しになんなかつたんでさ。『とんでもない！　かうして私でさへ獨り身で暮らしてるぢやないか、それだのに何て我儘だらう！　あれたちにそんな必要があるものかね？』つてよく仰しやいましてね。」

「お前、今は何をして暮らしてるんだい？　給金を貰つてるのかい？」

「なんの、旦那様、給金なんて！　……食はして貰へりや、ほんとに有難いこつて！　とても満足でさ。どうか、はや、奥様が長生きなせえますやうに！」

エルモライが歸つて來た。

「舟が直つたぞ！」とぞんざいな物言ひをする、「棹を取つて來う、おい！　……」

スチョークは棹を取りに駈け出した。憐れな老人と私が話をしてゐる間ぢゆう、獵師のウラヂーミルは、さげすむやうな微笑を浮かべて、じろじろと老人を眺めてゐた。

「馬鹿な奴だ」老人が行つてしまふと、彼は言ひ出した、「まるで教育のない土百姓でさ、ただそれだけのものです。お邸にゐる人間とさへもいへない、……それだのに、しよつちゆう法螺ばかり吹いてて、……あんな奴に役者が勤まつてたまるものですか、まあ、考へても御覽なさいまし！　つまらないお暇つぶしをなすつたものですね、あんな奴とお話しなんかなすつて。」

十五分ばかりして、私たちはもうスチョークの舟に乘つてゐた。（犬は馭者のイェグヂールに番をさせて小舍に殘して來た。）さして乘心地もよくはなかつたが、獵をする人間たちは氣むづかしい連中ではないから平氣である。うしろの尖つてゐる艫のところにはスチョークが立つて、棹で『押して』ゐた。ウラヂーミルと私は舟の横木の上に腰をおろし、エルモライは前の舳の突つ先のところに坐りこんでゐた。麻屑が詰まつてゐるのに、水はもう足もとへやつて來た。幸ひ天氣は穩かで、池は眠つてでもゐるかのやう。

私たちは、かなりゆつくり乘り出して行つた。老人はすつかり水草の青い絲のからみついた長い棹を、粘り氣の強い泥から一生懸命に拔いてゐた。睡蓮の茂り合ふ圓葉も舟の進むのを妨げる。とうとう葦の生えてゐるところへ來て、いよいよ面白くなつて來た。鴨は繩張りへだしぬけに踏み込まれたのに驚いて、聲さわがしく池から翔び上る。彈丸は一せいに、その後を追つて打ち出される。あの尾の短い鳥たちが宙返りをして、どつかりと水にたたきつかるのは面白い見ものだ

つた。勿論、擊つた鴨を殘らず取ることは出來ない。薄傷の奴は潛つてしまふし、すつかり死に切つた奴でも、あの深い葭の中へ落ちると、さすがに山猫のやうなエルモライの小さな眼にも見つからない。それでもお晝ごろまでには私たちの舟は綫まで獲物が一ぱいになつた。

エルモライにとつては小氣味よくてたまらないことであつたが、ウラヂーミルはちつともうまく擊てなかつた。はづれ彈丸を擊つては、自分ながら不思議だといふやうな顏をして鐵砲をあらためて見たり、銃口を吹いてみたり、當惑したやうた樣子で、しまひにはどうして擊ちはづしたのか、その理由を說明する。いつものやうに、エルモライは見事に擊ちあてた。私は例によつて、實にまづかつた。スチョークは若い頃から且那のところに勤めてゐた人間らしく、おもねるやうな眼つきで私たちを見ては、時をり、『あれ、あれ、まだ鴨がゐますよ！』などと喫くのである。さうして絕えず背中を搔いてゐる。それも手を使はずに肩を妙に動かして搔くのである。天氣はやはり快晴で、白い卷雲がはつきりと水に影を映して、高く、ゆるゆると立ち渡つてゐた。葦はあたりに囁き、池はところどころ日光に反射して鋼鐵のやうにかがやく。私たちが村へ歸る仕度をしてゐたとき、かなりに不愉快な事件が不意に持ち上つて來た。

私たちはずつと前から、私たちの乘つてゐる平田舟のなかに、絕えず少しづつ水の溜まるのには氣がついてゐた。水を柄杓で搔い出すことはウラヂーミルに任してあつた。この柄杓といふの

は、用意周到なエルモライが何かの役にも立たうかと、よそ見をしてゐた百姓女のところからこつそり盗んで來たものである。自分の役目をウラヂーミルが怠らないでゐる間だけは、當然、何ごともなかつた。ところが獵を終へて、もう歸らうといふ間際になつて、鴨がもうおわかれですといふやうに、こちらで彈丸をこめる暇もなかつたくらゐにたくさん群れをなして飛び上つた。鐵砲うちに熱中して私たちは舟がどうなつてゐるのか、氣にも留めなかつた、――すると、だしぬけにエルモライが激しく動いたので（彼は射止めた鴨を取らうとして、舟べりに身體をすつかり凭せかけた）、私たちの朽ち舟は傾ぎ、水が一ぱいに入つて、たわいもなく底へ沈んで行つたが、仕合せにも餘り深いところではなかつた。叫んではみたけれど、後の祭りだ。忽ちのうちに、うようよ浮かんでゐる鴨の死骸にとりかこまれて、私たちは頸まで水に浸つて佇つてゐるのであつた。愕いて蒼くなつた仲間の顏をいま思ひ出すと、私は聲を立てて笑はずにゐられない（恐らく私の顏にしたところで、その時はあまり赭ら顏でもなかつらう）、しかしその時は、正直のところ、笑はうなどといふ氣はてんで起こらなかつた。誰もが鐵砲を頭の上に捧げる。するとスチョークは主人たちの眞似をするのが癖になつてゐたと見えて、これは高く棹を差し上げた。最初に沈默を破つたのはエルモライである。

「ちえっ、くたばれ奴！」と、水に唾を吐きかけて彼はいふのであつた、「なんだ、このざま

はみんな手前のせゐだぞ、この老いぼれ奴！」怒りながらスチョークの方を向いて、なほも附け加へる、「手前の舟は一てい何だつてんだ？」

「濟んません。」と、ぼんやりした聲で老爺がいふ。

「さうともよ、お前もお前だ。」とエルモライは今度は頭をウラヂーミルの方に向けて小言をつづける、「何をぼんやりしてたんだい？　何で水を汲み出さなかつたんだ？　え、おい、おい……」

何といはれても、ウラヂーミルはなかなか返答どころではなかつた。彼は樹の葉のやうに慄へてゐて、齒の根も合はぬ。そして全く無意味に微笑んでゐた。あの口巧者は、あの優にやさしい禮儀作法や、自分の威嚴を誇る氣持は、どこへ行つてしまつたのか、

呪はれた舟は私たちの足もとに力なく搖れてゐる……。難船した瞬間には、水が非常に冷たく思はれたが、すぐに慣れてしまつて平氣になつてゐた。一びつくりが濟んだとき、私はあたりを見まはした。すると、ぐるりに、十歩ばかり離れたところに葦が生えてゐて、葦の末葉ごしに遠く水岸が見えてゐる。『困つたな！……』と私は考へた。

「どうしたもんだらう？」とエルモライに訊いて見る。

「まあ、何とかしませう。ここで夜明かしも出來ませんからね。」と答へる、「さあ、お前、鐵

砲もつててくれ。」とウラヂーミルにいふ。

ウラヂーミルは否應なしに承知した。

「淺瀬をひとつ見つけて來る。」とエルモライはどの池にも必ず淺瀬があるかのやうに定めこんで、言葉をつづけ、――スチョークから棹を取ると、用心ぶかく水底を探りながら、岸をさして歩き出した。

「お前、泳げるのかい？」と私は訊ねた。

「いいえ、泳げません。」といふ聲が葦の葉かげから聞こえて來る。

「ぢや、はまつて死んぢまふべえ。」スチョークは濟ましこんで言ふのである。スチョークは前には危險にうろたへたのではなく、私たちに叱られるのを怖れてうろたへたのであつたが、今ではすつかり落ちついて、時をり、ゆつくりと深い溜息を洩らしてゐる。しかも、何とかして、この場を切りぬけようなどとは一向に考へてゐない樣子であつた。

「骨折り損のくたびれ儲けになつちめえませう。」とウラヂーミルは氣の毒さうに附け加へる。

エルモライは一時間餘りも歸らなかつた。この一時間の待ち遠しさといつたら、まことに果てしのないものに思はれた。初めのうちは一生懸命に呼び交はしてゐたが、やがてその返事がいよいよ間遠になつて、とうとう終ひには少しも聞こえなくなつてしまつた。村の方では夕べの祈り

の鐘が鳴り始める。私たちは互ひに言葉も交はさなかつた。それどころか顏も見合せまいとしてゐたのである。鴨は私たちの頭のうへを飛びめぐつて、中には私たちの近くへとまらうとするものもあつたが、急にいはゆる『矢の如くに』舞ひ上つて、啼き聲高く飛んで去つてしまふ。私たちはしびれが切れ出した。スチョークは眠らうとでも思つてゐるかのやうに、眼をぱちぱちさせてゐる。

そこへやうやくエルモライが歸つて來たので、何ともいひやうのないほど嬉しかつた。

「さあ、どうだつたね？」

「岸まで行つて來やんした。淺瀬が見つかりやんしたから……行きやんせう。」

私たちは直ぐに出かけようとした。けれども先づエルモライは水の中へ手を入れて、衣囊から繩を取り出し、射止めた鴨の足を括りつけて、兩端を口にくはへ、先に立つて歩き出した。ウラヂーミルがそれにつづき、私はウラヂーミルの後になる。スチョークは殿りをつとめる。岸までは二百歩ほどであつた。エルモライは勇敢に、立ちどまりもせずに進んで（よくもこんなに道筋を覺えてゐたものだ）、ただ折々、『もつと左へ、……右には穴があるぞ。』とか、『もつと右へ、……左へ行くと沒るぞ。』とか呶鳴りつけながら歩いて行つた……。時には水が咽喉のところまで來る。可哀さうにスチョークは、誰よりも背が低いので、二度ばかり水を呑んで、ぶくぶくや

つた。『おい、おい、おい！』とエルモライがおどしつけるやうに呼びかける、――すると、スチョークは飛んだり跳ねたり、もがいたり足搔いたりして、やつとのことで淺いところへ出るのであつた。然しながら、どんなに際どいときでも、私の上衣の裾につかまらうなどといふ了簡はしないのである。疲れはてて、泥だらけになり、ずぶ濡れになつた私たちは、やつとのことで岸へ辿りついた。

二時間ほど後には、私たちはみな出來るだけ着物を乾かして、大きな秣小舍の中に坐つて、夕餉の支度をしてゐた。馭者のイェグヂールは並みはづれのろまな、尻の重い、用心ぶかい、ねぼけ顏の男であるが、門口に立つて、一生懸命、スチョークに嗅煙草を御馳走してゐる。（私は露西亞の馭者たち同志が、忽ち仲よしになるのを知つてゐる。）スチョークは物狂ほしく、嘔氣を催ほすほど煙草を吸ひこんでゐた。唾を吐いたり、咳をしたりして、どうやら夢中になつて喜んでゐるらしかつた。ウラヂーミルは懶げな樣子をして、首を横にかしげながら、あまり口數もきかなかつた。エルモライは私たちの鐵砲の拭き掃除をしてゐる。犬たちは燕麥粥を待ちかねて大げさなほど盛んに尾を振つてゐる。馬は檐の下に蹄を鳴らしたり、嘶いたりしてゐる……。陽は沈む。最後の光が散つて、茜いろの縞がひろがる。空に金色の雲がたなびく、いよいよこまかく。洗ひきよめられ、梳られた羊の毛のやうだ……。村には歌ふたふ聲が聞こえる。

ビェージンの草原

幾日も天氣のつづいた時でなければ見られないやうな、七月のよく晴れた日であつた。朝早くから空は澄みきつてゐる。有明の光も火のやうに燃え立つのではなく、柔かな紅らみをみなぎらせてゐる。太陽も焦きつけるばかりの旱天の頃のやうに、火と燃えて暑苦しくはなく、また嵐の前によく見るやうな陰つた茜の色もなく、明るく、なつかしい輝きを放つて、細長い雲のかげからいそいそと浮きあがつて來て、爽かにかがやき、やがてまた薄むらさきの霧に沒してしまふ。立ちのぼる雲の細かな上緣は小さな蛇のやうに閃き初める。その閃光は煉られた銀の閃光のやうだ……。するとまた搖らめく光線が迸る、――愉しげに、おごそかに、舞ひあがるかのやうに、大どかな太陽が昇つて來る。正午ごろになると、いつもやはらかな白い緣をつけて、黃金色を帶びた灰色の圓い高い雲がいくつとはなしにあらはれる。かぎりなく溢れる川のおもてに、青く深く透きとほる流れにかこまれ、撒き散らされてゐる島々のやうに、雲は殆んど動かない。ただはるかに遠く、地平線に近いあたりに雲は動き、雲は互ひに寄りそうて、その間にはもう青空は見

えぬが、しかも雲そのものは空と同じやうに瑠璃色に、光と熱とを一ぱいにふくんでゐる。地平線の色はほのかに、薄むらさきの色もあせて、そのまま日の暮れるまで變りなく、見わたすかぎり一樣だ。陰るところはいづこにもなく、夕立雲の叢るところもなく、ただどこかしらに、青味を帶びた細い筋が低く垂れる、――かと思へば、それは見えるか見えないほどのこまかな雨が蒔き散らされてゐるのであつた。夕方ちかくなると雲は消える。ただ最後の黝ずんだ煙のやうに覺束ないのが、入日の前に薔薇いろの球のやうに浮かんでゐる。昇る時のやうに靜かに陽の沈んだところには、緋の色の夕映えが、しばしの間、昏くなつてゆく地の上に漂ひ、空には、心して徐かに運ぶ蠟燭の火のやうに、靜かに瞬きながら夕べの星が點される。かやうな日にはすべての色が柔かく明るいけれども冴えてはゐない。あらゆるものが身に沁みるやうな或る溫か味を帶びてゐる。こんな日には、ともすれば暑さ嚴しく、野原の斜面が『いきれる』ことさへもある。けれど風が鬱積した暑さを吹き拂つて、埃りの渦卷が、――天氣つづきの確かな印の――道に沿ひ、田圃を越えて、高く白く捲きあがり、いづこともなしに行き過ぎる。乾き切つて澄んだ空氣に、苦蓬や、刈りとられた裸麥や、蕎麥の香ひがする。もう一時間で夜になるといふ頃になつても、少しの濕り氣も感じられぬ。麥を刈るのに百姓たちが望むのは、かやうな日和である。

私は丁度こんな日に、トゥラ縣のチェールン郡へ松鷄を射ちに行つたことがある。私は實に

たくさんの獲物を見つけて射おとした。いつぱいになつた獵囊は容赦もなく肩を傷めつけた。私がいよいよ家へ歸らうと思つた頃にはもう夕燒の色もあせて、落日の光はうけぬながら、いまだに明るい空には、冷え冷えとして影が次第に濃くなり擴がり出してゐた。私は足早に、長々とつづく灌木の『廣つぱ』を通り過ぎて、とある丘に登つて行つた。すると右手に槲の木立があつて、遠くに低い白壁づくりの教會堂のある、いつも見慣れた平地が見えることと思つてゐたのに、意外にもまるで變つた、見知らぬところがあらはれた。足もとには狹い谷がつづいてゐて、眞向ふには峻しい牆壁のやうに、筐柳の密林が聳えてゐる。私は腑に落ちないままに立ちどまつて、あたりを見まはした……。『ええ！　とんでもないところへ來てしまつたぞ。右へ右へと寄り過ぎたのだ。』と考へ、我ながらどうしてこんな間違ひをしたのかと呆れながら、大急ぎで丘を下りて行つた。すると忽ちにして、さゆらぎだもしない、不愉快な濕り氣にとりかこまれて、まるで穴倉の中へでも入つたやうだ。谷底に高く茂つた草はすつかり濡れて、平らな卓子掛のやうに白い。その上を歩くのは何とはなしに氣味が惡い。急いで向ふ岸へ這ひ上つて、筐柳に沿つて、道を左手にとつて歩いて行つた。蝙蝠はもう、あやしげに輪を描いて、薄暗いうちにも澄んでゐる空に顫へながら、眠りかけてゐる梢のうへを飛びめぐつてゐる。歸りおくれた若鷹は、塒をさして急ぎながら、いきほひよく、空の高みを眞直ぐに飛んで行つた。『よし、あの端れまで出たら、

きつと道もあるだらう。』と私は心の中で考へた、『それにしたつて、一露里ほども廻り道をしてしまつた！』

とうとう森の端れまで辿りついたが、道らしいものは一向にない。何かの、刈り殘しておいたやうな低い灌木が、眼の前に廣々とつづいてゐる　そのさきの遙か遠くの方には茫々たる野原が見える。私はまた立ちどまつた。『何ていふことだらう？　……ここは一體どこなんだらう？』晝のうち、どこをどうして歩いてゐたのか、私は記憶を辿り出した！『やつ！　ここはパラーヒンの藪だな！』私はつひにかう叫んだ、『てつきりさうだ！　あそこに見えてゐるのがシンヂェーフの森に相違ない、……だが然し、どうしてこんなところへ來てしまつたのだらう？　こんなに遠く？　……をかしい！　さあ、もう一度、右へとつて行かなくちやならん。』

私は灌木の茂みを越えて、右の方へと進んで行つた。そのうちに夜が雷雲のやうに迫つて來て、次第に濃くひろがつて行つた。闇は夕じめりと共に、あちこちから立ちのぼつて、また、高いところから流れ落ちて來るやうにさへも思はれる。さうかうしてゐるうちに、踏み均らされてゐない草茫々の小徑に出た。私は氣をつけて前の方を見透かしながら、小徑をたよりに歩いて行く。忽ちのうちに、あたりのものは何もかもが闇に包まれて靜まりかへる。――ただ時として鶉の聲が聞こえるばかり。小さな夜の鳥が、音もなく、低く、やはらかな羽を擴げて、翔んで來て、私

に危ふく衝きあたりさうになつたが、おづおづとわきへ外れて行つた。私は藪の緣に出て、畑の中を畦道づたひに行く。もう遠くのものを見分けるには骨が折れる。畑はあたりに仄白く、その向ふには、刻々と大きな團塊をなして近づきながら、陰鬱な闇が湧きあがつてゐた。いよいよ冷えてゆく空氣の中に私の跫音はかすかに聞こえる。色の薄らいだ空は、またもや青くなつて來た。しかも、それはもう夜の青味であつた。小さな星が空にちらちらと光りながら、微かに搖れはじめる。

私が森と思つてゐたのは、暗い、まん圓い丘であつた。『して見ると、ここはどこだらう？』と私はまた聲に出して同じことを繰り返し、立ちどまつた。これで三度目だ。そして相談でも持ちかけるやうに、四つ足の中では確かに最も利口な、英國種の赤ぶちのわが獵犬ディアンカを見やるのであつた。けれど四つ足の中で最も利口なこの犬も、ただ徒らに尻尾を振り、疲れはてた眼をやるせなげにぱちりとさせたばかりで、これといふうまい分別も授けてくれぬ。犬の前で私はきまりが悪くなつて、まるで急に自分の行くべき道が分かつたかのやうに、自暴にずんずん歩いて行つた。丘の裾を廻ると、深くもない窪地に出る。そのまはりは耕地になつてゐる。俄かに妙な氣持に捉へられる。この窪地はぐるりが傾斜をなしてゐて、殆んど、柄のついた鑵子そつくりの形をしてゐて、底には幾つかの大きな白い石が突つ立つてゐる。――まるで祕密な相談があ

つて、ここまで這ひ降りてでも來たやうだ、――窪地の中が、あまりにもひつそりしてゐて寂しく、空はその上にあまりにも坦々と、ものの凄く垂れかかつてゐるので、私の心は縮み上つてしまつた。何か小さな野の獸が、石と石との間に哀れげな細い聲で啼いてゐる。私は急いで再び丘の上に出た。それまでは歸り途を見つけようといふ望みを失はなかつたが、今は全く道にふみ迷つたものと觀念してしまつた。今はもう殆んど靄の中に沒れ去つたあたりの地形を見きはめようとする氣も更になく、私は眞直ぐに星をたよりに、あてもなくずんずん歩き出した。……足をやうやく引きずつて半時間ほどもかうして歩いてゐるのだ。生まれてこの方、こんな荒涼たるところへは一度として來たことがないやうに思はれた。どこを見ても火の光一つ見えず、物音一つ聞こえなかつた。だらだらになつた丘は丘に連なり、野は涯しなく野に連なり、藪は私の鼻先へ地べたから不意に湧き出したかのやうに見える。私はなほも歩きつづける。そしてもうどこかで朝まで野宿しようといふつもりになつてゐると、急に怖ろしい淵の上に出てゐるのであつた。

私は踏み出した足をひよいと後に引いた。微かに明るい宵闇を透かせば、はるか下の方に廣い平原が見える。廣い川が平原を半圓形にめぐつて、向ふの方へ流れてゐる。鋼鐵(はがね)いろの、時をり微かに閃く水の照りかへしに、川筋がそれと知られる。私の佇(た)つてゐる丘は急に殆んど垂直な斷崖に盡き、巨きな斷面は蒼味を帶びた虚空を背景に、くつきりと黑く浮き出し、眼の前の丘の斷

崖の眞下、動かない暗い鏡のやうな川のほとり、斷崖と平原とが結びつく片隅には、二つの火が並んで、赤い焰をあげて燃えたり煙つたりしてゐる。火をとり卷いて人がうごめき、影が搖れる。また折々は小さな捲毛の頭の前面が、くつきりと照らし出される……。

ここで私は自分の迷ひ込んで來たところが分かつた。この草原は私たちの地方でビェージンの草原といつて、評判の高いところであつた……。しかし、もう家に歸れる見込みはない。殊に夜分のことで、足は疲れ切つて、竦んでしまつてゐる。仕方がないから火のある所に近づいて、家畜商人らしく見受けられる人たちの仲間に入つて、夜明けを待つことに覺悟を決めた。私は無事に崖を降りて行つた。ところが、最後に摑まへてゐた小枝をいざ放さうといふところへ、矢庭に二匹の大きな白い老犬が怨めしさうに吠えかかつて來た。子供らしい甲高い聲が火のまはりから聞こえて來て、二三の少年がひよいと地べたから立ち上つた。誰だと叫ぶ子供らの聲に應へる。子供らは私に近づいて來て、わがディアンカがひよつこり現はれたに殊更びつくりしたらしい犬を呼び戻す。私はみんなのゐる方へ近づいた。

火のまはりに坐つてゐる人たちを家畜商人と見たのは間違ひであつた。これは何のことはない、馬の群れの番をしてゐる隣村の百姓の子供らなのであつた。私たちの方では、夏の暑い頃になると、夜分に馬を逐ひ出して、草を食べさせる。晝間は蠅や虻がうるさいからであらう。馬の群れ

を日の暮れぬ前に追ひ出して、翌くる朝、夜の白む頃に追ひかへす、――これが百姓の子供たちにとつては非常な樂しみなのである。帽子をかぶらずに、古ぼけた膝つきりの外套を着て、ひどく威勢のいい百姓馬に跨がり、樂しさうな喊聲をあげたり、喚いたり、手足を振りながら駛つては、高く跳びあがつたり、聲高く笑つたりする。輕い埃りが黄色な柱のやうに立ち上つて、街道について疾る。よく揃つた蹄の聲が遠くの方まで響き渡り、馬は耳をぴんと立てて駈けて行く。先頭第一には尾をふり上げて、絶えず歩調を變へながら、ふり亂した鬣に牛蒡の種をつけて、栗毛の尨毛といつたやうなのが駛つて行く。

私は道に迷つたことを少年たちに話して、そのわきに腰をおろす。子供たちは私にどこから來たのかと訊ね、それから暫く口を噤んで、わきの方へ寄つてくれた。私たちは少しばかり話をした。ぐるりを馬に、齧られた小さな灌木の蔭に身を横たへて、私はあたりを見廻しはじめた。それは實にすばらしい光景であつた。焚き火のまはりには、圓い紅らみがかつた光の環がふるへて、闇に吸ひかこまれて消えてしまつたのかと思はれる。焰は時をりぱつと燃えあがり、光の環の外までも急速な反射を投げ散らす。かぼそい光の舌は、花も葉もない楊の枝を一舐めして、そのまま消え失せてしまふ。すると今度は尖つた、長い影が自分の方から忽ちのうちに侵び込んで來て、火の眞際までおし寄せて來る。闇が光と組打ちをするのだ。時として、焰の勢ひが弱くなつて、

光の環が狹められると、襲ひかかつて來る闇の中から、だしぬけに鼻づらの白い栗毛や、眞白い馬の首があらはれて、すばやく長い草を嚙みながら、まじまじと、ぼんやりした眼をして私たちを見つめ、またうなだれる、かと思ふと忽ちにかくれてしまふ。後にはただ相變らず草を嚙む音、鼻を鳴らす音が聞こえるばかり。光のあたるところからは、闇の中でしてゐることが、なかなかに見分けがつかぬ。だから、手近にあるものまで、何もかもが黑い幕にでも隔てられてゐるやうに見える。が、はるかに遠く、地平線に近いあたりには、丘や森が長く點在してゐるのが見える。暗いながらも澄み渡つた空は神祕的な壯麗さをたたへながら、私たちのうへに嚴かに、涯もなく高くかかつてゐる。あの一種特別な、疲れを誘ふまでの、爽かな香ひ――露西亞の夏の夜の香りを吸ひ込むと、胸は心地よく締めつけられるやうだ。あたりには殆んど物音一つ聞こえない……、ただ稀れに、近くの川にだしぬけに大きな魚が飛び跳ねて水音を立てるのと、寄せ來る波にわづかに搖れて、汀の葦が微かにそよいでゐるばかり……。焚火ばかりが靜かに、ぱちぱちと爆ぜてゐる。

子供たちは火のまはりに坐つてゐる。そこにはさつき私に嚙みつかうとした二匹の犬も坐つてゐる。犬は私が傍にゐるので永いこと心を落ちつけることが出來ず、睡たげな眼を細め、横目で火の方を見ながら、時をりは自分たちの威嚴を極度に感じて唸つたりした。最初は唸るだけであ

つたが、後には思ひ通りにならないことを悲しむかのやうに、いくらか泣き聲になつて來た。少年たちは、フェーヂャにパウルーシャに、イリューシャにコスチャにワーニャ、全部で五人であつた。（この名前は、話を聞いてゐて承知したのであるが、いま私はこの少年たちを讀者諸君に御紹介しようと思ふ。）

先づ一番年かさなのがフェーヂャで、年頃は十四くらゐに見える。すらりとした子で、きれいな、ほつそりとした、いくらか小づくりな顏をしてゐて、捲毛の、光澤のある髪に、ぱつちりした眼をし、いつも半ば愉しさうな、半ば呑氣さうな微笑みを浮かべてゐる。樣子を見るのに裕福な家庭に育つたらしく、この野原へ來たのも暮らし向きの必要からでなく、ただ何となく慰み半分に來たものらしい。黃色い緣をとつた華やかな更紗の襯衣を着て、小さな新しい百姓外套を引つかけてゐるが、それが撫肩から今にも滑り落ちさうになつてゐる。淺黃の帶には梳櫛がさがつてゐる。胴の淺い長靴は、たしかに自分のもので、親父ゆづりではなかつた。次の少年パウルーシャは縺れた黑い髪の毛に、灰色の眼をし、頰骨が廣く、蒼白い、痘痕顏をして、口は大きいながらも締まりがあつて、頭は俗にいふ『麥酒罐』ほど大きく、體はずんぐりしてゐて不恰好である。この少年は決して器量よしではなかつた、——それは否むわけには行かない。しかも私はこの子が氣に入つた。まことに利口さうで、率直で、またその聲には力がこもつてゐた。着物は人

に自慢の出來るやうなものではなかつた。身につけてゐるものといへば粗末な手織の襯衣と、補綴のあたつた股引だけである。三番目のイリューシャの顏は甚だ振はなかつた。鈎鼻に、しよぼしよぼした眼、間のびのした輪廓、すべてが一種の愚鈍らしい病的な焦心をあらはしてゐた。固く結んだ唇はいささかも動かず、引き寄せられた眉は弛むことなく、——絕えず焚火が眩しいので顏を顰めてゐるやうな恰好である。黃いろい、といつても殆んど白に近い髪の毛は、しよつちゆう兩手で耳の上まで引つ張り下ろしてゐる低いフェルト帽のかげから、尖つた鰭のやうにはみ出してゐる。新しい木の皮沓と脚袢を穿いて、胴のまはりを三重に卷いてゐる太い繩は、さつぱりした黑の長襯衣をぴつたり締めつけてゐる。この子もパウルーシャも見たところでは十二を越してゐまい。四番目のコスチャはまだ十歲そこそこの少年で、その物思はしげな、悲しさうな眼つきは私の好奇心をそそる。顏は大きくなく、瘦せてゐて、雀斑があつて、栗鼠のやうに顎が尖つてゐる。唇はやつと見分けがつくくらゐに薄いが、大きい黑味がちの光る眼は、みづみづしく輝いて、異樣な印象を與へる。口では——少くとも彼の口では、——言ひあらはすことの出來ない或るものを、この眼が語らうとしてゐるやうに見える、彼は背が小さく、弱々しさうな身體つきをしてゐて、身なりもかなりに見すぼらしい。殘る一人のワーニャ、これは最初、私の眼にとまらなかつた。この子は蓆をかぶつて、おとなしく丸まつて、地べたに寢ころんでゐた。ただ時

をりは亜麻色の捲毛の頭をのぞかせてゐた。この子はせいぜい七つ位であつた。

かうして私はわきの灌木の蔭に横になつて、子供たちの様子を眺めてゐた。小さな鍋が一方の焚火にかかつてゐて、鍋の中には『馬鈴薯』が煮えてゐる。パウルーシャは鍋の番をし、跪づいて、沸り出した湯の中へ木串を突つこんでゐる。フェーヂャは外套の裾を伸べて、頰杖をつきながら横になつてゐる。イリューシャはコスチャのわきに坐り、相變らず一生懸命に眼を細めてゐる。コスチャは少しくうなだれて、どこか遠くの方を見てゐる。ワーニャは蓆をかぶつて身動きだもしない。私は眠つたふりをした。子供たちは又ぽつりぽつり話を始めた。

最初はみんなが、あれやこれや、明日の仕事のことや馬のことなどを、とりとめなく話してゐたが、不意にフェーヂャがイリューシャの方を向いて、中斷されてゐた話を引き戻すやうな風をして、彼に訊ねた。

「そんなら、何かい、お前はほんとに家魔を見たのけ？」

「うんう、見ねえよ、ドモヲイは見らんねんだもの。」とイリューシャが嗄れた、低い聲で答へたが、その聲音は顔の表情とこの上もなく釣り合つてゐた、「おれは聲を聞いただけなんだよ……、それも俺ばかしぢやねえんだ。」

「お前ら方のどこにゐるんだ？」とパウルーシャが訊く。

「あの古い紙漉場によ。」

「おめえら、工場さ行つてんのか？」

「行つてつとも。おらアヴヂューシカ兄ちやんと、伸方やつてんだぞ。」

「あれ、お前は職人なんだな……」

「さあ、それぢや、どうして聞けたんだい、その聲は？」

「あの、な。俺とアヴヂューシカ兄ちやんと、フョードル・ミヘーフスキイと、イワーシカ・カスイと、赤丘から來たもう一人のイワーシカと、イワーシカ・スホルーコフと、それからもつとゐたんだ。みんなで十人位ゐたんだけど、みんな當番の組で、紙漉場さ宿直になつたんだ。本當の宿直つていふわけぢやないんだけど、監督のナザロフが歸さねんだもん。『お前ら、家へ歸りてえつたつて、明日は仕事がうんとあるんだから、歸つちやなんね。』つて。そいで俺ら殘つて、みんな一緒にごろ寢してたんだ。そしたらアヴヂューシカが、さあ、家魔が出たらどうする？　なんて言つたんだ……。アヴちやんが、まあだ言ひ切らねえ内に、ふいっと誰だか俺らの頭の上を歩き出したんだ。俺らは下に寢てんのに、そいつは上の車輪の邊を歩き出したんだ。じつと聽いてたら、歩いてて、歩くたんびに踏み板がしなつて、みしみしするんだ。それから俺らの頭の上を通り過ぎてしまふと、急に水がさらさらさらっと水車に流れ込んで、水車がぎいこつ

とんと鳴つて廻り出した。樋の口は外づしてあんのにな。誰が口を上げて、水を落したんだか、俺ら不思議でしやうがね。でも、水車は暫く廻つて、それきり止まつちやつたんだ。やがて、足音は上の戸んとこへ行つて、梯子段を、こんな風に、何だか急いてもゐねえやうに、ゆつくりゆつくり降りて來るんだ。梯子段も歩くと唸るやうな音を出して……、そのうちに、いよいよ俺らの部屋の戸口まで來て、暫くのあひだ、待つてゐる、待つてゐる、——そしたらひよいと戸が一ぱいに開いちやつたんだ。俺ら、たまげちやつて、見ると、何にもゐねえ……ふいっと、今度は大桶のわきの漉桁が動き出して、持ち上つて、水に浸つたかと思ふと、水の外を歩いて、こんな風に歩いて、まるで誰かが、濯いでるやうだつけが、また元んところへ歸つちやつた。さうすると今度は他の大桶のそばにあつた鈎が釘からはづれて、また元の釘に引つかかる。それから今度は誰か戸口の方さ行つたやうだと思つてたら、いきなり咳をしはじめた。何でも羊みたいによ。それからごほんとやつたんだ……。俺らみんな一かたまりになつて、お互ひに、からだの下に頭を突つこんぢやつたよ……。あの時はほんとにおつたまげたなあ！」

「ほう、さうかい！」とパーウェル*が口を出した、「だが、一體、あいつは何だつてまた咳なんぞしたんだか？」

「知んね。きつと濕つぽいからかも知んね。」

暫く誰もが默つてゐる。

「どうした、」とフェーヂャが訊く、「馬鈴薯は煮えたかな？」

パウルーシャが突ついてみる。

「駄目だ。未だ生だ……。あれ、何だか跳ねたぞ。」川の方へ顔を向けて、彼はかう附け足した、「きつと、梭魚だ……。あれ、星が飛んだ。」

「いや、みんな、おら話すことがあるんだ。」とコスチャが細い聲でいひ出した、「あのな、この間、父ちやんが話してくれたことなんだがな。」

「よし、聞かして貰はう。」とフェーヂャが、尻押し顔にいふ。

「お前ら、ガヴリーラを知つてつか、あの大村の大工がこと？」

「うん、知つてつとも。」

「んぢや、どうしてあいつがあんなにいつも陰氣な顔して、物を言はねんだか、知つてつけ？あんなに陰氣なのはな、かういふ譯なんだよ。父ちやんが話して聞かしたんだけど、あの人がな、胡桃とりに森さ行つたんだと。うん、胡桃とりに森さ行つたんだけど、道まぐれつちやつてよ。どんどん入つてつちやつて、とんでもねえ所さ入り込んぢやつたのよ。一生懸命にあちこち歩き廻つたけんど、それでもなあ、駄目よ！　道なんざ見つかんね。表はもう眞つ暗くなつた。それで

仕方がねえんで、樹の下さ坐つて、『朝まで待つべ』と思つたんだと。坐つてたら、居眠りし出したんだ。うとうとやり出したと思つたら、急に誰かが呼ぶ聲がする。見たつて、誰もゐねえ。またうとうとやり出すと、また呼ぶ聲がする。今度はようく眼をあけて見ると、前の樹の枝に水妖がゐて、からだをゆすぶりながら、大工を呼んでゐる。息がとまりさうなくらゐ笑つて、笑つて、さんざん笑つてゐる……。それにお月さまは眞つ晝間のやうに、とてもとても明るいので、何から何まで見えるんだ。水妖はやつぱり大工を呼んでゐる。水妖は體ぢゆうが透き通るやうに白くつて、枝さ腰かけてる。ちやうど鱸か、白楊魚みたいに、――でなけりや、ほら、あんなに白つぽくて銀色なのは鮒だな……。大工のガヴリーラはぼうつと氣が遠くなつちやつたのに、水妖の方ぢやあ、やつぱし笑つてて、來い來いつて、手で招んでゐるんだと。ガヴリーラはすんでのことで起き上つて、水妖のいふことを聽くところだつたが、きつと神樣が敎へて下すつたんだな、いきなり氣がついて十字を切つたんだつて……、その十字を切んのは、とても大へんだつたと。手がほんとに石みたいになつて廻らなかつたつてな。ああ、なんておつかねえことなんだろ！……それで、やつと十字を切つたんでな、水妖は笑ふのをやめて、急に泣き出したんだ……、泣いてな、眼を頭髮の毛で拭くんだけど、水妖の毛つていふのは、まるで大麻みてえに碧いんだぞ。それでガヴリーラがじつと水妖を見て、ようく見て、訊き出したんだ、『おい、森の精、何だつて

泣くのだ？』つて。すると、水妖はかういつたつてよ、『これ、人間よ、お前さんが十字なんかを切らなかつたら、死ぬまで私と一しよに面白く暮らせたものを。お前さんが十字なんか切るものだから、私は悲しくつて泣いてるんだよ。けれど、私ひとりばかりが惱みはしないよ。お前さんだつて、生涯、惱みつづけるやうにして上げるわ。』さういふんだ。と思つたら、消えちやつたんだ。すると直ぐにガヴリーラに分かつて來たんだ、どうしたら森の中から出られつか、分かつて來たんだ……。その時からだよ、あんなにいつも陰氣な顏をしてんのは。

『へえっ！』と暫くのあひだ默つてゐたフェーヂャがいふ、「だつて、どうしてあんな山鬼なんぞが、そんなに基督信者の魂を荒らせるのかな、だつて、ガヴリーラだつて、そいつのいふことを聽かなかつたんぢやねえけ？」

「ああ、そしてな、見ろ、お前！」コスチャがいふ、「ガヴリーラの話ぢや、水妖の聲は蝦蟇みてえに、悲しさうな聲だつてよ。」

「お前のお父つあんが、それを話して聞かしたのかい？……」フェーヂャがつづけていふ、「うん。おら、天井床に寢てて、すつかり聞いたんだ。」

「きたいな話だなあ！　どうして大工は悄氣てんのかな？　……さうすつと、きつと水妖はガヴリーラが氣に入つたんで、それで呼んだんだな。」

「うん、氣に入つたんだよ！」とイリューシャが相槌をうつ、「さうだとも！　水妖はガヴリーラを擽んべと思つたんだな、きつと、さう思つたんだ。擽んのが商賣なんだよ、あの水妖なんどの。」

「けんど、ここいらにも、きつと水妖がゐるんだんべ。」とフェーヂャがいふ。

「ゐねえよ、」とコスチャが答へる、「ここらはきれいで、明けつ放しな所だもの。ただ、川が近くにあるけんど。」

誰もが默り込んでしまつた。不意にどこか遠くの方に、呻くやうな、物音が、長く尾をひいて、響き渡る。時をり、深い靜寂の中に起こつて、上へ上へと昇つて行つて、暫く空中に漂ひ、やがて、靜かに吹き散らされてゆく、あの名狀しがたい夜の物音の一つである。耳をすましてみても、何も聞こえないやうで、それでゐて、やはり鳴り響いてゐる。誰かが、地平線のあたりで、長々と叫び聲をあげると、も一人、誰かほかの者が、森の中から細い、鋭い笑ひ聲でそれに應へ、微かな、しゅうといふやうな音が川のおもてを走つてゆくかのやうに思はれる。子供たちは顏を見合はせて、身慄ひした。

「*俺たちには神樣がついてて下さる！」とイリューシャが呟く。

「やい、臆病鳥！」とパーウェルが叫んだ、「なに魂消てんだ？　見ろ、馬鈴薯が煮えたぞ。」

（一同は鍋のそばへ寄つて來て、湯氣の立つ馬鈴薯を食べ始めた。ただワーニャだけは身動きもしなかつた。）「おい、どうしたんだ、おめえ？」とパーウェルがいふ。

けれども彼は蓆の下から匍ひ出して來なかつた。鍋は忽ち空になつた。

「あのな、お前ら、聞いたか、」とイリューシャがいひ出した、「この間、おら方のワルナギーツィであつたことを？」

「あの、土堤の上でけ？」

「うん、さうだ、あの土堤の上だ、切れた土堤の。あすこはとつても氣味わるいとこだ、さむしいとこだぞ。今にも化物が出さうなとこだぞ。まはりに窪つたまりだの、谷だのばつかしあつて、谷の中にはいつも蛇がゐるんだ。」

「うん、それで、どんなことがあつたんだい？　話して聞かせろよ……。」

「あのな、こんなことがあつたんだ。フェーヂャ、きつとお前、知んめえけんど、おら方のあすこにはな、土左衞門が埋まつてんだ。昔々、池がまだ深かつたころに土左衞門になつちやつたんだ。墓場はまだ見えら。少し見えら。こんなにな、土饅頭がな……。それでな、先頃、お邸の番頭が、獵犬番のエルミールを呼んで、『エルミール、驛遞へ行つて來う。』つて言つたんだ。おら方のエルミールはしよつちゆう驛遞さ行くのが役目だつたんだ。自分の預かつてゐた獵犬をみ

んな死なつしやつたんで。何でだか知んねけんど、エルミールの手にかかると犬が生きてかねんだ。本當にいつも生きてたこたあねえんだ。いい獵犬番でな、非のうちどころのねえ人間だけんど。それでな、エルミールは郵便とりに馬に乘つてつて、町でぐづぐづして、歸りにはもう醉つぱらつてた。その晩は明るい晩で、お月樣も照つてゐた……。かうしてエルミールは土堤のところにさしかかつた。通り道だから仕方がね。そこを獵犬番のエルミールが馬に乘つて來ると、土左衞門の墓のうへに、小羊が、眞つ白い、縮れつ毛の可愛らしい小羊が行つたり來たりしてゐる。それで、エルミールは『よし、一つあいつを捕まへてやらう、——なんで逃すもんか』と思つて、馬から下りて、兩手で抱き上げたんだ……。それでも羊は平氣の平左なんだ。エルミールが馬のそばまで來ると、馬は鼻を鳴らしながら飛びのいて、しきりに首を振るんだ。それでも、その人は『どうどう』と馬にいつて、羊を抱いたまんま馬に乘つて、また進んで行つた。羊を胸のところへ抱へて。エルミールが羊を見ると、羊もじいつとエルミールの顏を見るんだ。こんなにな。それで、獵犬番のエルミールも氣味が惡くなつて來た。『羊がこんなに人の顏を見つめるなんて、まだ聞いたことのないことだ。』と思つたが、別に變つたこともない。こんな風に羊の毛を撫でて、『羊、羊！』つていつたんだ。さうすると、直ぐに羊も齒をむき出して、『羊、羊！』つていふんだつて……」

この話をしてゐた子供が、まだこの最後の言葉を口にするかしないうちに、いきなり二匹の犬が一せいに跳ね起きて、聲すさまじく吠え立てながら、火のそばから駈け出して、闇のなかに消えて行つた。子供たちはみなぎよつとした。ワーニャは蓆の下から跳ね起きる。パウルーシャは大聲をあげながら犬のあとを追ひかける。犬の吠える聲は忽ちに遠くなつた……。驚いた馬の群れが右往左往するただならぬ蹄の音が聞こえる。パウルーシャは大きな聲で叫んでゐる、「白！」「黑！」……やがて吠える聲がやむ。パウルーシャの聲はもうかなり遠くの方から聞こえて來る……。また暫く經つ。子供らは何ごとかが起こるのを豫期してでもゐるかのやうに、そはそはしながらあたりを見まはす……。不意に飛ばして來る馬の蹄の音が聞こえる。馬は薪の積んであるすぐ側に、はたと止まる。鬣にしつかりつかまつて、ひらりとパウルーシャが飛び降りる。二匹の犬はまたもや光の環の中へ駈け込んで來て、赤い舌を出しながら、直きに坐る。

「何がゐた？　何だ？」子供たちが訊く。

「何でもないよ。」パウルーシャは手で馬を逐ひのけて答へる、「きつと犬が何か嗅ぎつけたんだよ。俺は狼だと思つた。」胸一ぱいに、せはしく呼吸をしながら平氣な聲で附け加へる。

私は思はずもパウルーシャの姿に見とれた。このときの樣子はまことに立派だつた。早駈けのために活氣づいた不器量な顏は、剛膽と堅い決心とに燃えてゐた。宵闇に棒きれ一つ持たず、彼

はいささかもためらふことなく、ただひとり狼を目ざして突き進んで行つたのだ……。『何てい
ふ豪い子だらう！』と私は彼を眺めながら考へた。

「それぢや、あの、みんならは狼を見たことあんのけ？」と臆病者のコスチャが訊ねる。

「ここらにや何時でもうんとゐる、」パウルーシャが答へる、「それでも、多だけだよ、怖えの
は。」

彼はまた焚火のまへにうづくまつた。地べたに腰をおろしぎはに、一匹の犬のむくむくした頸
に手をかけた。御機嫌をとられた犬は有難さと得意さを感じてゐるらしく、時をり横目にパウル
ーシャの方を見ながら、いつまでも首を動かさなかつた。

ワーニャはまた蓆の下にもぐり込んだ。

「イリューシャ、さつきの話は、ずゐぶん怖えな、」とフェーヂャが話し出した。裕福な百姓の
息であるから、いつも音頭取りにならなければならぬ（尤も自分では口數をきかない。自分の品
位をおとすのを怖れてでもゐるかのやうに）。「それで、さつき犬が吠えたのは、何かの化け物が
吠えさしたんだよ……、うん、さうだ、おれも聞いたよ、お前ら方のあすこは氣味惡い所だつ
てな。」

「ワルナギーツィか？　……きまつてら！　……あすこはとつても氣味わりいとこだよ！　あ

すこでは、何べんも大旦那様を、――死んだ旦那様を見た人があるちけよ。裾の長い上衣を著て、
行つたり來たりして、いつもかうして溜息ついて、地べたを見まはして、何だか搜してんだちけ。
一度はトロフィームィチぢいさんが出遭つて、『旦那様、イワン・イワーヌィチ、そんなに地べた
を御覽になつて、何をお搜しなすつてらつしやるんですか？』つて訊いたんだよ、……」

「おぢいさんがさう訊いたのかい？」とびつくりしてフェーヂャが念を押した。

「うん、訊いたんだ。」

「ほう、トロフィームィチは、とても偉かつたんだなあ……、さあ、それで旦那は何だつて？」

「『錠切草*をさがして居るのぢや』といふ返事だつたが、その聲がとても低くつて、『錠
切草』つて、こんな風なんだよ。『旦那様、イワン・イワーヌィチ、錠切草なんて、何になさる
のです？』といふと、『わしを壓しつけるんだ。墓が壓しつけるんだ、トロフィームィチ、だから
向ふへ脫け出して樂になりたいのだ』つて……。」

「ほう、とんでもない！」とフェーヂャがいふ、「して見ると、あんまり長生きしなかつたん
だな。」

「ああ、たまげた話だ、」コスチャが口を出す、「おれはまた、萬聖節の時しか、死んだ人には
會へないと思つてた。」

「死んだ人にはいつだつて會へるよ、」と、私の見たところでは、誰よりもよく村の迷信に通曉してゐるらしいイリューシャが確信ありげな口吻で引き取つた、「だけど、萬聖節の日には、その年に死ぬ番にあたつてゐる人なら、生きてる人でも見分けられるつてよ。見たければ、夜、教會堂の玄關に立つて、じつと街道の方ばかり見てりやいいんだ。さうすると、生きてる人がな、それ、その年のうちに死ぬ人が、道を通り過ぎるんだ。去年は、村のウリヤーナ婆さんが教會堂の玄關へ見に行つたんだ。」

「それで、誰を見たんだい？」とコスチャが好奇心をもつて訊ねる。

「見たとも。初めはずゐぶん長いこと、じいつと坐つて待つてたけんど、誰も見えねえし、なんにも聞こえねえ……、ただ犬つころが何處かで、かうして、しきりに吠えてゐる、いつまでも吠えてゐる、そんな氣がするんだ……、そのうちにひよいと見ると、小徑を男の子が襯衣一枚で歩いて來る。ようく見ると、イワーシカ・フェードセーフがやつて來るんだ……。」

「あの、この春死んだ子供？」とフェーヂャがさへぎる。

「うん、さうだ。あれがとぼとぼ歩いてて、顏を上げねえんだ……、それでも、ウリヤーナ婆さんには誰だか分かつたんだ……、でも、それからまた見ると、今度は婆さんが歩いてる。ウリヤーナ婆さんは一生懸命に見ると——、え、たまげるだらう！　……その道を歩いてる婆さんは

自分なんだ。あのウリヤーナ婆さんがな、自分でよ。」

「自分でなんて、そんなことがあるもんか？」とフェーヂャが訊ねた。

「ほんとだとも。嘘ぢやねえよ。」

「でも、變だなあ、あの婆さんはまだ死なないぢやないか？」

「だつて、まだ一年とたたないもの。見ろよ、あの婆さんはやつと呼吸をついてるだけなんだから。」

一同はまた靜かになつた。パーウェルは枯枝を一つかみ火に放りこんだ。急に燃えあがる焰に枯枝はくつきりと黑く浮き出し、ぱちぱちと音を立て、煙をあげ、燒けた端の方をいくらか上にしながら反りはじめる。光の反射は、はげしくふるへながら、四方八方に、わけても上の方に伸びる。不意にどこからともなしに一羽の白い鳩が、まつしぐらに明るい光の中へ飛び下りて來て、燃えさかる火影を一ぱいに浴びながら、一ところをぐるぐると廻る。やがて翼を鳴らしながら消え失せる。

「きつと家からはぐれちやつたんだ、」とパーウェルがいふ、「だからどつかへ出るまで飛んで行つて、出たところで夜明かしをするんだらう。」

「でも、パウルーシャ、あれは正直な人間の魂が天へ昇つて行つたんぢやないかな、え？」

パーウェルは火の中へ、もう一つかみの枯枝を差しくべる。

「さうかも知んね。」つひに彼もいふ。

「ぢや、話して聞かせろよ、パウルーシャ、たのむから、」とフェーヂャがいひ出す、「お前ら方のシャラーモヲでも、天の前兆は見えたのか？」

「お天道さまが見えなくなつた時のことだらう？　そりや、見えたとも。」

「きつと、お前らもたまげたらう？」

「でも俺らばかりぢやねえぞ。俺らの旦那様なんぞ、前から、今度、前兆があるぞつて、俺らに話してたくせして、暗くなつて來たら、自分でとてもたまげつちやつたさうだ。それから女中部屋ぢや、暗くなつて來たら、料理番の婆さんが、おめえ、直ぐに壺をみんな持ち出して、火搔きで毀しちやつて、竈ん中へ打つ込んぢやつたんだ。『もう世の最後の日が來たんだから、今さら物を食ふ人なんかないぞ』つてな。それで、おつゆがそこらぢゆう一ぱいこぼれたんだ。それから、村ぢや、こんな噂があつたつけ。白い狼が世界中を駈けまはつて人間を食つてしまふだの、生餌をとつてたべる鳥が飛んで來るだの、やれ、恐ろしいトリーシカの姿が見えるだらうのつて。」

「そのトリーシカつてのは、どんなの？」とコスチャが訊ねた。

「お前、知らねえのか？」とイリューシャは熱をもつて引き取つた、「お前、トリーシカを知んねなんて、お前はどこの者だ？　お前の村にや世間知らずが揃つてんだな、井戸ん中の蛙がな！　トリーシカつちふのは、いつかは世の中へ出て來るおつそろしい人間でな、とてもおつそろしい人間で、出て來ても、捉めえることもどうすることも出來ねえんだぞ。みんなが、たとへば百姓が、そいつをつかめべと思つて、棒もつて追つかけて取り卷いたつて、そいつは百姓の眼をくらまし、――すつかり眼をくらましちまふもんだから、みんなが同志うちをやるやうなことになるんだ。牢屋へでもぶち込んでみろ、さうすると柄杓へ水を入れて來て、飲ましてくれろつていふ、柄杓を持つて行くと、柄杓ん中へもぐり込んで、ふいつと消えちやうんだ。それから鎖でつないでおくと、ぽんとそいつが手を叩く。するともう鎖はばらばらに解けちまふ。まあ、こんな風にして、そのトリーシカは村だの町だのを歩きまはるんだ。このトリーシカは惡智慧がある奴だから、たくさんの基督信者を迷はすんだ……、それでもどうすることも出來ねえんだよ……、本當にあれは惡智慧のある、おつそろしい奴だからな。」

「まあ、さうだ、」パーウェルは持ち前のゆつたりした聲で話しつづける、「そんな奴だよ。つまり、こいつを俺らが方ぢや待つてたのよ。年寄り達は天の前兆が始まると、すぐにトリーシカがやつて來るぞつて言ひ出したんだ。そのうちに、前兆が始まつたのよ。村中の者はみんな、往